

反帝国主義・反スターリン主義
万国のプロレタリア団結せよ！

ハンガリア革命の記録 共産主義者別冊



日本革命的共産主義者同盟
全国委員会政治機関誌

反帝国主義・反スターリン主義

万国のプロレタリア団結せよ!

ハンガリア革命の記録

共産主義者別冊

革命的共産主義者同盟・全国委員会政治機関誌

●目次

刊行の辞

4 労働者評議会を中心とするハンガリア
革命の分析/広田 広

ドキュメント

22 ハンガリア革命における労働者評議会の
成立と消滅/F・テューチ
ハンガリアの血叫び

52 中央労働者評議会の結成/バラズ・ナジ

65 大ブダペスト中央労働者評議会の活動
/ミクロス・セベスチェン

72 ハンガリア放送の記録

93 キリアン兵舎の日記/ペーテル・コズトニー

126 ハンガリア革命日譜 53.3月~58.6月

共産主義者 定価 250円 (〒50円)

9号 ■中ソ論争と現代革命の展望/
武井 健人
■革共同四全総政治報告全文

10号 ■国際共産主義運動史(I)
/鍋木 潔
■戦後「日本型社会民主主義」
論ノート(上)/岸本 健一

12号 ■六五年春闘の教訓
■神山茂夫論(上)/田川 和夫
■戦後「日本型社会民主主義」
論ノート(下)/岸本 健一

(在庫12号、14号、15号のみ)

岸本健一著

日本型社会民主主義

世界に類のない「革命」性を誇示する日本型社民
の特質は何か? 派閥抗争のなかで流動と混迷を
つづける日本社会党の歴史と現状を鋭く切開して
戦闘的左翼への止揚の道程を模索する待望の労作
主要目次 ■日本型社民の現状/日本労働運動の戦
闘性と党/労働派とスターリン主義/戦後革命と
労働派/左社綱領と社会主義協会/日本型社民の
問題点

現代思潮社刊 定価 四五〇円

▶前進社でも取り扱います◀

▼労働者文庫▲

議会と現代革命

A5版36頁/¥60(〒20)

フランス帝国主義の

中国承認と労働者階級

タイプ版20頁/¥30(〒10)

四・一七ストと日本共産党

A5版66頁/¥100(〒30)

これからの労働運動

A5版28頁/¥50(〒20)

生活はなぜ苦しいか

A5版28頁/¥50(〒20)

侵略と戦争と反動の日韓条約

売切れ

▼労働者学習シリーズ▲

リストライキについて

A5版26頁/¥30(〒10)

ゲルス 資本主義について

(品切れ)

東京都豊島区池袋東1の50佐藤ビル 前進社

ハンガリア革命十周年に際して、本号を帝国主義とスターリン主義に抗して闘う日本労働者階級におくる。

今日、スターリン主義の没落と分解はなんびとも否定しえぬ形で深まっている。ハンガリア革命がハンガリア労働者階級の数十分の血をもつて切り裂いて見せたスターリン主義の反革命性は、止どまることを知らぬまでに腐敗を深めつつ、世界の労働者階級の前に自らを露呈させている。十年前には予想もできなかったほどにスターリン主義の自己破産は深まっているのだ。六〇年に開始された中ソ論争は、六三年以降は国家的対立にまで激化した。この過程で「左翼」として自らをおし出すことに成功したかに見えた中国共産党は、六四年秋のフルシチョフの突然の解任と時を同じくして最初の核実験を成功させることによりスターリン主義陣営に確固たる位置をきずいたかのように多くの人には暗った。

だが半植民地としてのきわめて遅れた生産力を受けつぎ、後進帝国主義国であったロシアより一層不利な地点から出発した現代中国が、「自力更生」「農業重視」政策を盲進するときその破産は明らかであった。さらにそれと同時に、中国路線の国際的な破綻は、A A 諸国での孤立にひきつづき、なんびとも予期しえぬドラスチックな形で表われた。六五年九・三〇事件によるインドネシア共産党の壊滅がそれである。

スターリン主義の破産は、いまやベトナムに熱い焦点をみせる現代帝国主義の危機とそれに主導されるヤルタ体制の根底的動揺と危機に、全くの無力・無対応に終始するという点に端的に現われているのであり、日本共産党の自主独立路線への転換と社民への恥知らずの追従もまたその一つの現われにすぎない。

一九六六年の今日、スターリン主義の自己破産わこうした形で現われているとき、日共や中ソスターリン主義をあざ笑い、その日和見主義をことばのうえで批判することは、いとまたやすいことであろう。だがスターリン主義の反革命性を、ソ連、中国スターリン主義官僚の圧制者としての特殊利害にもとづいて根底的に把握するもののみが真にスターリン主義をのりこえ、革命でありうるのである。こうした意味においてハンガリア革命の意義を正しくとらえることは、十周年の今日においてもきわめて重要な課題なのであり、われわれは反帝国主義・反スターリン主義の綱領的立場の深化のためにも、さらに進んでハンガリア革命の全面的解明とその意義の宣伝のために力を尽すつもりである。

わが日本革命的共産主義運動は、ハンガリアプロレタリアートの血の叫びを、自らの心臓の鼓動にしっかりと受けとめるところから、出発してきた。ハンガリア革命こそは、一九一七年ロシア革命に始まる現代世界の、資本主義と社会主義への分裂のなかにおける、社会主義の反革命への変質の悲劇を、あますところなく世界に向かって明らかにしたのであり、社会主義をめざして闘うすべての人にとって決して避けておろさぬことの許されない現代の問題なのである。

本号に収録した広田の二論文は、かつて『共産主義者』四号、『批判と展望』四号にけいさいしたものであり、F・テューケのドキュメントが『批判と展望』二号、三号に連さいされたものである他はすべて『批判と展望』四号のハンガリア特集から再録したものであることを記しておく。

一九六六年十一月一日

ハンガリア革命論

広田 広

1 世界プロレタリア解放闘争とハンガリア革命

全ての革命的労働者、全ての革命的共産主義者は、一九五六年十月ハンガリアプロレタリアートによって遂行された革命的武装反乱の中心に自己を置き、第二次ソ連軍介入に際して発せられた武装労働者の叫びを聞き、その深刻かつ熾然たる問題性を解明しなければならぬ。

「——兵士諸君！ 諸君の国家は諸君が自由を得るために流血の闘争という代償を払って樹立されたものだ。今日はその革命の三九周年記念日である。なぜ君たちはわれわれの自由を押しつぶそうとするのか？ 諸君は諸君に対して武器をとっているものが工場所有者やブルジョアジーではなく、ハンガリア人民であること、一九一七年に諸君がそのために闘つたのと同じ権利のために闘っている者たちであることを自撃してはいないか？」

ソヴェト兵士諸君！ スターリンググラードでは君たちは外国侵略者に対して君たちの国を守り通すことができることを実証し

た。なぜ君たちはわれわれが、われわれの国を守り抜いていることにどろんでいるのか？——兵士諸君！ ハンガリア国民に対して武器をとるな！」

「ドウナペンテはハンガリアでもつとも社会主義的な都市である。住民の大多数は労働者であり、権力は労働者の手中にある。

十月二三日の勝利的革命の後、労働者は国民委員会（ナショナル・コミテイ）を選出した。——都市の軍事司令官は国民委員会に緊密に協力した。——町の住民は武装されている。——労働者はファシストの行きすぎから町を防衛するであろう。しかしソヴェト軍隊からも又防衛するであろう。」（十一月七日、ドウナペンテ守備隊に対するソヴェトの最後通牒への回答）

「同志諸君！ 再びわが不幸な国において、血が流されている。ソヴェト連邦の指導者はスターリンとラコシのテロリスト的な植民地政策を復活させた。かれらは、われわれがかれらと友好的に交渉しようよびかけているのに、われわれを裏切つた。かれらの戦車と大砲は、再び大虐殺を始めた。——このような残忍な行動によつて、かれらは共産党が将来わが国で公然と誠実に存在することを不可能ならしめた。」

ヤノシユ・カダルとかれの組織した党は国民と世界を愚弄しようとするかもしれない。しかし、ロシアの大砲がハンガリアにおける民主主義と共産主義を破壊しつつあるのが事実である。——占領軍といかなる方法によろうとも、いかなる党の名目によろうと協力するものは、ハンガリアのみならず共産主義をも裏切るものである。われわれはかれらと闘うであろう。同志諸君！ すべての誠実なハンガリア共産主義者の場所はパリケートである。」（ライク放送）

質労働と資本との矛盾、プロレタリアートブルジョアジーとの階級対立にもとづく旧資本制世界を自己止揚すべく、世界プロレタリア解放闘争は開始され、「支配階級が他のいかなる方法によつても打倒されえないという理由から必要なばかりでなく、更に、打倒する階級が革命においてのみ、全ての古き極端の汚物をはらいのけ、社会の新しい建設の能力を賦与されるに至りうるという理由からもまた、必要である」この革命史は、一八四八年のヨーロッパ、一八七一年のパリコミューン、一九一七年のロシアペトログラード、そしてこの一九五六年のハンガリアプロレタリアートの反乱へとつながれた。まさに「プロレタリア革命は、たえず自分自身を批判し、自分のすすむあいだにたえず中断」してきたし、「一見完成したと見るものへ、もう一度あらたにはじめるためにたちかえり」、「自分のはじめのころのみ、中途半ばさま、よむさま、くだらなさや無慈悲に徹底的にあざむき……」ついに、おどろきあともどろきあとも不可能にする情勢がつくりだされ「いき、世界共産主義革命完遂の必要充分条件を獲得するであろう。」

一八四八年、ヨーロッパ各国プロレタリアートは蜂起し、自らをブルジョアジーと対立する一大政治勢力とし、世界史の舞台に資本主義の墓場人として登場し、かがやかしい「共産党宣言」をかかげた。

一八七一年、普仏戦争に際して、パリプロレタリアートは蜂起し、階級の本質により、共産主義の諸原則をつらぬくプロレタリア独裁権力を解放史上はじめて樹立したのであった。パリコミューンが、その未成熟のゆえに、ヴェルサイユへの先制攻撃を行わず、国立銀行を放置したがゆえに残虐な弾圧の中に敗北したとしても、その偉大な階級の力量と教訓とを自分のものとして感じないものがあるか。「労働者階級は既製の国家機関を単に掌握するだけでは、それを自らの目的のために運用することはできない。」

一九一七年、それまで長期に亘つた「ベルンシュタインの平和」が第一次世界大戦によつて打破され、第二インターナショナルと「社会主義」者の排外主義の裏切りのなかで、宣言とコミューンの思想をもつて、ロシアプロレタリアートは労働者評議会（ソヴェエト）権力を樹立し、世界革命の前衛として登場し、最悪な諸条件と反革命干渉の中で闘いつづけたが、結合さるべきドイツ革命の致命的敗北は、ロシアにおける戦闘的プロレタリアートの虐殺による激減、生産力の加速的低下にともない、革命家達の努力をこえて「十月の変質」をもたらした。レーニン死後のコミンテルンの裏切りは、その後のドイツ革命、英露委員会、中国革命と国共合作、フランス八民戦線、スペインの内乱に現れ、トロッツキーの暗殺とスターリンの勝利によつて、決定的となり、数知れぬ反革命の担い手であるスターリニストは、その「一國社会主義」戦略から、現在に至り、

帝国主義の反革命と「平和共存」する、反動的な「地方的社会主義諸国」をなしている。ロシア十月革命とそれにつづく世界革命のスターリニスト的裏切りは、国際プロレタリアにとつてくめどもつきぬ教訓にみちている。世界革命の戦術、党組織、統一戦線、プロレタリア自己解放の諸条件に関する問題を、革命的マルクス主義の立場から検討し、学びえたとすれば、そして更に学びつづけることすれば、その現実的動力を大きな犠牲を払って世界労働者階級に与えたものこそ、一九五六年のハンガリアプロレタリアートの闘争であつた。

一九五六年、ハンガリアプロレタリアートは非スターリン化闘争の極限として武装反乱に激起し、二度にわたつて「社会主義」のソ連軍と衝突し、労働者評議会を樹立して抵抗したが流血の弾圧と反革命のカダール政権のもとに敗北しなければならなかつた。大スターリン像はひききたおされた。スターリンの偶像は粉砕された。が、台座はのこされていた。

この革命によつて何が暴露されたか？

この革命の敗北にいかなる教訓を見いだすべきか？

現代世界の帝国主義的抑圧諸機構とスターリン主義的抑圧諸機構とは、その軍事政治経済的物質力をバックとして、国際労働者階級に對する二つの支配形態となつてゐる。両者は、相互に敵對することによつてプロレタリアートの抑圧を正当化しており、それゆゑに、ハンガリアプロレタリアートの闘争を、それぞれ特有な方法で抑圧し、その意味をおしくし、その動かしがたい革命的な事件を世界から追放し、忘れさせようと試みてゐるのだ。

帝国主義者は、その支配階級としての本質と本能により、いかな

り、帝国主義者とスターリン主義者の支配の二条件である。

一九五六年の日本プロレタリアートが、ハンガリア革命に對する左翼の同情を示す組織をもちえず、逆に右翼的社会民主主義から反共的人道主義の同情を表明せざるをえなかつた事実、一方では、反スターリン主義的の反乱をファシスト的反革命として弾劾するスターリン主義者の居直り、他方では、スターリン主義的汚物に對する反對を組織された政治的潮流とすることなく、深刻な孤立感と疑問をいだきつづければならなかつた戦闘的労働者とインテリゲンツィア、このような苦悩にみちた混乱、更にまた、一方における解党主義的解決と他方における「沈黙」——「共産主義？ 一体ハンガリアはどうなのか？」という労働者の間に對して明白な解答をなしえずにいた日共労働者黨員の心情と懷疑。——ハンガリア学生代表との会談を拒否した左翼スターリン主義的全学連執行部（！）

だが同時に、この深刻な混乱の背後にこそ、スターリン主義的イデオロギーに對する根底的な批判と革命的労働者グループの結合が準備されていたのであり、日本反スタ運動の端緒が内包されていたのであつた。深刻な自己批判的検討と反省、トロツキズムの主体的検討とレーニン・トロツキー・ボルシェビズムの獲得、五七年国鉄新鴻闘争にはじまり、勤評闘争、警職法闘争、安保闘争、政暴法闘争へとつづく過程で、一步一步展開されてきた日本革命的共産主義運動。反帝、反スターリン主義世界革命戦略にもとづくプロレタリア党の創設をおしすすめる革命的労働者組織の誕生。このような日本における国際的事実こそ、なによりもハンガリアプロレタリア革命の国際的成果であつた。

六〇年にはじめて「ロシア革命とハンガリア革命」の討論集會が

る場合にも、労働者階級による政治権力のテンプレクとプロレタリア権力の樹立に敵對する。彼らの、「自由のための闘い」が、帝国主義に反對し、スターリン主義に反對する労働者権力の樹立に發展することを使らは最も恐れているのである。そのことは現在進行形のドイツ危機における両ドイツ・プロレタリアートに對するアデナウアー・ケネディにそのままてはまるであらう。

スターリン主義者もまた、帝国主義者に反對し、かつスターリン主義に反對する労働者の反乱を最も恐怖しているがゆゑに、その運動と闘争に對して「ファシスト的反革命」の名を与え、労働者大衆がファシストに転向するというおどろくべきロジックをでつちあげねばならないのだ。西ドイツにはヒトラー主義者が集つてゐるという理由で、「社会主義諸国」防衛のために西ドイツプロレタリアートの存在に一言もふれず、その存在に對する核兵器の報復政策を語つてフルシチョフ・ブルヒトをみよ！

かくして帝国主義者とスターリン主義者とに對してハンガリアプロレタリアートの革命的意義を問うことはナンセンスである。

問題は、万国の労働者が、スターリン主義から訣別した革命的共産主義運動の光によつて世界革命の教訓——一八七一年のパリ、一九一七年のペトログラード、一九五六年のブダペストをつらぬくプロレタリア自己解放闘争の論理——を主体化することにある。

国際プロレタリアートの階級意識形成過程は、世界革命の反省をモメントしている。ロシア革命の本質とスターリン主義的汚物との混同こそ、現代プロレタリア階級の悲劇的精神的条件であ

革命的左翼のグループによつて開催され、六一年の現在、その五周年のための大衆的集會が計画されている。再開されたソ連核実験の反プロレタリアの本質的バクトロと、このようなロシア・ハンガリア革命の革命的総括討論との結合こそ、日本プロレタリアートの階級意識の成長を意味するものでありハンガリアプロレタリアートとの眞の団結の前進であらう。

ロシア革命のスターリン主義的歪曲に對する批判的検討は当初、パリ・コミューンの原則的立場とトロツキーの「裏切られた革命」からなされた。ハンガリア革命以後は、ハンガリアの光によつて行われた。このような反省にもとづいた反スターリン主義運動の展開の一步一步は、ハンガリアの教訓の具体的認識とその具体化の一步一步であつた。ハンガリア革命はいまやその成果である革命的共産主義運動の光によつて、国際プロレタリアートの前にますます鮮明な姿を表わすであらう。ハンガリアの教訓は、ロシア革命に与えたパリ・コミューンの影響にまさるともおとらぬ影響を現代革命の来るべき激動期に与えるであらう。万国プロレタリアートの勝利こそハンガリアの「問」に對する最後のそして唯一の解答であり、犠牲に對する眞の葬送である。

ハンガリア革命とは何か？ そこから抽きださるべき教訓は何か？

2 革命の過程

A スターリン主義的前提条件

「革命の基本的な政治的過程は、階級が社会的危機から發生する

諸問題を漸次に理解することであり、連続的にますますちかづいてゆくことによつて、大衆が積極的に態度を決定することである。」(トロッキー「ロシア革命史」)

「革命的事件の力学は、革命前にすでに形成されているところの、諸階級の心理の、急激で激烈、かつ熱情的な変化によつて、直接決定されるのである。」(同上)

一九五六年の反乱の条件は、一九四五年の赤軍による「東欧の解放」と、それにつづくいわゆる「人民民主主義国」の樹立にともなうスターリン主義体制の移植という事実の中に内包されていた。

「解放」？ それは、労働者民主主義の直接的で組織的な形態である労働者評議会(ソヴェト)によつて行われたか？ 否！ ロシア軍の占領という労働者評議会なき「解放」であつた。四年のヤルタ協定(スターリン対チャーチル)によるヨーロッパの分割は完了した。東欧革命は次のように進行した。

連合軍管理委員会にもとづくブルジョアの選挙(労働者評議会なき「赤軍の占領」下における)と共産党の敗北につづく連合政府の樹立。労働者の直接的生産管理なき国有化とそれにとまなうスターリン主義的経済政策の実施(秘密経済協定にもとづくクレムリンの賠償の要求と取立て、物的生産力主義的な重工業優先、反プロレタリアの出来高賃金制とノルマ労働制、経営管理者の官僚的任命制、土地改革後の農民の意識水準を無視した強制的集団化など)。それを政治的に保障するための秘密警察制、(国家の粉砕ではなく首のすげかえによる利用)一方における労働者大衆から遊離したマヌーヴァー的な政府内多数派工作、他方における、クレムリン派による古参ボルシェヴィキの肅清と処刑、社会民主党との無原則的統一と

となつた。……」

「ロシアはホルテイ政権の將軍ペーラ・ミクロシユを、解放されたハンガリアの初代首相として受け入れたのだつた。……」

「しかし、そののちブダペストで、また全国で起つたロシア軍の暴行、無差別射撃掠奪、そしてきりがない強姦は住民に深いショックを与えた。それは、かれらが決して忘れることも、許すこともできぬものだつた。

「一九四九年の夏になるともはやこれ以上見せ掛けをつくる必要は全くななくなつた。ハンガリア憲法は改正され、ハンガリア人民民主主義となつた。ラーコシによれば、人民民主主義というのは「ソヴェト方式のないプロレタリアート独裁制である。」(『正しくいい直すと、「労働者ソヴェトなきスターリニスト党専制」である。』引用者)

「ハンガリア労働者の平均収入は月に千フオリント(十ドル)だつた。AVOの下士官の月収は八千から一万六千フオリントまでの辺だつた。かれらの成績は旧矢十字党の撃撃隊員やそのほかの社会の層から補給されたものたちである。かれらは新しい共産主義特権階級だつた。――「最初、その方は小地主党に対して、のちには社会民主党に対して使用されたが、一九四九年――チト――主義肅清の時期――以後はもつぱらコンミニュニストに対して使用された。――」ついに、警察の長官であるペーテルまでもが逮捕された。

一九五〇年、出来高払制が導入された。まもなくノルマ制が採用された。この気ちがいじみた生産攻勢は、事実、量においては大き

醜悪きわまりないライク裁判のでつちあげと処刑(スターリンの最も忠実なる弟子ラコシの内相ライク自身が反革命と命名された後処刑された。その虚偽の自白を強制した人物が、その時の内相ヤノシユ・カダルであつた。後にカダルも拷問をうけるというスターリニスト内部の悪矛盾的テロリズム!)

ハンガリア労働者のこのようなスターリン主義的「労働」と抑圧、秘密警察の監視に象徴される政治経済制度に加えて、国際的な領域における帝国主義者とスターリン主義者の危険な関係は労働者の政治的要求とその実現の組織を最後まで許さなかつた。大戦後の危険な競争は、マーシャルプランに対するスターリン主義的計画経済とコミンフォルム、コミンフォルムの結成に対するNATOの反撃、NATOに対するワルシャワ軍事条約(そしていまや六年の核実験競争へと続く……)の締結と進むことによつて、ハンガリアプロレタリアートの全ての出口をふさぎ、そのようにして反乱の一般的条件をつくりだしたのだ。

非共産主義者G・ミケシユがこの間の報告を行っている。――「一九四四年三月、ドイツ軍は侵入して、ハンガリアを占領した。……ハンガリア矢十字党の指導者フレンチツ・サーランが首相となり、同時に国の元首となつた。恐しい流血と殺りくの何週間が続いた。サーラン統治時代の恐怖は、それ以前それ以後に起つたなにごとにもましてすさまじかつた。ハンガリア軍最高指令官ペーラ・ミクロシユ將軍と、かれの参謀長ヴェレシユ將軍はロシア軍に投じた。一九四四年十二月、ロシアはデブレツェンに新ハンガリア政府をたて、ミクロシユ將軍を初代首相とした。あまり知られなかつたコンミニュニスト、イムレナジは農業相

な増産をもたらしたが、質の点ではなさないほどの低下をもたらした。労働者と労働との分裂の量は拡大されていた。それに加えて、労働者の全収入の最少限の十二%を占める「平和国債」の制度。

更に「自発的交代制勤務」の制度。即ち一九五〇年四月から五月一年二月までの間に、(一)ハンガリア解放を記念して、(二)メーデーを祝つて、(三)地方評議会の設置を記念して、(四)朝鮮週間、五憲法記念日、(六)ラーコシ釈放十年記念、(七)一九五〇年プランの期限前完遂、(八)評議会選挙を祝つて、(九)ロシア十月革命の三十三週年記念、(十)スターリンの誕生日、(十一)第二回ハンガリア共産党大会を記念しての競争。スタハノフ運動のハンガリア版、コラヴルニコヴアあるいはガスダ運動、コヴァリヨフ運動、ナザローヴァ運動、バーニン運動、クズニエトロフ運動。五一年十二月の新法令(食料と種々の消費物品の価格を平均八十%引上げ労働者の賃金を十%乃至二十%ふやした)。引上げ賃金は、ノルマの完遂次第によるわけだが、十二月末にならねば支払われないのに対して、引上げ物価の方は十二月二日に実施されることになつた。そのためのブダペストのひとびとの短評「帝国主義と戦争挑発者たちにまたもや強打、そしてわれわれは飢え死にするだろう」そしてまたソ・ハ合弁企業、普通の通商協定、品質審査員権がソ連にあり、違約金をとれるような個々のハンガリア工場との単純な協定。専門家の反対も何のその監督たちは自分の割当完遂のためにだけ夢中。一定の輸出プラン完遂のためには価格などかまつていられなかつた。

炭坑か、「教育労働キャンプ」への移送。強制労働。年寄りや病人は数週間、健康なものは二年で死に、自殺するものもあつた。彼等の多くは旧貴族、ホルテイ政権の元官吏、大きな卸し商人であつ

たが、「あなつてはたまらない」といつた気持を他の階層に、労働者に与え、よりましな労働強化にあまんじなければならぬはめに
おいこむという効果は充分にはたしたのであった。

労働するものの自主性なき生産性向上の結果は当然労働者の破壊となる。農民の強制集団化と東ドイツへの農産物強制輸出による食料不足はこれにわをかけ、ハンガリア経済は荒廃をきわめた。

イムレ・ナジは五三年六月に、この潰滅的な状況をひきうけねばならなかつた。この雪どけは一つには、マレンコフの「勉強」即ち、ピルゼンと東ベルリン暴動からの「スターリニスト的教訓」の結果であつた。だが、ラコシは党事務局に座つていた。ナジは危機を救済したか？ 平和共存路線の支持者であり、民族共産主義者であるナジの計画はその政治的中間主義と経済的アウタルキズム（自給自足主義）の幻想にもとづく「自由化」「民主化」をめざすものであつたがゆえに、マレンコフ的失敗を追求され、スターリン死後もつともスターリンに忠実であつたラコシの攻撃によつて再び追放されたのであつた。

ナジのこの政治経済的中間主義こそ、ラコシ一派よりましである
と「支持」された理由であるが、十月の反乱におけるクレムリンと労働者評議会との間の調定者の役割を荷い、遂に、小ブル的妥協と
国連へのよびかけへと転落すべき「限界」であつたのだ。

全て直接的生産者に対する抑圧の体制は、たえざる「かくされた内乱」であつて、スターリン主義体制とその労働制もまた例外ではない。このような潜在的（ポテンシャル）内乱ともいうべき状況は、必然的にまずその思想的表現を生みだし、政治的行動と政治的衝突となり、顕在的（アクチュアル）内乱の勃発とならざるをえな

い。いうまでもなく、反乱勃発の条件と反乱勝利の条件とは異なり
権力獲得の条件と権力保持の条件とは異なる。

帝国主義とスターリン主義反動の「共存」と「支配」によつて規定される現代世界の政治経済的変動がその諸条件を一般的に規定するとはいえ、特殊には、その国のプロレタリアートの政治的組織性（経験と戦闘性、階級意識の水準と自らの党）がその諸条件を規定する。党なくしても反乱はおこる。党なき反乱は必然的に敗北する。プロレタリア独裁の成立でさえ、全干渉軍の中にあつては世界革命へと永続されえぬときは歪曲されるのである。

B 反乱の諸段階

ハンガリア的抑圧と受難（パツション）に対して、全ての桎梏をはねのけるべき意志と情熱（パトス）と決意、革命的確信と主体性は準備されていた。では永続革命の展望をもつ党なきハンガリアプロレタリアートはいかにして反乱に立ちあがつたのか？

ロシア共産党二十回大会（五六年三月）におけるスターリン批判と「社会主義の多様な道」の可能性の提起は、たとえその「批判」が小スターリン主義者による大スターリン個人崇拜の批判であり、「多様な道」が「平和革命」と「民族社会主義」の幻想への「道」であるとしても、東欧民族社会主義者達（ゴムルカ、ナジ）にとつては、闇の中の光として感じられたのであつた。コミンフォルムの解散と、ページされ、肅清された「コムニスト」達の名譽回復がそれにつづいた。ナジは再び帰き、処刑された「反革命分子」ライクは名譽回復した。「雪どけ」によつてナジがうまくやつてくれるかもしれないと思われた。

だが、ライクの葬列に加わつた労働者と知識人はライク処刑の張

本人ラコシが居坐つており、東欧一の頑固派として二十回大会に關する「ブラウダ」をささしおさえる彼に憤激した。「文芸評論」誌は一せいにスターリン主義者を公然とこきおろし、ペテフィサイクルの大衆討論会は徹夜で新しい空気について論じ、党から派遣されたスターリニストを委員、全員落選せしめていた。フルシチョフでさえ味方だと思われた。

ポーランドでは、六月二十八日のポズナンにおけるスターリン大車輦工場二万の労働者の暴動と、反乱者の無罪判決が決定され、大衆的圧力をバツクに、ゴムルカ分派が勝利をおさめつた。十月十九日の政変は、ゴムルカ路線の勝利を決し、一連の非スターリン化政策が提起された。

ポーランドのプロレタリアートもまた、独ソ不可侵条約、モロトフリツベントロップ協定、ワルシヤワ反乱におけるロコソフスキの裏切り以来、うつつ積した不満を爆発せんとしていた。が、プロレタリアートに対しては帝国主義者の存在とその圧力を、クレムリンに対しては、民族的不满をつきつけることによつてゴムルカの妥協が成立したのである。（ポーランドはいまだに経済的政治的に二つの首をもっているのだ）

この「勝利」はしかし、ハンガリア人民にとつての最良のモデルケースとして受けとられたのだ。東風は西風を任せんとする（？）
「平和的共存」世界は、それがハンガリアにおいても可能であるかのごとき幻想を与えた。

ソ連外交評論誌『ノーヴォエ・ヴェーシヤ』（一九五六・二・二二）は「去り行く年」と題した巻頭無署名論文の冒頭で、次のように一九五六年度の国際情勢を回顧している。

「多事多端な年であつた——という云い古された文句が一九五六年にはとくにあてはまる。まつたく過去十二ヶ月間の国際的發展は多事多端だつた……現在、世界に生起しつつある事象は、一九五六年下半年の国際情勢に生じたドラマティックな諸変化の原因を考察することなしにはリアルに把握することはできない。これらの変化は、国際緊張の緩和から逼迫へ、冷戦の減退から新しい燃焼へ、戦争の危険の後退から再発へ、というかたちでおこつた」

一九五五年七月のジュネーブ会議は、『世界経済年報』（一九五六年第三・四半期）の筆者をして「われわれは一九五四—五五年の世界景況を分析する場合に若干の誤つた考え方の上に立つていた」といわしめたようなブルジョア世界経済（大幅な生産の上昇、比較的安定した物価状態、世界貿易の拡大など）にともなつて、「平和」ムードをかもしだしていた。

後半の転期。六月二十八日、ポズナン暴動。七月二十一日、西ドイツ徴兵法発効。七月二十六日、エジプト、スエズ運河国有化宣言につづくスエズ問題の緊迫化。八月十七日、西ドイツ、憲法裁判所共産党の活動を憲法違反とする判決、同党および裁判所が共産党系とみなすすべての民主団体の非合法化を決定、共産党の解散と財産没収、地方議員の資格剥奪。そして遂に、十月十九日、ポーランドの「ゴムルカ政変」。同二十三日のハンガリア暴動の発。

フルシチョフもアイゼンハウアーも、そして当のハンガリア人民自身、あの事態を予想することなどおよびもつかなかつた。フルシチョフは二十回大会による上からのなしくずしのスターリン批判で口をぬぐい、コミンフォルムを解散（四月十七日）してチトーに秋波を送り、日本と国交を回復（十月十九日）成功したと思つてい

た。アイゼンハウアーは、七月一日からはじまった鉄鋼ストによる生産指数の低下が、九、十月には一四五（一九四七—四九年、一〇〇）と史上最高を記録して回復するのを見ながら、スチーブンソンとの選挙戦に急がしかったし、いわば「反革命」の方も英仏がスエズで悩んでいる最中だからいつものとおりというわけであった。英仏がスエズで難行し、西独でアデナウアーが体制強行をはかりつつ米の弱気に抗議している以外大勢は軟化していた。スーダン（一）、一（マライ）（二、八）、モロッコ（三、二）、パキスタン（三、二）、チュニジア（三、二十）が独立し、インドネシアがハーグ協定廃棄、オランダ・インドネシア連合からの脱退を宣言（二、十五）していたからである。

十月二三日。ブダペスト大学生二万の平和的デモ、知識人、夕刻からは労働者、部分的には兵士が合流して三十万。スローガン「ポーランド支持！ ナジの首相復帰！ ソ連軍撤退！」内相によるデモ禁止令とその撤回。第一書記ゲレの警告に対して、学生代表二十項目の要求を放送要請。拒否される。

要求。——政治的、経済的平等の基礎に立つハンガリー・ソ連関係ならびにハンガリー・ユーゴ関係の樹立、ソ連・ハンガリー通商協定とハンガリーの対ソ賠償内容の公表、相互に他国内政不干渉、ソ連軍の撤退、ウラニウム鉱の合理的利用（ソ連がハンガリー・ウラニウム鉱に特殊権利を持ち、ほとんど独占）——工場における労働者の自治、労働者の生産ノルマの改訂とスト権の承認、強制配給制度の再検討、農業の再編成、個人農への援助——ブダペスト市内にある巨大なスターリン像の撤去、マチアス・ラコシとミハリ・フアルカスの公開裁判、新指導層を選ぶため労働者党（共産党）

つて生れたハンガリー労働者、学生の熱意を利用するあらゆる挑発行為——われわれの幸福と政治的努力を乱すかもしれない——そうした挑発行為をいっさい排除すること」（ハンガリー作家同盟コミユニケ）を確認していた矢先であった。この「挑発行為」はフアシストからではなく、反対に、全く予期しえない警官によつてなされた。

絶対的正当性を確信しているデモの労働者学生、兵士は「反革命暴徒」の名をあげながら、未だそれが自分のことだとは考えてもみなかった。どこかに「反革命」があるならば武器をとらねばならぬ。フアシストを粉砕するために、武器工場の労働者と兵士は武器をとつた。その武器は同時にデモ隊に発砲したA V Oに向けられた。

ナジはA V O（秘密警察）の銃口にかこまれて首相の椅子へと強制されていた。ゲレの陰謀は、最後の信頼された共産主義者を前にたてて、その名によつてソ連軍を要請したのである。ハンガリアの「道」は決定された。

十月二四日。未明、ソ連戦車隊ブダペスト侵入。ブダペスト市街戦激化とともにハンガリー各地に反乱拡大。

ソ連軍の侵入によつて、反乱は決定的なものとなった。ソ連戦車の虐殺は、全ての疑点の一つ一つ事実をおきかえたのだ。（ソ連兵士の一部は「フアシスト制圧」のために向けた銃口の先に労働者、学生がいることを知って驚き、ロシア語でよびかけられることによつて、動揺し、命令に反して、中立化した）ハンガリア軍は、ぞくぞくと反乱側に参加した。普通警察の一部でさえ反乱に参加した。秘密警察は最も積極的に反乱を弾圧した。

大会の開催、一党以上による自由、秘密選挙の実施、——ハンガリーの伝統的な国章とハンガリー軍制服の復活、三月十五日と十月六日を国際日とする、など。

これらの最初の要求にみられる雑多な要素（民族主義的なもの、復古的なものなど）をとりのぞいてみるならば、そこには、非スターリニ化をめざす労働者の要求が表れる。しかしポーランドの改良の可能性が信じられており、要求を実現する自らの組織的保障についてはきわめて本質的ではあるが抽象的な「工場における労働者の自治」という規定にとどまっていた。

ソ連圏における非スターリニ化の実現という未知の世界、加うるに、ポーランドにおける「妥協」は、国内的には党内ナジ派とペテフィサークル以外に自らの政治的表現をみいだしえなかつた労働者の組織状況とあいまってこのような「表現形態」をとらざるをえなかつたのである。

ラジオブダペストの放送拒否をめぐって、デモ隊と警官との対立は過熱化し、デモ隊の代表は局内からいつまでたつてもでてこなかつた。デモ隊の憤激と警官の恐怖は頂点に達する。警官の威カクの空砲でさえ、充分「反乱の挑発」の役割をはたしたのであろう。これまでにない自由な意気は、不安をのりこえて、警官をおしのけはじめた。「不安」をたちきつて決意に変えた決定的なもの——

発砲。射殺された！ 電撃は全市をつらぬき、一瞬、動揺と混乱が渦巻いた。内相の目前には「フアシストの亡霊」が表れた。「鎮圧せよ！」

平和なデモ隊はさきに「まず第一に社会主義的民主主義の道におけるいつその発展を確保すること。第二にポーランドの事態によつて生れたハンガリー労働者、学生の熱意を利用するあらゆる挑発行為——われわれの幸福と政治的努力を乱すかもしれない——そうした挑発行為をいっさい排除すること」（ハンガリー作家同盟コミユニケ）を確認していた矢先であった。この「挑発行為」はフアシストからではなく、反対に、全く予期しえない警官によつてなされた。

（反乱に混入する本ものの反革命挑発分子の行動は、反乱全体への無差別攻撃や、政令によつてではなく、労働者の組織的武装による摘発によつて最も有効に粉砕しうるので。この課題は、反乱の進展の過程で、労働者武装隊による検挙によつて、ますます有効にはたされる傾向に向つていた。）

ラコシゲレ派のスターリニスト、秘密警察、スターリニスト的将校による、奇妙な「政府軍」は、次第に兵士の反乱参加と、中立化によつて、ますます、機能を失つていき、全戦闘は、反乱側とソ連軍との衝突という性格をおびていった。ナジはどうしていたか？

党は中央委員会をひらいたが、反乱の性格とソ連軍出動の真の意味を理解しえず、新中央委員は、ラコシゲレ派とナジ派の混合物であった。このような基礎の上で、閣僚会議議長となつたナジは、「平和と秩序」をよびかけ、「党を支持せよ、政府を支持せよ」とくりかえした。ところで、反乱軍とソ連軍との戦闘中に、反乱分子の武装解除のみをかたり、ゲレとラコシの子分をそのままにしている「党」を支持せよとよびかけることは何を意味していたか？

労働者の工場防衛隊が組織された。だが彼らの役割は、反革命分子粉砕に対してだけでなく反プロレタリア的スターリニ主義者の追放の力としての位置を与えられねばならなかつた。

十月二五日。戦闘継続。ゲレ第一書記解任、カダル第一書記。カダルはいいつづけた。「……誠実なデモに数時間後には反社会主義分子が加わりました。そうして反革命分子の思想どおりに人民民主主義政権に対する武装攻撃にと変質したのです。……」（おどろくべき思想ではないか！）

ナジははじめて「閣僚会議議長として私はハンガリー政府はハンガリー人民共和国とソ連との関係、とりわけハンガリー駐留ソ連軍の撤退についてソ連と交渉を始めるであろう」と放送した。

しかし、労働者達は、ナジ政府のよびかけに耳をかたむけながらも、工場防衛隊とともに、「秩序」に反する(?) ストライキのためのストライキ委員会を組織しはじめていた。このナジ政府と労働者組織との深まる分裂が、「ナジへの支持」と「ナジとの交渉」にもかかわらず、ハンガリア革命の運命を決定した。

十月二六日。ソ連軍の攻撃つづく。各地に暴動とならんでゼネストが波及しはじめる。労働者評議会が組織され、それにもとづいて、要求、声明、宣言が政府に対して発せられた。

労働者評議会と兵士評議会の結合、放送局の管理、全国的結合への動き。その圧力をうけながらもそれと分裂した地点で、ナジによる新内閣が出現する。

十月二七日。ナジ新政府成立。各地の労働者評議会との併存。

ジェル放送。「市民諸君！同志諸君！本日つまり一九五六年十月二七日、ジェル・ソプロン地区のハンガリー労働者行政委員会が設立された。——われわれは戦闘を即刻中止しなければならぬと思う。そのためには全国の国家保安委員会は解散しなければならぬ。またそれは武装解除され、その武器はハンガリー軍に接収されねばならない。

次に労働者党中央委員会および政府はハンガリーに駐留しているソ連の武装部隊が戦闘を停止し、ソ連軍のハンガリー撤退の保障をとりつけるよう措置されるべきである。同党地区委員会はジェル・ソプロン地区の労働者の権力およびその指導機関であり、労働者

評議会、兵士評議会、農民評議会、インテリ評議会、青年評議会を含む州人民評議会を支持する。」

労働者評議会の結成およびかけにしたがつてソ連軍の中立化傾向が表れた。

十月二八日。部分的停戦。AVOの廃止。停戦命令。ユーゴの内閣承認。全ハンガリー国民委員会の創設。カダルを委員長とする六人委員会(ナジを含む)。労働者評議会と現政府との分裂の深化。

「新しい臨時政府を要求する。この政府には、ラコシ政権に奉仕したことがある閣僚は加えない。——新しい政府は、全国の全労働者評議会と学生会議によつて出された要求を、施政計画に含め、実行する。——」(ボルシヨド州労評放送)

十月二九日。「暴動は反革命で西欧側の陰謀」というプラウダの論評を党機関紙「サバド・ネツプ」が反ばくし「暴動はハンガリー国民の意志による。陰謀云々はハンガリー人を侮辱する」と発表した。(当紙にも革命委員会が結成されていたからである)

「ナジ首相の声明はわれわれの要求の多くを含んでいる。しかしわれわれは演説や約束だけを受諾することはできない。——党幹部会の構成にもわれわれは満足できない。党幹部会の五〇パーセントは今なおラコシ同調者によつて構成されている。——アプロ、キス、サントの三名は直ちに、党、国家のあらゆる職務から解任されなければならない。——」(ボルシヨド州労評)

十月三十日。ソ連政府「東欧撤兵の用意あり」と声明。各地で戦闘終熄(ブダペストだけで死傷者五万といわれる)。ハンガリー革命会議設立。ジェーコフ、ソ連軍撤退を命令。

革命は危機を脱出して勝利するかに思えた。ライク放送は、その

とき「ちようどただ今キスヴァルダから軽、重武器を積んだ数千の戦車がわが国に流れ込んでいるとの報道がありました。機械化歩兵隊がニレジュハザに向つて進んでいます。新しいソ連部隊！ジェーコフ元師、あなたはこのことを知っていますか。」というおどろくべき警告を発していた。ところが一方、相かわらず、ナジは全国革命会議の代表と「交渉」をつづけていた。

十月三十一日。ナジは「勝利」を確信していた。自らの手にある権力を自覚しえない労働者評議会。ソ連の新鋭部隊のハンガリー侵入。

十一月一日。ナジ「ハンガリー中立とワルシャの条約脱退」を声明。ナジ、カダルとともに「社会主義労働者党」を結成。全労評は、一せいに「ソ連軍の撤退」を要求。スト再開。

十一月二日。ソ連軍(兵力二十万、戦車四千七百、飛行機八百)全面攻撃開始、ブダペスト包囲、各地で激戦。ハンガリア政府の抗議。ナジの幻想は、国連への中立保障の申し入れに集中的に表れた。カダルの動揺。第二次介入の性格は、ハンガリア革命について全くつんばさ敷におかれていた新しい部隊と全ハンガリアとの衝突であった。中立化しつつあつた古いソ連軍との交代。ナジの無力政府内工作とカダルの裏切りの準備。

十一月三日。戦略地点の占領。ハンガリア全地域で戦闘。カダル逃亡。

十一月四日。ブダペスト占領。ナジ内閣倒る。カダル「革命労働者農民政府」樹立。

C 反乱の敗北

「ソ連軍のブダペスト占領後、種々の中枢機関で局部的な抵抗が

続き、ハンガリー騎士の弾薬が尽きた十一月六日(火曜日)の夕方までは激戦が続行された。しかし市内の一部要所は八日まで抵抗を続け、郊外の工場地域では戦闘は十一日まで続行したのである。ソ連軍隊は街路沿いの建物にも屢々砲火を浴びせ、その結果甚だしい破壊と相当な人命の損失が生じた。このソ連軍の第二次介入の期間中の最も激烈な戦闘は、ウイペスト、チェル島など、ブダペスト郊外の労働者階級の地区で起つている。チェベルの労働者はソ連軍の数回の降伏の呼びかけを拒否し、四方八方からの集中砲火おまけに空爆の一せいの攻撃にも拘らず十一月九日まで持ちこたえた。ドウナペンテレ(注川もとのスターリナバロス)の重要な工業地域でも、労働者は同様な決意を以てソ連軍に抵抗した。二十四時間戦闘の行われた十一月七日(「チックは引用者)、同地区の労働者は大装甲部隊、自走砲、戦術空軍を使用する三方からのソ連の攻撃を撃退した。」(国連特別委員会ハンガリー問題報告書、七九項)

「ナジ氏の首相時代と同様、労働者評議会は依然こうした要求(ソ連軍の撤退、自由選挙、ナジの復帰。引用者注)をカダル政府に伝達する主要な機関(ゴチは引用者)であつた。十一月十四日、工場の諸評議会は統一戦線結成のため大ブダペスト労働者評議会を創設した。この評議会は十二月九日の廢止時までカダル氏およびその政府と意見一致に到達するため努力した。その立場からして政府が何ら労働者の要求を満足させる地位にないことが明らかになつてきた。この間、国の支配権確保のため多数の元AVH隊員を含む新しい秘密警察が組織された。労働者評議会会員の逮捕により、また信頼のおける党員を要職に滑り込ませたりすることにより、評議会の力は次第に覆された。大ブダペスト労働者評議会が十二月十

一、十二両日にまたがる四十八時間抗議ストを宣言した際、政府は工場単位以上の労働者評議会を廃止する政令を発した。またスト参加を含む相当数の犯罪に対して死刑を課しうる政令が発せられた。

……(UN、八六)

一九五七年一月一日から四日までブダペストでソ連、ハンガリア、ルーマニア、ブルガリア、チエコスロヴァキア、(ポーランド不参加)のソ連国五カ国会議が開かれ、ソ連の軍事的弾圧とその後の駐留を正式に承認した。反乱は絶望的な抵抗をのこしたまま完全に敗北した。

十月二十六日のブダペスト放送を再び想起しよう。想起しなければならぬ。

「一九五六年十月二六日午後の会議でハンガリア労働者党中央委員会(委員長ナジ、第一書記カダル)は労働者階級の努力を表明した重要決議を採択した。この決議は各工場内に労働組合の協力を得て労働者評議会を設立することを承認する旨宣言したものであった。労働者評議会の設立と、その健全な運営は、ハンガリア国民経済の正常な発展、労働者民主主義の完全な拡大への重要な第一歩である。これはまた労働者の個人的財政的利益を増大させるから生活水準引上げへの第一歩でもあったわけだ。

ハンガリアの労働者階級、農民、知識人ならびに学生の要求は正当なものである。中央委員会の労働者評議会設立に関する決議は数時間の討論の産物ではない。この決議は中委七月決議発表以来過去何カ月もの間審議されてきたものである。討議は各工場の生産管理部で、労働組合内で、党組織内部で、さらに知識人の諸会合で行われてきた。これらの討議の課題は、各工場内に工

場委員会あるいは労働者委員会なるものが作らるべきか否かということであつた。今や生活自体がこの問題を決定したのである。

しかしながらわれわれは、まだ労働者による管理というこの新方式(「おどろくべきことだ」引用者)の詳細な点についてはそれが十分によくわかつているとはいえない。(ロシア革命三九周年に!? 引用者)われわれは経験をつまねばならない。生活がハンガリアの労働者管理に最も適した方式を教えてください。

過去数日の間にオズトの電球工場や冶金工場、レーニン工場をはじめ他のいくつかの工場では、労働者たちによつてすでに労働者評議会が作られ、それには工場の最優秀工員や技術者が代表として選ばれている。もう一つ重要なことは、すべての工場で、これら労働者が自分の職場に踏みとどまり、工場防衛に当つて武装した暴徒が工場を破壊するのを防ぐことである。無責任な輩が労働者階級の原則と社会主義を犯そうとするのを、許してはならない。労働者党中央委員会ならびに新たに選出された政治委員会は、ハンガリアの労働者諸君に深い信頼の念を寄せている。

労働者は労評と工場防衛組織をつくることによつて、新政治委員会ならびに政府ができるだけ早く秩序を回復し建設的事業を行ううる新しい条件を作り出すことができるよう援助すべきである」

(毎日新聞「死の十三日間」より)

一九五八年六月、ナジ、マレテル元師、M.ギマス、J.シラジは「告白も」なく処刑された。ハンガリア系のニュースソースに先んじてソ連系のニュースソースから通報された。

◇ 反乱の敗北は、カダル反動政府を生んだだけでなく、ハンガリア

労働者階級の意識にスターリン主義的反動のプロレタリアの本質を根深く刻印したのであつた。民族主義的な「多様な道」への幻想がふきとばされた。が同時にそのことは、深い懐疑主義とニヒリズムの傾向を生んだ。絶望のうづまく中で、懐疑主義とニヒリズムに犯されずに、強裂な革命の精神をもちつづけるプロレタリアとインテリゲンツィアの間には、自ら闘つた革命に関する一つの論争がまきおこつた。それは共産主義とプロレタリア独裁、及び労働者民主主義をめぐるテーゼとアンチテーゼである。

両者は、帝国主義とスターリン主義に反対するという共通の前提をもつている。差異は、共産主義の運命に関する対立である。「コムニズムといえばラコシを思いうかべざるをえないハンガリア的状况にだけ特有なものでないこの対立、——プロレタリア独裁は官僚主義の口実としてしか意味をもたないか?——プロレタリア独裁なき社会主義的民主主義こそ幻想であるか? という労働者民主主義をめぐるこの対立に関する価値判断は、しかし、次章において述べるであろう。

反乱とその敗北が与えた国際的な反響の性格は、現代世界という音叉の構造をたらしだしている。帝国主義者とスターリン主義者についてはすでに述べた。ここでは、ただ一つの記録を提出するにとどめよう。スターリニストのニュースソースからはソ連圏におけるハンガリアの反響について知るよしもないが、第二のハンガリアを恐怖した、上からのなしくずしの妥協とアンチ・ハンガリアキャンペーンによつてその反抗の存在が推察されるにすぎないからである。(「再びプロレタリア独裁の歴史的経験について」の声明のかけにあつた大衆的圧力!)

◇ トロツキスト、ジョージ・ラヴァンは、「レーニン死後の第三インターナショナル」(トロツキー著、一九二八年)の序言(一九五七年五月)の中でいつている。「ソ連と東欧から知識人と学生の反対活動が最初にわれわれの耳に達するようになっていく。——モスクワにおける学生のデモンストレーションは労働組合、その他の会合において未曾有の大衆的騷擾によつて、若干の例ではストライキによつて平行せられた。クレムリンへのポーランドの十月反抗の間、ワルシャワの学生と知識人は自信ある大胆さをもつて語ることができた。なぜならば彼等の背後にツエランおよびW.F.M.工場の武装労働者が立っていたからである。ハンガリーにおいてロシアの軍隊は革命をその中核まで打ち倒した——労働者評議会、それは軍事的敗北後一カ月間ゼネラルストライキを継続した。実際、一九五三年の東ドイツと一九五六年のポズナンにおいてはプロレタリアの爆発は学生と知識人との何らの運動によつても予告されずにやつてきた。ハンガリア革命に向つたロシア軍隊の背後の多くの例とロシア

鉄道員のハンガリアにおいてスト破りをするこの拒否は、支配官僚を否定する用意がいかにソヴェト社会に広くひろがっているかを示している。言葉と行為によつてソヴェト・ブロックにおける戦闘的分子は自由な討論に対する彼らの権利を今日主張しつつある。彼らは全ての問題を議題に上げる——だがすべてが回転する軸はスタロリニズムである。それは何か、それはいかにして発展したか、そしてそれはいかにしたら完全に根絶され得るか。——一九五三年のヴォルフタの強制労働キャンプにおける大ストライキの波、それは徐々に中央アジアとシベリア太平洋側のキャンプにまで拡つた、

は、自らをイスチンニイ・トルド・レーニナ（レーニンの眞の活動）とよんでいる組織された学生運動の存在をあらわした。NKVDによつて追跡され、一九五〇年にソヴェトの諸大学から根こそぎにされたが、それは収容所においてそのイデオロギーと組織的形態とを維持するという内的な強さをたもつていた。それはヴォルフタのストライキの鼓吹者であり組織者であつた、ストライキは三カ月の間に多分一五万ほどの奴隷労働者を含んだ。——今日のニュースはソ連における風の如き学生集会の詳細をもちらしている。モスクワのロモノソフ大学において昨年十一月学生達は義務的な政治方針の講義の際ハンガリー革命の鎮圧についての質問をもつて教授を攻撃した、彼らはレーニンからの引用をもつて彼の弁明を反駁し、遂に彼を演壇から去らしめた。「恥ずべき」「デモンストレーション」を討論するため次の日に招集されたコムソボル（共青）集会において、学生聴衆は再び集会を引きうけ、それをハンガリー労働者との連帯デモンストレーションに変え、又ハンガリーにおける体制とソ連との間の類似を引用した。乱暴のかどでの一四〇名の学生の除籍にもかかわらず、学生反対派はひろがり同様の集会がモスクワ守備隊のコムソボルにおけると同様、レニングラードその他のソヴェト主要都市においても、中央アジアにおいてさえも報告されている。（ネーション一九五七年四月六日）ハンガリーからの亡命者はロシア革命とレーニンとトロツキーの名前の記憶をよび起しているソヴェト軍に対する労働者評議会によるラジオ・アピールについて語つている。ポーランドの十月の勝利以後、その出版物はトロツキーへの歴史的言及をなしている。」

「第四インターナショナル誌第一号（五八年冬季）」でエルネスト

3 ハンガリア革命の教訓

「歴史の運動から個々の契機をひきぬき、——自分の歴史的純血性の証明としてそれらを固定することによつて、私有財産に対立する個々の歴史形態から史的な証明を、つまり既存物そのものものなかに一つの証明をもとめている」（マルクス）ようなスターリン主義的政治経済構造が、現代世界における反動的役割の拠い手であり、反労働者の性格をもつて示していることを示したのもこそ、ハンガリア革命の第一の教訓であつた。「共有」、「国産」という契機は、労働者の直接的な管理制ぬきに語るならば、そのブルジョア的私的所有制否定の意味しかもたないことが示された。

したがつて現代におけるプロレタリア革命は、その永続革命的課題のみならず、労働者直接管理制も表現しなければならぬ。それを保障する組織こそ、労働者評議会（ソヴェイト、レーテ、フンダ）であり、労働者民主主義であり、ハンガリアプロレタリアートの要求した「社会主義的民主主義」（社会民主主義ではない）であつた。労働者評議会権力（プロレタリア独裁）なき、社会主義的民主主義がありえないことは、「共産主義」が、ラコシ体制を意味したハンガリアにおいて正に再び確認された。ハンガリアプロレタリアートは革命においてはじめて生産の労働者管理を行つた！

党と階級とに関するハンガリア革命の教訓は、プロレタリア革命の古典的であると同時に現代的なソ連圏特殊のものと同時に世界的な性格を示した。ソ連圏プロレタリアートの要求は、眞の直接的プロレタリア党の政治的表現をとることがきわめて困難であり、党

・ジェルマンが報告しているところによると、「ソ連」の労働者は、熟練工のために全体の賃金を引下げる結果になるといった賃金制度の修正に反対し、実質賃金の向上を要求して圧力をかけた。彼等はずつと平等にしるゝといつて官僚の権力濫用に抗議した。一九五六年十月（引用者ゴヂ）ドンパスに勃発し、レニングラードにまでひろがつたストやモスクワのオルジョニキツゼ工場をはじめ他の大工場で行われて遅延ストは、本質的に同じ目的をもつていた。——」

「一九五六年ハンガリア・プロレタリアートの武装蜂起とソ連軍による血の弾圧は、全世界の左翼陣営を震憾させた。しばしの沈黙の後、ソヴェイト共産党発表の「帝国主義者の陰謀による反革命」という官僚的声明をうのみにする各国共産党とその同調者。

だがしかし、ハンガリア・プロレタリアートの血は無駄には流されなかつた。ハンガリアプロレタリアートの立場に立脚する事によつて現代共産主義運動のスターリニズムを本質とする墮落をあげ出し、同時に、プロレタリア解放運動の立脚点とその行く手を指し示した革命的マルクス主義の創造と、先進的労働者への物質化がそれである。」（マルクス主義青年労働者同盟「最前線」第一号、六一年一月）

（日本におけるこのような潮流が、即ち革命的マルクス主義によつて武装された青年労働者の部隊がはつきりと確立され、根を下した。このような運動こそ、われわれのハンガリア革命論の具体的担い手であつた）

なき反乱は必然的敗北を生まざるをえなかつた。党なき反乱は、反乱の過程で急速に党的組織的保障を見いださない限り必然的に敗北することはプロレタリア革命の古典的かつ一般の法則である。

労働者管理を欠く計画経済（たとえば、ネップ以後のロシア経済）は本質的に半計画的であり、主体的組織条件の計画を欠く、物的生産力主義におちいり、さまざまなアンバランスを生ずることは、労働者の生活を無視した重工業優先の蓄積と、農民の意識水準を無視した集団化に対する「反乱」に表れ、官僚制と生産者との対立と分裂と新たな抑圧を生むことを示した。これは第二の教訓であつた。

コンミュニンの原則と、反プロレタリアの権力諸機構（秘密警察）の粉砕をなしとげたハンガリア労働者評議会の権力と世界革命への永続革命的展望を欠いて民族的中立の幻想につかれていた無力でかつ宙にういたナジ政府との併存は、「ロシア二月—十月の教訓」を再確認する第三の教訓であつた。（問題はただ世界革命の舞台においてのみ解決される。「われわれの民族的性格にしたがう、独立、民主、社会主義ハンガリアの樹立」（大ブダペスト中央労働者評議会の十一月二十七日アピールより）とは、その表現の中に、反スターリン主義を読みとるとしても、それは一国社会主義のうらがえしにすぎず、多様な一国社会主義の一つにすぎず、「社会主義諸国」の「政治的な経済クレジット」や「貿易」という補足をともなつた一国社会主義に他ならない。ベルギーなどは一体どうしたらいいのか！ その経済援助のゆえに、ゴムルカとカダールは最近、八ヶ国宣言に反対しそうになつてひつこめる、というはめになつたのだ。一国社会主義から民族的改良への道は幻想である。労働者評議会とソ連軍の強圧の間で立往生した第二次ナジ政府—ハンガリア的

社共政府は、民主主義を主張していたがゆえに劣評から「委任」されながら、委任されるやいなや、任務を遂行しえないという社民的反スタの中間主義的反動的役割をはたしたのであつた。

ソ連圏軍事ブロック内における非スターリン化の闘争が必然的に軍事的反乱の形態をとらざるをえないこと、更に、武装労働者による兵士の獲得と、他国兵士の中立をも部分的に可能にしようること、ハンガリア革命委員会が示した第四の教訓であつた。

更に、ナジの失敗とカダルの裏切りは、スターリン主義者の支配する党における分派闘争の必要性和、党改良の不可能性を示すものであり、大衆的反乱時における妥協がいかに反プロレタリア的混乱を与えたかを示した。とりわけ、反乱以前における党内闘争と、革命的共産主義の役割は重要であり、たとえ労働者の要求を政治的に表現しえたとしても反乱の組織者とはなりえなかつた。ペテフィサークルや学生組織の限界は、反乱過程における革命的党の必要を示した、第五の教訓であつた。(いかに学生と知識人が大きな役割をはたしたとしても、その限界は、デモの計画において、「抑圧の深さ」は暴動化する可能性をもつ、暴動化したときはどうするか? という問に解答を与えておくことをおこたり、ピラをまきつばなしにした「無責任」性にあらわれていた。このことこそ、最初の諸要求において実現のための組織形態が明示されていなかったことを説明する)。

労働者評議会と労働者管理(工場委員会、防衛隊、スト委員会による)こそ労働者の権力であり、われわれはこの革命的前進を帝国主義者からも、スターリン主義者からも守りぬくであろう。その

ための労働者の武装と反乱兵士との結合! 秘密警察の解体! スターリン主義を徹底的に追放せよ! 新たな指導部はスターリン主義者を除いて構成されねばならない! あらゆる中間的政府を信ずるな! ソ連軍の撤退は、全国的労働権力との直接交渉によつてのみ可能である! 全世界の労働者はハンガリア労働者権力を支持せよ! ソ連の労働者はハンガリア労働者のためにも、自らのためにもハンガリア革命を防衛せよ!

——第一次ソ連軍の介入と反乱の中で、ナジ政府成立以後においては特に、以上のスローガンが提出されるべきであつた。そして労働者評議会のアピールは、以上のように「集約」されただけでよかつたのである。軍事的には巨大な差がありながら、労働者評議会の結成とその徹底的抵抗と革命的アピールが開始されてから、第一次出動のソ連兵(クレムリンではない)の中立化を促進しえたことは、きわめて重要であり、労働者評議会の進むべき唯一の道を示ししめていたのだ。劣評とソ連軍の直接交渉は局部的に成功していた。そしてそのコースこそ最後の革命的戦術であり、中立主義的幻想を粹粉したであろうことは明白であつた。ハンガリアにおけるコムニストの全力はここに注がるべきであつた。(付論参照)

〔ハンガリアプロレタリア革命と世界プロレタリア革命〕

ハンガリアの反乱における最大の問題性は、一國社会主義IIスターリン主義からの解放を、そのうらがえして他ならぬ民族共産主義(社会主義の多様な道の一つ)に求めた点にあつた。

ハンガリア労働者階級は、スターリン主義の反プロレタリアの本質をバクロしただけでなく、自分の前衛をもたなければ反乱の勝利

を保障しえず、労働者評議会が直接政治権力とされなければ必ず敗北することを再確認し、民族解放のイメージと一八四八年の思い出によつて自分の姿を見た民族共産主義そのものが解放のためには障害となることを示した。

しかしこのことは、世界プロレタリア自己解放運動のための血であがなわれた道標でなくて何であろう。であればこそその問題の深刻な解明と批判が要求されるのであつた。

ハンガリアプロレタリアートの反乱は、カール体制下のレジスタンスとなつてつづくのみでなく、各国プロレタリアートの体内に銘記され、ソ連圏労働者の間にも自分の道をてらす光として必ず再生されるであろう。次の反乱は必至である。それは、わが日本プロレタリア革命と同様、世界革命の舞台に合流し、解決されるであろう。ハンガリア革命はわれわれの時代のパリコンミュンである。

われわれは一國のプロレタリアートの敗北のみならず、世界革命の退潮から反撃を開始し、ふたたびあともどりをゆるさぬ絶対絶命の情勢へと進みつつあるのだ。われわれのこの準備、この世界革命の完遂の中でこそ、ハンガリア労働者の闘いはフェニックスのように再生しつつあるのだ。ハンガリア労働者階級は、日本をはじめ万国のプロレタリアートの闘争にひきつがれた自分の姿を見るであろう、そして世界のプロレタリアーとの団結の中にわれわれ革命的共産主義者は、この確信をよりかためつついま五週年を迎えようとしているのである。

労働者評議会の成立と消滅 (上)

ハンガリア革命の経験

元大ブダペスト
中央労働者評議会

副議長 F・テエーケ

この手記はイムレ・ナジ研究所発行の「ザ・レヴュー」誌より(註) 翻訳したものである。一九五六年十月のハンガリア革命において、十月廿五日より十二月にわたり労働者評議会の各工場における発生から、全国中央労働者評議会への結集、そして、ソ連軍とカダール官僚によるブダペスト中央労働者評議会議長・ラツツ同副議長・パリの逮捕に至る期間、労働者評議会の発生と消滅に焦点のしぼられた、ヴィヴィツドな手記である。

編集部

一、革命前の私の歩み

私はオリオンラジオ工場に、見習いとして入社し、働き上げて工具製作工にと、時日が経つにつれ、だんだん腕をあげていった。私は学歴があまりなかったため、成人してから夜間学校へ行った。私

は労働者であり、家族全てもそうであったので、労働者の精神状態

にはよく通じていたのである。夜学ではあるが、大学へ行って、技術者となりノルマ計量者となった。ノルマ計量者というのは、その頃のハンガリアでは必ずしも人気のあるものではなかったが、労働者評議会の選挙が行なわれたとき、私は、他の指名された者に先んじて選ばれた。これは三千人の労働者をもつテレフォン工場で起った事実である。永続的な労働者評議会が選出されたときには、私は辞任しなかった、というのは私の神経は極度に悪化していたからである。その時期まで、私は中央労働者評議会の一時的メンバーであった。工具職場で私は働いており、良く知られていたもので、彼等は私の辞任を聞こうとはせず、拒んで絶対に引かなかった。私は労働者で——彼等は云った——彼等の一人なのである。そして異質の労働をしなければならなかったにもかかわらず、私は彼等と一緒にあることを知っていた。私は社会民主党に十六歳で入党し、つねに意識的な社会民主主義者としてとどまった。私はハンガリア勤労者党の党员であったのである。

ここに、私は労働者評議会とハンガリアについて、知っているすべてを話そうと思う。

二、第一次ソ連軍侵入

十月二十五日(註2)に、革命的な戦闘に加わってから、私は工場へ行った。三千人のうちの八百人位の労働者が、文化ホールに集っていた。工場指導官、党責任者、工場委員会書記およびその下役いく人かが、労働者に向い合い演壇の上に立っていた。その役人たちは、SZOT(国家労働組合委員会)が、党指導部承認済みのアツピールを発したと話しているところであった。労働者評議会が工場内に構成され、将来は、労働者が工場内の問題に発言権をもち、みずから工場を管理するようになるという。

労働者は、SZOTと党指導部が期待していたその通りには、アツピールを解釈しなかった。真剣に処した。彼等は指導者がほめかした代表ではなくて、みずからの代表である労働者を選出し始めた。われわれの工場では、前述した役人たちは誰も要求はされなかったのだが、労働者の気持を感じとってか賢明にも辞任することを考えたのである。工場指導官は、彼が指導官に任命される前まではそうであったように工具製作工として工場にとどまり働くことが許されるかと、集まっていた労働者に頼んだ。労働者は承認した。

われわれは、ほぼ二十五人から成る労働者評議会を選出し、ただちにストライキを決議した。それは発表された布告が混乱しているもので、われわれはイムレ・ナジ政府を承認することを拒んだためである。労働者評議会は、工場の労働者が認めた後、政府に向けた「抗議の覚え書」を作製すべきことが提案された。われわれの第一の要

求はソヴィエト軍隊のハンガリーからの撤退、即ち国家的自立であり、第二はソヴィエト軍撤退の後、イムレ・ナジを首班とし、しかも人民に信頼されている閣僚で構成される政府が国家の事態を收拾することであった(註3)。

それぞれの職場が二人ないし三人を評議会に代議員として送り、管理部門も同様に行った。その結果、二十五人の評議会メンバーの十九人ないし二十人は労働者であった。

評議会メンバーの約半数は若く、二十三歳から二十八歳であった。われわれの工場の代議員はハンガリア青年の代表であった。彼等は革命を先導して、デモを行い、スターリンの銅像を引きおろし放送局の前の戦闘に加わった。何人かは大学に行っており、その若くて革命的な精神こそ、年長労働者を共鳴させ、安心して主導権を青年にゆだねて戦いにのりだすことを可能にしたのであった。年長労働者のうち、とくにテレフォン工場には、古くからの労働組合員や革命前とか共産主義制度になっても投獄されていた者が多数いたが、彼等は青年が指導をすべきだと考えた。この栄光ある戦いを起すほどに青年が勇敢であるならわれわれの代表になる資格は十分にあると彼等はいつた。共産党员であったか否かは問題ではなかった。テレフォン工場の労働者評議会メンバーの約九十パーセントは共産党员であり、何人かは活動家党员でさえあったが、彼等がいつも労働者を支持したので労働者は信頼していた。われわれはとても注意深く、手の汚れていない者だけが労働者評議会に選ばれるようにしたのである。

私の知る限りブダペストの全企業が労働者評議会を選出した。私はここで述べておきたいが、ハンガリア労働者は、ユーゴスラビア

にも労働者評議会が存在する事実が気付いていた。ユーゴスラビアの労働者が評議会をもち工場を管理することが出来るなら、ハンガリアでもこれが不可能だとする理由は何もないとわれわれは考えたのである。これが政治的考慮を別にすれば、ハンガリア労働者が自分が本当に信頼する代表を選出することを望んだ理由であった。労働者は、いわばみずからのイメージにしたがって、ブダペストだけでなく国中に一日一日とゆっくり着実にこの評議会を形作ろうとしていた。この状態は十一月三日まで続いた。その時期までには労働者評議会はすべての工場で機能を果しており、古い指導部に取って代るときになった。評議会は工業生産の中央集権排除した分権管理を要求した。その結果として、工場を実際に労働者が所有し、代わって国家を利益配分にあずからせるようになる。

われわれの工場では次のように行った。私と二、三人仲間の評議会メンバーが議事堂へ行き、ゾルタン・ティルデイ(註4)と会談しイムレ・ナジに「覚え書」を送った。これは十月三十日あるいは三十一日で火曜日であった。イムレ・ナジ、ティルデイ、カダールがラジオで話した日である。政府はついに思い通りに出来ると思われるには思われた。工場へ戻り、労働を始めることに決定した。われわれはラジオを通じて生産は十一月五日曜日の朝から開始することを知らせた。しかし二日や三日にはすでに多数の労働者がたいていは損失を取り返すためやってくる。彼等は自分自身の工場では働いているのだという感情で働いていた。これまではノルマ競争は義務であったが、多くの者が私に話した。しかし事態が今日のままであれば生産競争のキャンペーンをみずから行い、この国の歴史上かつてない生産高を達成しよう、と語るのである。

全く新しい何ものかを求めていた。そして、この熱望こそがロシアの銃剣の圧制にもかかわらず、中央労働者評議会を構成することを可能にした原動力なのであった。

三、労働者評議会の構想

テレフォン工場のわれわれは、労働者評議会の第一回会議でわれわれのプログラムを作製したが、それは評議会が経済的機能のみ遂行すべきだという政府のものとは相容れなかった。われわれは、経済的のみならず政治的機能の遂行をも要請されている最初のハンガリア労働者の組織であることを認めていた。それ故われわれのプログラムは政治的任務を含んでおり、それはしかし労働者階級のみならずからの政治的代表機関を得れば直ちに終るものであった。

評議会は議長と書記の二人だけ専任者をおいた。他のメンバーは生産労働を果し、その後で評議会と関連した任務を果さなければならなかった。任務の一つは、毎日労働者に政治的状況や他の重要問題につき報告すること、これらの日々は情報が乏しくまた信頼性に欠けていたからである。

評議会の会議ではメンバーは仲間の労働者の要望を、その中にはかつての所有者の一人をでテレフォン工場に戻すこともあったが報告して、われわれは決議を提出した。労働者は工場を自分自身の所有にしておくことを望んでいた。労働者所有形態はやはり生み出されるものであり、われわれは共有を発表するか他の解決方法を見出すべきか分らなかつた。またいろいろな職場で何らの政治的組織活動を開くべきでないことも決定された。後に成立する労働者団体でさえ組織を許されず、それらの上の労働組合だけであった。彼等は

さて生産労働は月曜日に開始されるはずであったが、日曜日十一月四日(註5)に第二回目的ソヴェト軍の介入が起り、労働者は何らの会議も決議も必要とせず、唯一の武器であるストライキを続けるべきことを決めた。それはその態度が明らかになるまでイムレ・ナジ政府に対し用いたものであり、彼等はロシア人に押し付けられたカダール政府に対しても、同じ手段をとったのである。

十一月四日多数の労働者が情報を得ようと工場へ現われた。ラジオでは現実の情勢を知ることが不可能だったからである。新政府は無力であった。労働者に生産を再開するように訴えていたがむだであった。労働者はカダール政府のために働く気はなかつたのである。同時に、ハンガリア労働者階級、一般人民は労働なしに数ヶ月生活していけるような状態ではなかつたので、長期間働かずにいることは不可能であった。それに工場と一緒に働いていけば、必要なときにはいつでも生産を停止して政府に圧力をかけることが出来る。彼等はまた、ソヴェト軍は全ハンガリア人民の希望に反する罪を犯しており、それを悟らすことが出来ると思っていた。そしてやはり、可能な最上の方法で政府との関係を結ぶことを求めていた。

ストライキの間、工場には反動的な傾向は何も現われなかつた。かつての所有者が復活できるという考えは口にはのぼりしなかつた労働者の態度は、性質が申し分なく、政治的に過去に罪科のない者だけが公職に選ばれるべきだというのであり、思想的には急進的でない者であった。簡単にいえば、労働者はいまだかつて存在しなかつた何ものかを望んでいた。ユーゴスラビアの状態やアメリカその他西ヨーロッパの体制を模倣することを望んではいながかつた。彼等は

一党独裁体制に発展するようになる傾向は望まなかつた。一般的な願いは、一九四五年から四七年まで存在していた連立政府時代の旧政党だけが選挙に加わることであった。資本主義を復活させる意図はなく、民主主義社会を作ることに努めていた各政党である。これらは土地改革、工業における社会主義経済形態、民主主義的権利、個人の自由、人間の尊厳を認めていた。また、その時期にはしかし獲得できなかったとはいえ、中立を目指していた。

労働者評議会そのものが労働者の政治的代表機関になることは誰も提案しなかつた。労働者は、働かせる者として工場は労働者の政治的利益を代表しえないことをよく知っていた。共産主義制度の一つの最も不合理な特徴は、働かせている者がまた労働者階級の政治的代表であるということにあった。労働者は評議会が政治的機能も有することは臨時措置と考えていた。

政治的代表的機関について、一つは革命のあいだに、一つはその後に、二つの異なる考えが変って支配した。革命のあいだ、とくにイムレ・ナジ政府の構成が十分な保証を与えるように思えたとき、評議会が政治的機能を遂行する必要性は現われなかつた。この役割は様々な政党により演じられるのが明らかだった。しかし、革命の敗北の後には労働者評議会が政治的機能を遂行することが必要に思われた。それは労働者の代表として信頼出来る組織が存在しなかつたからである。労働者評議会が結成されたときは党政治的観点はもたず、もっぱら工場の利益、適合性、技術問題が考慮に入れられるよう綿密な配慮がなされていたのである。

十一月四日以前には中央労働者評議会の考えは決して生れなかつた。第二回目的ソヴェト軍介入につづいた混沌状態のなかでは

めて、その考えが前面に表われた。

労働者は完全な混乱状態が起り、生産は停止し保安労働すら忘れさられていることを見てとり、そこで大工業工場の労働者が地域的共同作業を計画しようとしていた。われわれは近くの地区の労働者評議会が会合したと聞きわれわれも会議を組織し、こうして地区労働者評議会が結成されていった。共同作業は事態をやりやすくし、われわれは情報を交換し、決議を一致させることができた。みんなが同じことを望んでいるなら相容れない決議をどうして通すだろうか？　そしてわれわれすべてが新政府に反対していたので、大きな組織はより大きな力を振るえると感じていた。

労働者は何かがなされるべきだと感じていた。国家は責任ある指導者をもたなかった。まさに、国内には二十万人のロシア軍隊があり、カダール政府はあったもののカダールは全国中どこでもなくただ議事堂のみ主人でしかなかった。彼等は建物の外へ出てくるようなことはしなかった。国中の憎悪に出合うのを避けるためなのである。ロシア人の無分別な行為により多数の人民が家を失った。これらを助けなければならなかった。社会的援助についても共同作業が要請された。確かに、地区労働者評議会はその決議決定を討論していったが、任務の増加にしがって、全ブダペストの工業工場の代表が一緒にいることが刻々に要求されてきた。ユベストの労働者評議会は、隣接地区のすべての代表者を会議に召集する決議を通した。これは十一月十三日に開かれた。その前に私はテレフォン工場の会議に行った。ほぼ八百人の労働者があり、革命の間に選出された労働者評議会の構成とその諸決議とも承認した。彼等は労働者評議会が最初の要求どおりにしつかり踏みとどまることを求め、カ

たにもかかわらず、その要求は前もって討論していたかのように一様であったということは興味深かった。まさに彼等をすべて送り出した労働者が、どこでも同じことを要求していたのである。地方からの代表者もいたが、彼等はブダペストで作られることを聞き知ると労働者評議会がいたるところで結成されていったことを話した。

四、カダールとの交渉

バリがカダールに自分たちの要求を通告したと会議で述べたときには、誰もが政府が労働者の決議に精通したことを喜こんだ。しかしその主導権が代表中央機関ならもっと大きな圧力をもてただけに、そうは表われなかったことは遺憾であると認めた。会議は、作り出される中央機関は前に述べた諸要求を基盤としてその活動を開始することを決定した。

バリその他の代表に対するカダールの返答はこうであった。《諸君が私と私の政府を認めない権利をもつていようと、私はかまわない。ソヴィエト軍隊は、私の味方ではない。諸君はすべきことをやるがいい。働きたくなければ働かないことだ。この議事堂にはいつでも食べる物と電気はあるのでね。》

そこにはカダールに会見するいく人かの代表者がいたが、彼はそれを拒否していた。それはいつもその「覚え書」が「われわれはカダール政府を認めない」という言葉で始まっていたからである。それらの日々はこれが国内中のスローガンであり、すべての「覚え書」は同じ文句で始まっていた。

ユベスト会議では全代表が全国労働者評議会を作り出すことを要求した。私もそれに賛成であったが、大ブダペスト労働者評議会を

カダール政府をハンガリアの正当政府とは認めず、全ソヴィエト軍隊が国外に撤退してしまいうまでストライキの続行を宣言した。そして労働者は良く知っているので私を代表として選んだ。地区評議会代表者会議はわれわれの工場で開かれた。地区会議はユベスト会議への代表として私を再び選んだ。代表者の選挙は民主的に行なわれた。評議会メンバーの一人を代表としたのは労働者自身であり、評議会がなかの一人を代表としたのではなかった。

地区選挙がすんでから、われわれはユベスト会議に出かけたが、そこにつくまでに、もう建物をソヴィエト軍隊が占拠してしまっていた。ユベスト電球工場の労働者評議会は会議用に自分たちの建物を提供した。われわれは秘かに少数者を集り、最も主だった工業工場の代表者会議をひらいた。地区および工場評議会の活動を組織する中央労働者評議会の必要性は一致した熱望であったが、構成していく方法に関してわれわれは同意に至らなかった。これは十一月十四日の午後四時のできごとである。ペロヤニス工場の代表サンデル・バリ(後の大ブダペスト中央労働者評議会副議長)が立ち上がり、会議に報告した。彼とハンガリア鉄鋼工場、チエペル植物油工場、チエペル鉄工工場の代表とは議事堂へ行ってきたばかりで、カダールと会談し彼等の要求を手渡してきたという。ここで、全工場および地区評議会の諸決議が、ほぼ一致していることが指摘されねばならない。それらはすべて、ブダペストまた全国からのソヴィエト軍隊の撤退、自由選挙、多数政党制、工業の社会主義的所有形態、労働者評議会の保持、民主的労働組合の復活——そして当然の革命の全要求、ストライキの権利、集会・出版・信仰の自由の権利等々を要求していた。この会議の参加者はいろいろな所からやって来

作るべきだという私の工場の考えに縛られていた。代表は自分の個人的意見を口に出す権利はもっていないなかつた。会議は全く民主的であった。よしんば、カダールが変名で参加していたとしても彼の気を悪くはしまい程であった。会議参加者とオルグはほとんどユベストとアンジヤルホルド工場から来ており、みな左翼労働者であった。私はその年長労働者の多数を知っていたが、彼等は古い労働組合員と階級運動の闘士であった。

広範な討論ののち、われわれは大ブダペスト中央労働者評議会を作ることに決定した。

ここでも討論のあいだでペロヤニス工場の労働者の次のように組織だてられた見解が会議に報告されたことを述べておかねばならない。《われわれは正式にはカダール政府を認めないけれども、認めようと思えば事実上国家の支配者であるから、政府と会談する用意がある。彼等は少くとも印刷物の上では命令を出しているのだ。だが、人民により選ばれた政府として認めることは拒絶する。ストライキは労働者に余裕がないから続けていくことは出来ない。そこでもしも政府がある、ロシア軍撤退について即座にロシア人と会談を始める保証をしたとき、またイムレ・ナジが政府に呼び戻されるという保証をしたときには、われわれは生産活動を十一月十九日月曜日から再開すると政府に提案する》。ペロヤニス工場の労働者は先の「覚え書」ですでに、イムレ・ナジを戻すことを要求していた。人民に認められみんなに尊敬されている指導者であり、カダールとは似ても似つかなくなつたから。そのときカダールは、喜んで政府にイムレ・ナジを呼び戻したいが、彼はユーゴスラビア大使館にいるため話することが出来ない状態だと答えたのである。《イム

レ・ナジを議事堂によしなさい——カダールは云った——そうしたら話すことができる」と。

新たに選出された大ブダペスト中央労働者評議会は、イムレ・ナジが政府のメンバーに戻されるというペロヤニスの労働者の提案をその決議に含めた。

会議は、ブダペストの全工場が代表されていないことを考慮し、全国労働者評議会を作る権利はないことを確認した。そして全ブダペストの工場および地区に中央労働者評議会に加わるようアツピールを送った。二、三の方法論的問題で重要でない討論があったが、決議は全員に認められた。われわれはカダールの所に要求をしに行くと六人の代表を指名した。カダールが、軍隊の撤退についてロシア人と会談する用意があるか否か、またイムレ・ナジを政府に戻す気があるか否か。それが判明するまで、われわれは「覚え書」を公表しないで待つことに決めた。それにイムレ・ナジは自分の条件を主張せずに、政府には加わらないことをわれわれは十分承知していた。

これらが労働者が労働を始めたがっている基にある条件であった。生産再開をさせられるのは誰個人でもなく中央労働者評議会だけであった。十一月四日から十四日までカダールは少くとも十回は労働者に労働を再開するようアツピールしたが、誰一人として喜んで聞き従うものはなかった。

カダールは代表が前に現われたとき、その朝バリーに与えたのと同じ解答をした。《イムレ・ナジが外国権力の治外法権の大使館にいるのにどうやって話せると思うのかね？ 彼をここによせば事態を話し合えるよ》けれども、彼は生産労働を再開するという中央

が再開されたことで、カダールの威光は極度に失墜して、彼は憤慨していた。

会談の条件は彼の気に入るものではなかった、政府の閣僚は夜間のみわれわれと会談する用意であった。われわれは一日中工場働き、午後は中央労働者評議会で過し、夜の八時に議事堂へ出かけた。ここで彼等は一時間かそれ以上待たされた。そうしている間に、われわれの誰も知らない青年たちが待っている部屋に入ってきた。

彼等は傍らの席に坐って、ぎこちなさなどなくエレガントで、長いこと質問をし、話をした。代表一人に、この《いきな若者》が一人づつついていたのである。初めに、われわれが彼等の知りたがっていることをすべて話してやると、彼等も意見を述べた。しかし、それはカダール政府により吹き込まれた意見である。十時、十一時になるにしたがい、われわれは疲れてきた、結局のところ、朝の六時には労働を始めなければならぬ。そうこうして青年たちがいなくなる、その席は、カダールかマロサンか、あるいはアプロカコツサか、話すのが《当番》である者によって占められた。その時までは彼等は、われわれの来た理由と要求事項を下役から報告されていた。彼等は用意しているので、答えも出来ており、上手というわけであった。彼等は代表たちに耳を貸しせず、話をさええぎり、乱暴であった。とくにカダールとマロサンである。《ちよつとお前、そつちのお前も（マロサンはわれわれを《ころつき》と呼びさえした）諸君はわれわれに任務を教えようというのか？ 自分をプロレタリアートだというのか？ 労働者を代表しているかどうか？ 自分を思えるのかね？》——こうして彼等は誰かをつかまえては根掘り葉掘りやる。というのも彼等はわれわれの名前をすべて知りみんな

評議会の決議に喜んだ。《諸君は真面目な人たちだね》——彼は云い、われわれが連絡員を通して彼と接触を保つべきだと提案した。彼はすべてに鼻を突っ込んでくるような政府委員をわれわれに押しつけたのである。「覚え書」をさらに読み進んで彼はまた怒りだした。《これは何だ？ 対立政府か？》——彼はわめいた。われわれは外交儀礼的手腕を發揮してなだめ、カダールはロシア人と会談すること、政府もわれわれも問題の解決をととして一歩一歩前進することを認め合った。

大ブダペスト中央労働者評議会は、B E S Z K A R T（運輸労働者組合）のアカツファ通り本部で活動を開始した。二十二のブダペストの地区がそれぞれ一人の代議員を送り、二十二人の代議員が一人の議長と一人の書記を選んだ。新しい代議員は、さきのわれわれの活動開始の決定に賛成せず、カダール政府がわれわれを交渉相手と認めることになる、中央労働者評議会の結成と生産労働の再開の放送によるアツピールを承認しなかった——しかし、それはわれわれとてもカダール政府をハンガリアの正当政府と認めたことではなかった。このアツピールは各工場労働者評議会議長によって読み上げられた。どこでも議長が労働再開の必要性を理論的に説明できたところは、労働者が賛成した。

大ブダペスト中央労働者評議会の結成後、われわれは全国労働者評議会の設立を決定した。もし国家の名において会談を望む場合には、われわれは民主的にそうしたのである。ただ國中の全労働者が労働者評議会に代表されているならばである。

われわれは十一月十九日にも二十日にも議事堂で会談したが、これは時間を費すのに役立つだけであった。われわれの要求で労働調へ上げていた。もしもその誰かが技師であれば、技師であつて労働者でないというので攻めた。一人の労働者は彼が十分な教育を受けていないので、重要な地位につけないとやられた。われわれを当惑させ、自分を不安に感じさせようと、彼等の力であらゆることを行つた。彼等は休息をとつて、身なりもよかつた。それにひきかえ疲れており、ひげもそらず、粗末な身なりの者たちに心理的圧力を加えることは、たやすいことであつた。彼等は、代表者たちが疲れはてて考えることも出来ないと思つたとき以外には、決して真剣な問題に立ち入らなかつた。そして権力を用いて一方的に、物事をとり決めた。代表は、全国労働者評議会を結成する意図であること、しかし政府の背後で何か企らむ気ではないこと（彼等は政府という言葉を意識的に決して用いなかったので《あなたの背後》と云つた）、そしてカダール政府も代表を送ることを望んでいることを、カダールに話した。アプロは腹を立てて怒つた。《諸君は気は確かなのか？ 対立政府を望むのか？ ここで起そうとしているのはまた反革命かね？》

その間、十一月十五日の一、二日後に、第十四地区の一人の労働者がわれわれのところへ話しに来た。彼はロシア人を知つており、なかに知り合いがあると云つた。中央労働者評議会とソヴィエト軍司令部との直接の接触をつけるようにしたいといつた。そこでわれわれはロシア人とじかに会談しうる状態になるのである。われわれはこの好機を逃さず利用し、彼にある人々の名前を書き記して、ソヴィエト軍権威筋に釈放させるように頼んだ。それ以来代表は定期的にロシア人のところへ出かけた。代議員の半数は議事堂へ、残りの半数はロシア軍へであつた。われわれはある人々が消えた

という情報を受けるといつでも、その名前をロシア人に送る。すると一日、二日後に釈放されるのであった。

五、全国労働者評議会への弾圧

月曜日に全国労働者評議会設立の計画をカダールに話して、火曜日には代表がソヴィエト軍参謀長を訪問した。彼等はグレブニクに自己紹介し、われわれが全国労働者評議会の第一回会議を競技場に召集する計画であることを話して、ソヴィエト軍司令部が代表を送るようにと招請した。グレブニクは丁寧に謝意を表したが、これはハンガリアの内政問題であり、決して干渉はしないが、われわれの親切な招待を受けることが出来ないと答えた。しかしながら、われわれは外交的ルートを通じてロシア人を招くよう、ハンガリア政府に頼むことが出来た。

同じその晩、同じ代表は議事堂へ行き、そこでアプロから、まだ決定していないが、政府は多分招待は受け入れないだろうと話をうけた。政府は会議に反対していたのであり、それを疑う余地はなかった。彼は、ファシスト分子がそれに加わり、挑発行為が起るかもしれない、誰がその責任をもつのか? と云う。われわれは、われわれ労働者がそのような事のないように保証すると述べた。私はチェル工場労働者で構成される防衛隊のオルグであった。前もって各工場が送り出す防衛隊員の数と、彼等は武器をもたないこと、誰でも競技場に入る前に武器の検査をされることが決定された。地方からの代表は、大学生によりトラックで市内へ運ばれた。われわれは急いで活動しなければならなかった。時間はわずかしかなく輸送機関はなかったのである。

会議は八時に召集されていた。われわれはそこに六時に行った。

誰も見えなかった。われわれは万事がうまく行くようにと願った。八時になってソヴィエト軍が到着した。グレブニクはわれわれの招待を受けたのだが、自分の代りに部下をよこしたのだった。重砲兵隊、戦車隊、機甲車隊すっかりそろって、約四百班はいた。機関銃手は完全武装で、戦車は火を吹くばかりである。彼等は競技場を取り囲みそれに通ずる道路を閉鎖した。われわれはMEMOSZ本部へ向かい退いたが、二、三人を残して、地方代表の到着を見張らせた。ブダペストの代表は、工場はすべて地区評議会に代表されていたため、招かれていなかった。しかし、われわれはデブレセン、ヴェスプレン、イノタ、モハチ、ペチ、デュナペントレ等々の全ての大鉱山、大工場の代表者を招請していた。ハンガリア工業は完全に代表されていた。地方の代表者も民主的に選出されていた。彼等はみな正当な資格を備えていた。到着したときに彼等は全く憤慨していた。彼等は生産労働についていないのに、われわれは再開しており、それは彼等を裏切り偽瞞するものだといった。ブダペストの外にある工業工場はまだストライキ中であり、タタバンの鉱山をまきこんでさえた。

われわれはMEMOSZ本部へ彼等と一緒にいったが、機関銃の後立っているズリニ陸軍士官学校の生徒に止められて、中へは入れなかった。

そこで、中央労働者評議会アカツファ通り本部へ戻るほか仕方がなかった。しかし中央評議会のメンバーだけで、他には誰もいなかった。けれどもわれわれが建物に近づいたときに、鉱山労働者に出会い、彼等は中に入れることを要求し、さもなければ、騒ぎを引き

反帝国主義・反スターリン主義
革命的學生は
マルクス主義學生同盟の旗の下に結集せよ。

発行／マル学同中核編集局

中核

■既刊1号～55号

■タイプ刷B5版28頁／¥50(〒35)

起こしそうであった。彼等はこう云った。状況は支持するに耐えないものである。今や、われわれはカダールのような男との会談は不可能であると知った。彼はわれわれに戦車を向けた。ストライキを続ける以外には道は残されていない、と。

ブダペストの代表者たちは、地方からの代表者たちに、ストライキを中止した理由を説明しようとしていた。彼等は聞き入れなかった。やっと、ジョールの代表が、われわれの側につき、われわれの動機を理解するようにと他の多勢に話した。

われわれは主張した。誰もがお互いを知っているような小都市や村では、事態の進展について情報を交換していくことは容易である。そこでは事件が起れば三十分とたたない内に誰もがそれを知るようになる。ところが、ブダペストは百五十万人も人口がある。もしわれわれがストライキを続行するなら、労働者との接触を失ってしまうであろうし、その上、われわれは地方との接触を保たねばならなかったのである。

夜の九時になって、彼等はわれわれが正しいことを認めた。われわれは完全な仲間同志であった。もしも全国労働者評議会を作り上げねばならぬなら、運命ばかりかソヴィエト戦車をも怒らせるであろうと、われわれはそういう結論に達した。政府に認められた合法組織であるから、中央評議会を維持し、連絡員を通じ地方評議会と——非合法に——連絡をつづけることを決定した。われわれは常にわれわれの決議を知らせ、彼等は認めるか否かの決定をすることが出来た。すべてについて常に彼等と相談出来たのである。

こうして、非合法的な全国評議会が誕生したのであるが、名目上はそれはかの最後まで、大ブダペスト中央労働者評議会としてとどま

だったのであった。

(註1) イムレ・ナジ研究所「The Review」は一九五九年より季刊で発刊されている。ハンガリア革命に関する左翼的、右翼的論文でうずまっっており、フランソワ・フェイトなどが投稿している。トロツキストもいれば民族主義者、社会民主主義者もいるといったぐあいだ、反カダール政府という以外に一定の共通した主張はない。

ここに訳出した手記も労働者評議会の自然発生的性格をよく物語っているが、残念ながら、明白な展望をもちえなかった事実をも又物語っている。われわれはこのハンガリア労働者評議会の悲劇から、スターリニズムがいかなる役割を果たしたか、更に革命における前衛党の欠如の教訓をみちびき出さなくてはならないであろう。この点は「共産主義者」4号の広田論文をみられたい。

(註2) 十月二十五日——一九五六年十月二十三日、ブダペスト大学生一万人のデモをのろしに、ハンガリア革命は勃発した。同年三月にはソヴィエト共産党二十回大会があり、スターリン批判が展開され、六月二十八日にはポーランド反乱が起っていった。十月二十四日朝、ソ連軍ブダペスト侵入の、いわゆる第一次ソ連軍介入である。翌二十五日も激しい戦闘は続けられ、ゲレ第一書記は解任され、カダールがその席についた。この日ナジ、ルカーチらは党中央委員に復任した。

(註3) ナジが新政府を組織するのは十月二十七日である。この新政府にはルカーチなども含まれているが、また一方、ものの五日後に革命をソ連軍に売ったアルタル・アポロなども建設

相として入っていた。ナジへの幻想は根強かつたらしいが、このナジ政府がスターリニストとの野合であることは明白であった。この手記のように、ナジとナジ政府を区別して人民はとらえていたようだ。(フェイト「ハンガリーの悲劇」P240)

(註4) 十月三十日、ナジは連立政府を提示した。ゾルタン・テイルディは小地主党側から加わっている(フェイト「前掲書」P208)

(註5) 十一月四日——いわゆる第二次ソ連軍の介入。革命の挫折。ナジ政府解体、カダール政府成立。

—編集部—

ハンガリア革命における

労働者評議会の成立と消滅(下)

元大ブダペスト
中央労働者評議会

副議長 F・テ エ ー ケ

その日(註1)、BESZKART(運輸労働者組合)のバス・ガレージが競技場の反対側にあつた関係から、労働者はロシア軍戦車の到着を目撃した。彼等はわれわれが逮捕されたものと思ひ、連絡しうる限りの者にすべて情報を流し、二十四時間ストライキを宣言することに決定した。われわれもまた電話で、ブダペスト工業工場の半数で労働者はわれわれが逮捕されたものと信じ、ストライキに突入したという知らせを受けた。われわれは彼等を不利な立場に置いておくことなど出来なかつたし、二十四時間ストライキの宣言以外に行うべきことはなかつた。それに、われわれは政府の暴力的干渉に抗議しなければならなかつた。昨日彼等はわれわれを交渉相手と認めておきながら、今日は戦車を送つて寄せつけたのだ! われわれの宣言した二十四時間ストライキはすべての者に知れ渡つた。鉱山労働者も同調し、いまや完全に味方に入った。

例のカダールは狂いのようにわれわれに襲いかかつた。《何だ? 君らは労働再開を決めたばかりで、もうストライキをしているのか?》
われわれは抗議する権利をもっていると説明した。結局のところ

ろ、ソヴィエト戦車をわれわれに送り向けたのは政府の要求によつてであり、自衛のためではなかつた。カダールはわめき立てた、自分はおモチャじゃない、一國の首相なのだと言つた。彼は「コミニニスト」餘りが主人であつて、われわれではないことを証明したかつたのである。われわれの云うことには少しも構わなかつた。労働者の望んでいることはいつにも数にも入れなかつた。指導者が(彼なのだ!)何が正しいかを良く知つていた。大衆の望むように彼が従つてすることなどなかつた。

その時期、国内の経済状態は生産の減少のために悪化していた。カダールは、大工業工場の指導官とカダール、マロサン、アプロなどの首脳陣および中央労働者評議会のメンバー、バリ、カロチャイ、カルサイが出席する会議を議事堂に召集した。バリ、カロチャイ、カルサイの三人共演説をし、カロチャイの話(註3)は放送された。しかし、それは歪曲偽造されたのちにあつた。カロチャイは述べた。労働再開を妨げ、ストライキを起させようとする挑発分子がいるので、われわれは平穩に労働することが出来ない。例えば、アンジャールホルドでは中央労働者評議会が再開をアツピールして

るときに、党責任者はストライキを挑発していると彼は述べた。同様な事件はラング機械工場、ハンガリア鉄鋼工場でも起っていた。M.A.V.A.G.では、党責任者が中央労働者評議会をファシスト組織と呼んで、労働者にアールを聞き入れないようにと話している。カロチャイはこう述べたのである。ところが、放送局の連中が仕立てたのは、演説のどこからか《ファシストの》という言葉を使った。彼等は、それを《挑発分子》の前に差し込んだのである。彼等は党責任者についての演説をすべてカットしてしまった。カロチャイが《これは、左翼反動派の責任である》と述べたところでは、《左翼》をカットした。これが演説を放送した連中のやり方なのである。

この事件の後、中央労働者評議会は交渉の結果に関する情報機関紙を発行することにした。それにはこの会議については何も載らなかったが、その席上でカダールは述べた。《労働政府は困難な任務を負っている。それというのも、労働者の指導者たちの間に混乱があるからであり、彼等は進むべき正しい道が分からないためである》そして彼は、ハンガリアに反革命が起っている。その証拠には二百四十一人も「党員」が殺されたと言った。そこでバリは立ち上がり、自分が誰でもどこから来たか会議を述べ、つづけて云った。《さて、労働者の指導者の間には何の混乱もありません。すると、それはきつとあなたがたの——ここで彼はカダールと部下を指さした——間にあるに違いない。私は共産主義者となって十年になるが、革命のあいだ街路に出るのも、労働者たちの間に入るのも、何も恐れはしませんでした。私を吊るそうとは誰も望みませんでしたよ。》カダールは憤激して紫色に顔色を変えて、こぶしでテーブルを叩いた。《挑発者だ！ 外へ放り出せ！》しかし、彼はバリに対して何

も出来なかった。バリの演説はそこにいた二百人余りの人間にあまりに強烈な印象を与えてしまったためである。バリは古い社会民主主義者(註4)で、一九四五年に共産党に入った。そして彼は非常な活動家であったが、労働者には彼が正直な人間であったので好かれていた。

カダール政府はその頃、御用労働者評議会を作っていた。それは秘密裡に活動し、中央労働者評議会の名の下にアッピールや宣言を発表し、われわれが労働再開を決定していたときにストライキを呼びかけていた(註5)。夜間に彼等はピラを配り、われわれの名で電話をかけた。われわれは彼等の行動に対抗する時間を費さなければならなかった。後になってわれわれが何もしなかったことを非難できるようにと、彼等はわれわれが重大な活動をするのを妨げていたわけである。議事堂における前述の会議で、カルサイが抗議したのはいずれに對してであつた。そして彼は、われわれは遂行しなければならぬ経済的任務を負っており、政治的任務を好まないと述べた。《われわれを政治的任務に立ち向かせようとしているのは、あなたがたなのだ——彼はカダールに云った——平和と秩序を望んでいるのか、それとも望まないのか？》もちろん、彼等は望んでいなかった。われわれは、ムニツヒがロシア式の綿入れ上衣を着た新しい《労働者兵士団》を組織しているのに気付いていた。彼等はわれわれを全力で攻撃する準備が整うまで時間をかせいでいたのである。しかしながら、われわれも遅れはしたけれど、最重要任務を決定する各種委員会を創設した。彼等はその策動にもかかわらず、われわれが先んじたことを見てとって、とうとう、新労働者評議会法についてわれわれと労働組合

とが検討することに同意した。われわれの代表はS.Z.O.T(全国労働組合委員会)の代表と会見し、法案を主にユーゴスラビア労働者評議会(註6)を基盤として成文化した。われわれが提案して八日後に、政府は法案を検討した。しかし、最後に法令として発表したときには、党が労働者評議会に政治的干渉を加え、活動を抑制できるような部分を彼等は残したのである。政府はまた、行政官庁、各省、郵便局、鉄道などにおける労働者評議会の選出を禁止した(註8)。これらの労働者は憤慨して、喧騒と論争が巻き起つた。こうして政府は基本的問題からわれわれの注意を引き放し、われわれの力を分裂させる目的を達したのである。

中央労働者評議会は、労働者に情報を知らせるために自らの新聞をもたなければならぬと要求した。われわれの新聞《ムンカシウイサグ(労働者の新聞)》は出版する間際に押さえられた。この新聞は、政府と中央評議会との交渉の詳細について、カダールの尊大な言葉、ハンガリア人民に対する侮蔑的言辭、《私は君たちが私を認めようと思つてまいと一向に構わない。私には援後してくる二十万人のロシア兵士がいる。私はハンガリアの主人なのだ。》というような発言を公表する計画であつた。

結局、中央評議会はセベスチエンを委員長とする新聞委員会を結成して、《労働者評議会機関紙》を発行した。各地区に一部の謄写印刷新聞が送られ、それは工場の数だけのコピーにこんどは複写され、それから工場評議会は労働者の数だけコピーを印刷した。これは最も広く読まれる出版物となつたが、しかし残念なことにそれが各労働者の手に渡るまでには一週間もかかつた。そしてこの機関紙に対してカダール政府は、ファシスト新聞に對したよりもひどく恐

▼労働者文庫▲

議会と現代革命
A5版36頁/¥60(¥20)

フランス帝国主義の
中国承認と労働者階級
タイプ版20頁/¥30(¥10)

四・一七ストと日本共産党
A5版66頁/¥100(¥30)

これからの労働運動
A5版28頁/¥50(¥20)

生活はなぜ苦しいか
A5版28頁/¥50(¥20)

侵略と戦争と反動の日韓条約
売切れ

▼労働者学習シリーズ▲

レニストライキについて
(品切れ)

ゲルス資本主義について
(品切れ)

社 前 進 社 東京都豊島区東池袋2の62の9佐藤ビル

れを抱いていた。とうとう彼等がそれを承認するに至ったのは何週間もたってからなのである。われわれは慣行的にカダールと毎日会見していた。ときには一晩に三回も会談したが、彼や閣僚は休息をとっていたのにひきかえ、われわれの方は完全に消えうし切っていた。機関紙がついに表われると、カダールはロシア人の助けを借りてその配布を妨げようとした。彼はロシア軍地区司令官に謄写印刷機を押しさせた。そこで、われわれは報復手段として、ハンガリア労働者は一日ネブサバドサグ（党の公式機関紙）を読まないことに決定した。われわれはこのアツピールが受け入れられているか見るために通りへ出たが、主要な通りでは人々が切り裂かれた新聞の山を膝深く埋めるほどにして踏み歩いているのを目にした。労働者は新聞を買いはするものの、直ちに切りきざんで抛り投げていた。

依然として、われわれはソヴィエト軍司令部との接触を保っていた。友好的な精神で始まった準備なものでもないある会議で、われわれはカダール政府を認めないこと、ソヴィエトが干渉する権利も認めないことを彼等に腹藏なく話した。われわれはまた、通訳を連れて工場へやって来て、労働者と話してみようにと云った。彼等は招聘を受け入れた。一人のソヴィエト軍地区将校はテレフォン工場へ来た。彼の最初の質問はこうであった。十月二十三日に労働者は何を求めたのか、社会主義かファシズムか？ 労働者は社会主義に《ダー（イエス）》と鳴り響く声で答え、轟く声でファシズムに《ニエート（ノー）》と答えた。彼は、われわれの要求のすべてに渡って質問をし、そして一言も云わずに帰っていった。工場から帰る前に彼は労働者評議会の事務所に入ってきて、書記に労働者と同調しているかどうかと問ねた。書記は肯定的に答えた。そこでソ

ヴィエト将校は政府と労働者が同じことを望んでいるのを見て、それでは何故両者の間に協力が欠けているのかと問ねた。彼は、問題が何であるか極めて明白に見通してはいたのだが、それを口に出せる位置にはいなかったのである。

革命の爆発一カ月後の十一月二十三日、中央労働者評議会は、午後二時から三時の間誰も街路に出ないようにと決定したが、その場には政府高官が一人出席していた。彼は、地方からの評議会代表がソヴィエト軍兵士と党幹部の越権行為について報告するのを聞いていた。地方代表は、ボルシヨド郡がムニツヒの《労働者兵士団》によって包囲されており、労働者評議会のメンバーが首都と連絡するために秘かに包囲網を突破しなければならぬと述べた。この《労働者兵士団》がチェコスロバキアからの武器で武装している証拠もあった。ソヴィエト将校は彼等報告者の名前を問ねた。彼等は名前を云った。しかし何も起らなかった。二時少し前に議長が立ち上り、これから何が行なわれるかを会議に話した。彼はソヴィエト将校に何も恐れることはないと納得させた。これはただわれわれの最も神聖な国家的祝日のために行う黙とう儀式なのであるからと云った。われわれは全員立ち上って、一分間の黙とうをした後、国歌を歌った。ソヴィエト将校たちも立って、帽子に手をあて敬礼して聞いていた。彼等は明らかに感動させられていた。誰もこの場合にいかにも振舞うべきかを教えてはいなかったのにである。

この間、首都の全街路を占拠していたのはソヴィエト軍隊だけであつた。ロシア人は後でわれわれに打明けたが、街路には人っ子一人おらず、彼等は何が起きるか知らなかったのが非常に驚いたといふ。通りに人々が現われて、ハンガリア人は仲間の市民を危険にさらすことをやりはしなないと知っていたから、やっと安心できたのであつた。

カダール政府は、われわれが二つの面で、政府に対してまたソヴィエト軍に対して戦っているのを知った。それにわれわれがソヴィエト軍司令部にすべて情報を与えているという事は、むしろ彼等（カダール政府）を無視していることに違ひなかつた。そこで、彼等は、政府の代表が一人われわれの会議に出席するのを認めるよう要求した。それはカロロイ・シャンドールという男でカダールの最も密接な協力者であり、われわれの味方のような振りをしながら、絶えずわれわれに対するスパイとなつた。

十二月四日が近づいてきた。われわれは、十一月四日のソヴィエト軍第二次介入に抗議して、その日全ブダペストが、すべての窓にろうそくを灯すよう要求することを決定した。この意志表示は夕暮れに行なわれることになつた。政府はろうそくの全ストックを押し取しようとしたが、人々は闇市で買ったのであり、十二月四日の夕方にはブダペスト中が燃えるろうそくで輝いた。真つ暗な窓も少しはあつたが、多分それらには党幹部が住んでいたのであろう。カダールは報復手段が取られるであろうと宣言した。中央労働者評議会は今では、反革命的熱望を有すること、国内に法と秩序を保つために政府と喜んで協力などしないことを明白に示しているというのであつた。この宣言（カダール）の後、中央労働者評議会のある分子は、われわれは挑発的状况を生み出していること、労働者が賛成している場合ですらストライキを行うのは誤っていること、われわれは評議会の活動を制限しなければならぬことなどを云い出し始めた。われわれは、これらの意見は外部から注ぎ込まれたものであり、わ

その頃、ある男が私の所へ会いに来て、インド大使のメノン氏がブダペスト中央労働者評議会と接触をつけようとしていると云つた。そこで、私はインド代理大使館へメノン氏との会見に出かけた。彼は革命について、現在の状況について私に問ねた。そしてネール氏に情報を伝え、ネール氏はハンガリア人民の救援に最大の努力をするであろうと約束した。彼はハンガリア事件はハンガリア人民の感情の自発的発露であつたのであり、外国から扇動されたものではないことを完全に認めた。しかしこれは個人としての意見であり、彼は何らかの名の下に話す権限はないとつけ加えたのであつた。

この間にもずっと、われわれの謄写印刷機関紙は、カダールの大きな憤りを起して発行されつづけていた。また、労働組合と何らかの協定を結ぶ時期が来つづつあつた。カダールは、われわれが労働組合委員会委員長のガスパールと会談するようにと提案した。しかしわれわれは彼がラコシ時代のちよう臣の一人であつたから、何も行いたくはなかつた。けれども、労働者評議会は極めて多くの政治的かつ経済的委託任務を有しており、援助なしに労働者の利益を見守ることは出来なかつた。そのため、他に良い解決方法もないままにわれわれはガスパールとの交渉の席についた。交渉は一晩かかつた。彼等はスターリン主義制度を擁護した。そして、カダール政府は労働者評議会の自立を許容しはしないが故に、われわれは彼等に

従属しなければならぬと云った。彼等はその日刊紙ネバカライト（人民の意志）紙の最終頁をわれわれの声明にと提供したが、それが原文のまま表われるかどうかについては約束などしなかった。結局、われわれの交渉は実らなかつた。われわれが自立した民主的組織を求めていたためであり、労働組合は競争を組織するというだけの約束で党の付属機関となっていたので、労働者の利益を代表することは不可能であつた。

この翌日、カダールは、BESZKART（運輸労組）事務所の仕事の妨げとなつてゐるからわれわれの本部を、アカツファ通りから農業省へ移すべきであると提案した。この頃には、ムニツヒは警察力の組織化で大前進を遂げており、彼等は農業省ならわれわれを逮捕しやすいと考えたのに違ひなかつた。われわれは移動を拒否したが、しかし討論を重ねた結果ガスパールとの間に、われわれがMEMOSZのビルの六階に移れるという協定をまとめた。移動する前にわれわれは、最後の秘密会議を開いて全国労働者評議会を設立することを決定した。これは次第に危急なものとなつていたのであり、国内中の工場から労働者評議会のメンバーが、われわれを脅迫する目的のもとに逮捕されて消え始めていた。ペチでは、数人の鉱山労働者は地下にもぐつたまま、仲間の労働者の逮捕に抗議しハンガー・ストライキを始めていた。

私は秘密会議の組織を行つた。中央労働者評議会のなかの誰も、ラスでさえもそれがいつ開かれるかを知らなかつた。私は十二月六日の晩に定期会議を召集して、代議員に今夜は家に帰らないようにと伝えた。それはMEMOSZ本部の室であり、われわれは全員そこで眠つた。翌朝の七時になつて、私は秘密会議の招請状を配つ

ることを提案した（第90）。これは決議の中に含まれたが、口頭であつたために文書には残っていない。また、しかしわれわれは全国労働者評議会の結成を宣言しなかつた。それは、そうした場合に、カダール政府に中央労働者評議会を解散させる口実を与えてしまうことになりかねないからであつた。カロチャイは、最悪の事態になつた場合には、われわれはソヴィエト政府との会見を要求しなければならぬと提案した。これもまた決議に含まれた。

ついに、われわれは四十八時間のゼネラル・ストライキを決定した。しかしわれわれは伝達手段を持ってゐなかつたので、これは月曜日に工場で労働者に知らすことになつた。かくして、火曜日と水曜日、十二月十日と十一日にブダペストの全生産労働は停止する。

われわれはみな、カダール政府が必ず全力攻撃で襲いかかつてくると感じて、もう一度ロシア軍の所へ向うことに決めた。われわれはカダールがソヴィエト政府を誤つた方向に導いていきつゝあり、ハンガリア労働者の代表として彼等に正しい状況を知らせるのがわれわれの任務であると考えていた。国内の諸条件は悪化する一方であり、一定の保守勢力が普通通りの制度への復帰を唯一の解決策として考へてゐることは明白な事実であつた。これら保守勢力とはカダールとその一党であり、彼等が正しい発展を妨げ邪魔してゐた。

われわれはソヴィエト軍司令部へ代表を送り、ブダペスト大使館を通じてソヴィエト政府との会見を要求することに決定した。（ソヴィエト司令官は仲介の労をとることを拒否した。彼はこれは外交問題であると言つた。彼はこれをハンガリア政府に伝達するであらう。そしてもしも政府が承認すれば、政府がわれわれの要求をソヴェット大使館に宛てることになる。）

た。しかし、第九地区の代表が警察のスパイであつたため、すぐにその招請状は中央評議会へのカダールの代表シャンドールの手に渡つてしまつた。彼は私が組織部門の部長であることを知つて電話をかけてきた。《われわれは君が全国評議会の設立を企んでゐることを知つたよ。君に警告したいんだがね、もしもこの会議を開くのなら、われわれは解散させるために軍隊を差し向けることになるだろうよ》どうしようもなかつた。そこで私は、われわれはその会議を開くことはないと言つた。もちろん、こつちは開くつもりであつたけれども。私は他の者の考えを問ねたが、彼等も同意した。

——その会議で、地方からの代表、とくにシャルゴタリヤンの代表は労働者に対する弾圧とその耐え難い状況について報告した。彼等はわれわれにゼネラル・ストライキを宣言するようにと迫つた。もはや政府が労働者の要求に一べつの考慮も払つておらず、それだけでも十分すぎる理由であつた。われわれはゼネラル・ストライキは二十四時間か四十八時間にすべきに討論を進めたが、その時ラスとシャルゴタリヤンの代表とが電話に呼ばれた。電話はシャルゴタリヤンからで、そこでは六百人の人間が、逮捕された労働者評議会メンバーをソヴィエト軍司令部が釈放するように要求して市役所へ行進して押し寄せたのである。屋根の上からソヴィエト軍兵士と《労働者兵士団》とが彼等に銃火を浴せた。そして約三十人の死傷者がでたという。このニュースは火に油を注ぐ結果になつた。憤激の嵐が舞い、われわれはゼネラル・ストライキを呼びかけることに決定した。公益事業、水道、電気、ガスや、病院救護施設は制限され続けられるが、その他一切は止つてしまふことになる。私は、われわれが国際自由労連に向つて連帯支援ストライキを要求す

われわれは、これが最後のものになるかも知れないと考えながら会議を終えた。そして、場合によっては二度と会えないであらうし、お互いに別れのあいさつをして、人民革命の精神のもとに可能な限り長く評議会を建設していくことを約束した。

十二月八日にカダール政府はわれわれを片付けてしまつたわけであるが、そのときわれわれは自分達を守ることが出来なかつた。夜になつてからカダールはラジオで中央労働者評議会の解散を放送したが、しかし、中央評議会のメンバーはすでに朝と昼間のうちに逮捕されてしまつてゐた。朝の六時に、MEMOSZ本部で前の晩を過ぎた数人の評議会メンバーが警察に逮捕された。私は正午に逮捕された。警察本部で、私は秘密会議の自分の演説をテープで聞かされた。そして私は国際労働者階級に連帯支援ストライキをアツピールするよう提案したかどで非難された。私は、自分はマルクス・レーニン主義を学んだのであり、労働者階級は全世界一つに団結してゐるものだと知つてゐるからだと言へた。刑事は、教わつたすべての事を真面目にとつてはならないのだと注意をしたものである。

私の逮捕のニュースを聞いて、私が働いてゐた工場ではストライキを続けた。彼等は、多数の古い忠誠な共産主義者が加つた私の釈放を要求する委員会を結成した。彼等はあちこち動きまわつて、私の責任を引き受けてくれた。そこで私は、厳しい警察の監視を受けることにはなつたものの、すぐに釈放された。釈放されてから、私は他のメンバーも同様に自由になつており、政府は協力しようという姿勢を示してゐることを知つた。しかし私は信頼できず、わなだと感じた。そしてとくにバリ逮捕の状況を知つたときには、脱出する準備を整えたのである。われわれがゼネラル・ストライキを決定

した例の会議が終わってからは、バリは家へは戻らず、労働者の間なら安全だと思つてベロヤニス工場での晩を過した。朝になってソヴイエト戦車部隊が到着して、工場を包圍した。しかし、労働者は中へは踏み込ませなかつた。部隊は何の行動もとらずに、二日間そこにどまり、労働者も自分達を守る用意を怠らなかつた。結局カダールが、議事堂でバリと彼の仲間労働者と会談することを望んでおり、行動の自由を保障するという連絡を送つてきた。彼等はしばらく協議して、出かけることに決めた。カダールは彼等のためにバスを一台寄こした。議事堂ではカダールが待ち受けていて、二言三言話してから、冷ややかに見つめているうちに、彼等労働者はカダールの部下に逮捕されて、連れ去られてしまつたのである。バリは後になって、共産主義者としての経歴により釈放されたが、ラスは駄目であつた。

四十八時間ストライキは、われわれが逮捕されてしまつており、カダール政府が陰謀を企んだにもかからず成功を取つた。御苦勞にも彼等は中央評議会が政府によつて解散させられており、その決定は無効であると工場で話をしたのであつたが、労働者は家に帰つてしまい、翌日まで生産労働に顔を出さなかつた。それは完全なストライキであつた。すべての交通は止まつてしまい、銃剣をつきつけて二、三の電車を走らすのに彼等は成功しただけであつた(註10)。このストライキは、ハンガリア革命劇の最も重要な幕の最後の場であつたのである。中央労働者評議会は解散させられ、労働者に対する弾圧が始まつたのである。

最後に、私は大ブダペスト中央労働者評議会の役割とその計画について、二、三つけ加えておきたい。

も反労働者になつたときには労働者評議会に対しても、労働者の利益を守ることである。しかしながら、基本的な熱望は労働組合と労働者評議会とは、たとえ生産における利益が相矛盾しても、可能な限り協力することであつた。労働者評議会の未来の役割は、中央評議会の経済および政治委員会によつて決定されることになつてゐた。労働者評議会から結成される生産委員会が国家行政活動においていかに加わっていくことになるのだろうか？ 本当のところ、これらに明確な見解を打ち出すには、あまりに時が短かすぎたといふことなのである。

われわれは、法令による統治機関の保持を望んではいなかつた。議会には法案を通過させておこう。しかし、経済的問題に関しては、議会は生産委員会の承認を受けた場合にのみ決議を通すことが出来るようになる。われわれの見た限り、どんな政党が活動できるか、どんな種類の政府をわれわれがもつか、いかにして社会主義社会の存続を保障するかを決定する新しい機関を国家は必要としてゐた。生産委員会もまたこの機関に基いた原理に依つて活動することになり、それは経済立法によつて合法化される。現存する議会制度では、政治的任務と経済的任務は分離されてゐない。確かに、経済的問題は議会で論議されたが、しかし政治家によつて、労働者の利益は考慮に入れられずに論議された。重要な勢力をもつ政治家はいかなる問題も自分の好きなように解決することが出来たのであつた。

生産委員会は国家生活の重要な指導的中心になるであろう。二院制すなわち二つの議会は必然的に相互に補足しあふ(註14)。どちらも他方の活動を妨げるような決議を通すことは許されないのである。

中央評議会メンバーの圧倒的多数は教育を受けた労働者であつた。それらの中には、技術者が四、五人いた。われわれは七つの部門を設置して、各部門部長が同時に中央評議会の副部長を兼ねた。この中核が労働者評議会のプログラムを綿密に作り上げたのである。

労働者評議会の究極の任務は、生産を支配し、労働者のために工場を管理し、労働組合・党・政府など他の組織から自立して活動することにありと考へてゐた。われわれは、国家事態を、一致団結して支配する二院制のようなものを考へた。一つは常設議会であり、立法任務を遂行し、もう一つは評議会が成長した形の民主的に選出された労働者代表機関であり、経済的任務を見ることになる(註11)。われわれは、熟練者を要すると思つたので政治的任務を行うことは望まなかつた。われわれの望んだすべては、われわれ自身の運命を支配することであつた。

また、われわれが中央労働者評議会の組織問題を検討したときに、その一つとなつたのは評議会の未来についてであつた。生産の支配という現実的任務を達成しうるためには、現存するコミニニスト(II)スターリン主義者)国家資本主義(註12)を打破することが必要であつた。労働組合もまた組織しなせなければならぬ。われわれは一九五七年一月一日に、全工場および企業は国際自由労連の法規に基いて新たに民主的に指導者を選出しなければならぬと決定した(註9)。誰も労働者評議会メンバーと労働組合指導者を同時に兼ねることは出来なかつた。中央評議会は、ハンガリアの各労働組合は(註13)世界労連から脱退して、その代りに国際自由労連に加盟することを決議した。労働組合の任務は、政府に対して、またいつで

う。当然のことながら、われわれはこれらの計画を最終的なものとは考へなかつたが、それらが警察の手に落ちたときにはわれわれに対する攻撃手段として用いられたのであつた。政府は二院に従属することになる。その関係は議院から選出される。熟練を要する一定の地位は二院の熟練者が着任する。二院のどちらでも政府を解散させることが出来て、政府は両院に責任をもち、両院の支持なしには活動出来ないことになる。新しい民主ハンガリアでは、われわれは立法府を行政権力から分離するのである(註15)。

われわれはまた、企業からの利益総収入をいかに分配するかも検討した。利益は三つの部分に分けられ、一つは国家に、一つは再投資に、一つは労働者となる。労働者の間の分配形態は労働者評議会により決定されるであろう。西欧において流行している人民資本主義、株主労働者という考へがわれわれにも生じたのであつた(註16)。しかし、これら事態が時があつたとして、いかに発展していったかについては、今では私に分らない。

われわれは革命に生き、そして戦わなければならなかつた。それで多分、われわれは自分達の未来がどんな具合に形成されるか完全に明確には見ることは出来なかつたのであろう。しかし、われわれは——私だけでなく仲間の労働者のすべても——われわれが正しい道に在るのであり、これこそわれわれが、国家が、社会立憲社会が必要とするものだと感じていたのであつた。

そして、これがロシア人とカダール政府とが足下に踏みつぶした事実なのである。

《われわれの政治制度は……マルクス・レーニン主義党に

基いており……労働者評議会の制度を拒否するのである」

ハンガリア社会主義労働者党第十七回大会におけるカダー
ルの言葉。

〈註〉

広 田 広

(1) 十一月二十一日。ハンガリア労働者評議会全国会議のソ連軍による粉砕とその後の事態について。当然予想される弾圧に対しては即時ゼネストに入るべき確認が必要であったこと。なぜならば、弾圧後即時ゼネストに突入した下部労働者と指導部の分裂は回避されたか、少なくとも延期されたであろうから。すでに敗北しつつある反乱の過程では、全ハンガリア労働者評議会とカダール政府(ソ連軍)との明白な対立関係をのこすことが、後のレジスタンスのために必要であったからである。にもかかわらず、——
労評上部は、軍事的な力関係において差のある二つの勢力の間の「交渉」が何を意味しているかについて最後まで意志統一しえなかった。

(2) 「コミュニスト」、「共産主義者」、「党員」。現事点においては、インド・ヨーロッパ語でコミュニストという場合、特にそれが帝國主義者、スターリニストによって用いられる場合、われわれは「共産主義者」という本源的な訳語よりも単に「党員」という訳語を与えるべきであろう。或る場合には、(他のハンガリア革命の資料には)「コミュニズムは社会主義とは無縁である。」といった、パドキシカルなテーゼさえみられる。このテーゼは、「コミュニズム」という名のスターリン主義は、社会主義とは無縁である。」という意味で読まなければならない。この同じテーゼが、プロレタリア独裁を否定する社会党系から提出されるときは、わ

れわれは、スターリン主義に対する社会主義者の的はずれな批判としてうけとらねばならない。

(8) カロチャイ演説について。

テーケによるカロチャイ演説の引用部は、一方で「ストを挑発する」という誤まった判断を含んでいる。テーケはカダールによるカロチャイ演説の歪曲に抗議して引用しているだけでカロチャイの判断にある政治的誤謬にはふれていない(それはむしろ、テーケの誤謬を示しているのだが)。

(4) 反乱前のハンガリアにおける反スターリン主義は、東欧一のスターリン主義によってパージされてしまうか、社会民主主義的な「党員」となるかの二者択一をせまられたというきわめて悲劇的な事態の中にあつた。それは反乱勃発時に、即時党をスターリン主義者と反スターリン主義者に分割して労働者評議会内グループを形成することをさまたげたばかりでなく、最後まで、新しい政府(議会民主主義にもとづく)のスローガン以上に進めなかった。労評指導部内の一分派をつくりだしていた。

(5) 「御用」労評が、カダールの指令でストを呼びかけた。それは、それはむしろカダールの誤算であつた。それは一方で、生産の再開を「政府から」よびかけ、他方でストをよびかけるといふカダールの自己撞着を示すだけでなく、さらに、下部からの「最後まで」ストをつづける要求を、すでに動揺しはじめた労評指導部に対する「攻撃」として利用しようとしたカダールの誤算となつた。それは、反乱敗北後のカダールによる「生産再開」の呼びかけが五七年上半期まで失敗しつづけていたことをみればわかる。むしろ、労評指導部は、戦闘的部下のスト要求を正当化して、カダールの一誤

算」を本ものの誤算に転化せしめることにつとめるべきであつた

ろう。労評指導部はスト要求を「左翼的反動」とみなしはじめたときから、分裂と混乱と決定的敗北をもたらしはじめたのだ。

(6) 労評全国会議が粉砕されたのちには、ストライキにもとづかないいかなる戦術も無効であつた。

(6) カダー派。

(7) ユーゴ労評は、経済的機能に限定され、単位経済組織として独立採算制にもとづき、「社会主義競争」という地方分散的(排他性をもつた)競争を行っている。チトー主義官僚は、この「排他的競争」の上に立っている。これをモデルとして形成されつつあつたポーランド十月反乱時の労評も、ゴムルカとスターリン主義者の妥協成立後は、管理部とならんだ要求機関に転化された。ハンガリアにおいては、はじめ、武装反乱組織の形成にともなつて創設された労評は、武装反乱組織が粉砕されるにもなつて、カダール政府との「交渉」機関に転化されて、解体されていった。

(8) ユーゴ、ポーランドの労評がモデルにされたということは、とりわけ第一義的問題であつた軍事的機能と労評との結合が軽視されるモメントとなつた。運輸通信系の労評が後から問題にされてきたことはそれを示している。

(9) ここにも国際プロレタリア運動の悲劇的事態が表れている。後にハンガリア革命弾圧を支持し、現在ソ連核実験を支持し、(国際自由労連と全く同様の)議会主義と改良主義とに汚されている世界労連と、朝鮮戦争とNATO体制、アメリカ帝國主義者のキューバ侵略を支持している国際自由労連との分裂という事態、この両指導部の二者択一はもはや何らプロレタリア国際主義を意

味しない。

(10) 「第四インターナショナル」(パブロ派トロツキスト機関紙)によれば、ストやぶりのために派遣されたソ連の労働者は、真相を知つて、ハンガリア労働者のサボとストに参加したり、同情を示したりしたという。

(11) ここにも、労働者評議会権力と議会主義的代表制の折衷的結合の例がみられる。ポーランドの失敗したモデルの経験は、その後に表示された。

(12) この規定は、テーケにおいても充分に展開されたものではない。おそらく「ナジ研究所」(前号註参照)内の「グループ」から借用したものと思われる。

(13) 革命後、世界労連代表の調査団がハンガリアをおとつたが、事態の意味を明確に把握できなかった。労連の大会では、カダール派の代議員によつて、(労働者評議会についてはその本質にふれぬまま)ファシスト反乱が粉砕されたと報告された。

(14) ここでも註(11)と同様のことがいえる。テーケは、敗北の過程で余儀なくされるかにみえた妥協形態(立法議会プラス生産委員会に転化された評議会)を、未来の体制のヴィジョンとして「？」つきで提出しているようである。

(15) 前註のような混乱はここでははっきりした形で示されている。

(16) ユーゴ労評方式と西欧社会民主主義の実現されざる幻想との結合形態が示されている。註(4)と註(7)からもテーケの誤まった問題提起の歴史的条件が与えられるだろう。

本論文(上)についてはハンガリア革命6周年特集別冊(四二頁参照)誌上で註釈が与えられる予定。(編集部)

■ハンガリアの血叫び

あらゆる工場・地区・および州の評議会に対する

大ブタペスト中央労働者評議会

の訴え——一九五六年十一月二十七日

労働者同志諸君！

ブタペストの産業及び地区より民主的に選ばれた中央労働者評議会は、我々労働者階級がより強力になり、また一層団結するために諸君に報告と訴えを發する。

諸君も知っているように、大ブタペスト中央労働者評議会は、各工場に於ける労働者評議会の活動を調整し我々の共通の要求を主張するために、十一月十四日、大産業（の労働者評議会）のイニシアチブで創設された。それ以来、中央労働者評議会は、今までのところ成果はとうてい満足できるようなものではないが、（政府が）いろいろな決定を下す前に我々の要求を強硬に提出してきた。我々は、我々の交渉の過程において、決して十月二十三日の輝かしい民族革命の目的と基本的要求からそれることはなかった。

前にもしばしば宣言したが、我々は再び宣言するのである。即ち、我々は労働者階級より委任されているのであり、我々は我々の委任に背かず、必要とあらば、生命を犠牲にしても我々の工場や祖国を資本家や封建制度の再興から守るべきであると。しかし同時に我々は我々の社会経済的制度をハンガリア風に独立して築きたいし、革命という目標を放棄したくない。我々は労働を社会の基礎と考えている。我々は労働者なのだ。我々は働きたいのだ。この目的のために、我々は十一月二十一日、我々の最も重要な問題即ち労働の再開問題を労働者評議会全国会議として討議するために、ブタペストのスポーツスタジアムに州及び農業地方の代表者を召集した。

我々が前もってその目的を政府に知らせ、会議に政府代表一人を招いたにも拘らず、政府は、我々がこの善意ある会議を開くことを妨げた。この予期されなかった措置は事態を深刻化した。政府の干渉を知らされた時、ブタペストの工場及び公共運輸送機関は直ちに労働をやめ、抗議のストライキに入った。

しかしながら、政府の干渉にも拘らず、我々は、地方の代表者達と会合した。そして、次のような一つの決議が採択された。即ち、四八時間の全国抗議ストの後、もし政府が全国労働者評議会の労働者階級の唯一の公認の交渉機関としてすんで認め、更に基本的な革命的目標をもった十一月十四日の諸要求についての交渉を直ちに継続する用意があるならば、スト権を留保し労働を再開する準備があること、この基礎の上に立って、われわれの委員会はペチコムロ抗夫代表団の一人を含めて、十一月二十二日夜、ヤノシュ・カダル首相と会談した。

二十三日朝、われわれの代表団の一人であるヨゼフ・バラズが会談の結果を伝えた。その伝達の要点は、首相が、公認の交渉団体として大ブタペスト中央労働者評議会の権限に関する大ブタペスト中央労働者評議会のそれ以上の要求については、閣議（の決定）にゆだねると同時に、われわれが政府とのこれ以上の話し合いの結果を労働者に知らせることが可能であると約束したということである。

われわれは、こんなことがちっぽけなことに過ぎないことを認めねばならない。それにも拘らず、われわれは労働を再開することを決定した。というのは、こうした決定（労働の再開）が、もっぱら人民の利益となるとわれわれが見なしたからである。

われわれは、だまされてはならないのだ。われわれは、われわれが勝つことを確信している。だからこそわれわれに不利な決議案を通さないように注意するのだ。

十一月二十三日、ハンガリア政府との一致をみ、満足な保証を受けてイムレ・ナジと他の政治家達がブタペストのユーゴスラビア大使館の構内を去ったというニュースが世界に向けて放送された。その上同じ日、ブタペスト放送は、イムレ・ナジとユーゴスラビア大使館にいた彼の関係者がルーマニア人民共和国を亡命地としてくれる様に頼んだと報じた。そのニュースが労働者の間に非常な不安を生んだので、大ブタペスト中央労働者評議会は、イムレ・ナジの行方とその報道の出所に関する情報を手に入れ、ナジと直接に話す機会を与えられるべきであるという事を要求するために、委員会をハンガリア政府、ソヴィエト軍司令部及びルーマニア大使館との接触に急派した。

この重要な発表は、政府に対するわれわれの信頼の欠如を深めたことは明白であるけれども、われわれは、先にも述べた様にただ人民の利益のために限って労働を再開することを決定した。同時にわれわれは国内のあらゆる製造工場のでき事を十二分に重視して、われわれのアピール（労働の再開）に参加するように要求した。

工場はわれわれの手中、労働者評議会の手中にある。しかしわれわれをさらに強め、また、全体のために、われわれは次の仕事を最も重要なものとして背負っているのである。

一、地方又は州の労働者評議会がまだつくられていない全ゆる地方及び州は、そのような機関が直ちに下から民主的に選ばれるべきである。この目的のために、水産業特に州の中心地にあるものは中央評議会の創設を始めるべきである。

二、各地方及び州の中央評議会は、直ちに大ブタペスト中央労働者評議会と連絡をとるべきである。中央労働者評議会の議長はサンドール・

ラス即ちペロヤニス工場労働者評議会の議長である。副議長はクレスパー植物油工場の労働者評議会の代議員であるジョルジ・カロチエイであり、書記は、ブタペスト電車の労働者評議会議長のエヌトバン・ババイである。

州労働者評議会の公けの代表者は直接ブタペストに来て、連絡をとり、差迫った問題を討議するために、大ブタペスト中央労働者評議会の書記局と接触すべきである。

三、労働の組織はさておき、工場労働者評議会の最も重要な任務の一つは労働者評議会常任委員会の緊急の選挙である。これらの選挙に際しては、われわれは資本主義の復興を目指す全ゆる試みに対すると同様にラコシ専制政治に対して強力に闘争しなければならぬ。われわれは常任委員会には正直でやましいところのない純潔な生活をしているハンガリア労働者を必要としているのだ。かような労働者は常任委員会の少くとも三分の二の多数が保証されねばならない。評議会の権限に関する限り、われわれは、この問題に関して党中央委員会により発せられた法令には賛成できない。われわれは公共輸送機関労働者のための労働者評議会があるべきだと主張する。即ち、鉄道、電車、バスの車庫その他の労働者が評議会を切望するところではいかなる場所にも於てであろうとも。十一月二十六日の交渉に於て、首相は、われわれの見解を閣議にゆだねることを約束した。その時までわれわれはこれらの場所にすでに設立された労働者評議会が活動をすすめる事を求める。又われわれは、各省及び当局の上級機関に於ける革命委員会の権限に関して、党中央委員会がきめた決議とは意見を異にする。われわれは、現在よりも革命評議会にずっと大巾な権限が必要であると考える。

交渉委員会が労働者評議会によって原則として定数以上の立候補者から選ばれるべきであるということ、交渉委員の地位が内閣又は省による承認が必要であるということであってはならないということである。われわれは労働者評議会の地位を達成するために労働者評議会がその全エネルギーを傾注して闘うことを要求しているのであって、人々との接触を失った、ただ上から任命された信用できない傲慢な人々を受け入れたら、信頼できない野心家分子の登場に用心するのをおこたったりすることではない。

四、更に、新しい工場委員会の選挙が労働者階級、労働者評議会の真の意志を代表する者によって引き受けられるべきであるということが非常に重要なことである。きのこの様に生じている新しい自由労働組合は最高の賃上げ要求で人気を得ようと努めている。しかしながらこれらの自由労働組合に於ては、ラコシ時代の信用できない人々や労働者の中から選ばれた代表者ではない人々が主役を演じているのである。労働組合は、今日、労働者評議会の設立が彼らの闘争の成果であったかのようなふりをすることに懸命になっている。言うまでもなく、これは卒直に於て事実と反するのである。即ち、労働者評議会のために闘ったのは、ただ労働者のみであった。そして労働組合は闘争中、労働者評議会を設けるどころか、しばしば邪魔をしたのであった。

われわれの意見はこうである。(労働者の)利益擁護機関、たとえば労働組合にしろ工場委員会にしろただ下部から民主的に選ばれ、労働者階級の誠実な代表が指導者になっているようなものが本当に必要なのである。このことが重要であるという理由はこうである。すなわち、

労働者評議会がはつきりと設立されてはじめて、革命の目的遂行にとっての保証となるような完全に民主的な条件の下で、工場委員会選挙を行えるからである。われわれは、労働組合職員を除外した組織を保持することに反対する。われわれは、労働者評議会の仕事と同様に工場委員会の仕事を社会事業と考へる。

われわれは革命をくいのにする人間になりたくないし、他人がそうなるのを黙認もしない。われわれは自発的に労働組合員になることを望む。さらにこのことは、労働組合が官僚的になる事や人民との接触を絶つことをふせぐであろう。

われわれは、労働者評議会を単に経済上の機関としてしか認めようとしぬ新らしく設立された自由労働組合の態度に抗議する。われわれは宣言する。今日ハンガリーに於て労働者階級の真の利益を代表するものは労働者評議会であり、今日のわが国に於ては労働者評議会の権力よりも強力な政治権力はなく、われわれは労働者の権力を強力にするために全力を集中しなければならぬことを。

五、地方及び州の労働者評議会は直ちに赤十字配給センターと接触をもつて、社会的基礎に基いて公正な配給を保証するために代表者を本部に送るべきである。

六、地方及び州の労働者評議会は、市場や店頭の数値を見張る社会統制機関を設定すべきである。社会監視役は前述の販売所を訪れ、その犯罪者を公衆の侮辱にさらけだした後で、適当なその筋にあらゆる悪弊を報告すべきである。

七、地方及び州の労働者評議会は、大衆の意見を常にうるためにあらゆる努力を払うべきである。もし機会があれば地方新聞にスペースを要求して常に工場及び産業企業の労働者の事態を報告すべきである。この目的のために大工場における中央評議会は、われわれの訴えが全工場にとどまっているかを確かめなければならない。われわれがくり返し日刊機関新聞を要求したのに対し、首相は今日二十七日の閣議に従うことを約束した。もしこの要求が認められるならば、報告についての問題は解決されるであろう。

要するに、今日次のことが必要である。労働者評議会は労働を再開するということにおいてすら完全な統一をもって十月二十三日の民族革命運動のために働くことが必要である。われわれは第一歩を印したのである。今や労働者評議会は政府にまでなりつつある。しかしそれには数カ月を要するであろう。この期間中にわれわれは用心深くあらねばならない。なぜなら、多くの信用できないラコシゲレ派の人間どもが混乱に乗じて荒かせぎをやり、彼らの統治の回復をひき起そうと努めているからである。われわれは毎日、強力になりつつある。革命の準備に、すぐれた仕事をした文筆家達がわれわれに加わりわれわれと共にいる。われわれは俳優、芸術家、音楽及び知識人のあらゆる団体を含むハンガリア知識人の革命的評議会等によって支持されている。われわれの闘争の結果、誠実なハンガリア人がわれわれと共にいるところでは、われわれはこれまで未知であった民族的統一を成就しつつある。労働者評議会は、一層団結し、互いに一層緊密な接触をたもち、われわれの目的、即ちわれわれの国民性にとつた独立した民主的な社会主義ハンガリアをうちたてるために、真に革命的警戒心をもって団結して闘おう。

ブタペスト 一九五六年十一月二十七日 大ブタペスト中央労働者評議会

カダール政府への弾劾

大ブタペスト中央
労働者評議会報告

十一月三十日

われわれの代表者は、労働革命政府の議長であるヤノス・カダールと交渉した。交渉はわれわれがさきの月曜日に申立てた覚書の二節に集中した。これらの二節とは別に、われわれは国の繁栄についてのいくつかの問題を討議し、事態の可能な解決に関する意見を交換した。

一、労働者評議会に法令の力で発せられた法令の改正及び附加。
a、われわれの代表団が、交渉委員は地方労働者評議会によって競争を基礎にして選ばれるべきであるという事を要求した時、ヤノス・カダール首相は交渉委員任命に関するわれわれの提案を、十一月二十七日の閣議にゆだねた。

閣議は、大ブタペスト中央労働者評議会の協力で法令原案の準備をするためにイストバン・コッサとサンドール・ガスパールを任命した。ヤノス・カダールは管理がしばしば変化しないということが経済上の見地から重要なことだと述べた。代表団は、任命されるべき交渉委員は企業の経済的成功を確実にするように専門的な資格がなければならない。即ち、交渉委員の地位は政治上の任命であってはならないと無条件に強調した。

b、われわれが提案したいろいろな公共団体に於て設立されるべき労働者評議会についてはヤノス・カダールは特に鉄道、郵便局及びその他の各省、労働者評議会又は革命委員会に関する彼の意見を表明した。カダールはこれらの政府機関の機能を保証するために政府が仕事をすすめる際にもっているのと同じ権限をもって労働者評議会の設立を認可しなかった。カダールに従えばこれらの機関は国家机关と直接関係している国の公共機関である。

しかしながら彼は、われわれがこれらの公共団体の生産点に於る労働者評議会設立の可能性を集中的に研究すべきであるという提案を無条件的に拒絶しているわけではない。

各省について言えば、彼はそこにおける革命委員会の活動を非難している。今日までこれらの委員会は数人の指導者とその属官を解任することを除いて何もしなかった。革命委員会は、彼らの地位に代ってつくべき適当な人物を見つけないことができなかった。その結果、事態は、ある省においては更に無秩序となった。彼は、仕事の完了を妨げるような方法ではなく各省の行法機関を変換することが絶対に必要であると宣言した。

言した。大ブタペスト中央労働者評議会の代表者及び問題になっている公共団体を代表する専門家達は、鉄道、電車、及び郵便局に関する法案の拡張がまず第一に重要であるということ、及び政府代表とこの問題について討議することを提案するという点で意見が一致した。彼らは各省の信用できない非民主主義的人間を免職にすることに無条件に賛成である。

ヤノス・カダールはある州及び地方自治体の革命評議会はかかる事態の整理のために積極的な結論に到達したと宣言した。

二、大ブタペスト中央労働者評議会の日刊機関紙要求。
ヤノス・カダールは、現在の状態では、だれにもそのような譲歩をすべき時ではないと考えると言った。彼は、もしその様な新聞がでても人民の民主主義という目的に奉仕するであらうという保証はないということによって自分の態度を擁護した。われわれの意見は、労働者評議会は、労働者が一定の真の報告を受けることができるように、機関紙を絶対に必要としているということである。カダールはこの要求を無条件に拒否したわけではない。われわれはこの問題について再び次の会で討議することに意見が一致した。

それまで、われわれは、われわれの活動と交渉の結果に関する印刷した報告を拡めるであらう。
われわれは議論中、労働者評議会の上級の組織の問題をとりあげた。カダールは専門家のわれわれの委員会が今日、全国労働組合会議と交渉している組織の問題に関して、産業委員会と生産者会議についてとりたてて話した。

生産者会議は経済上及び政治上の仕事の管理に於て活発な役割を果すであらうし、労働者の意見を代表するであらう。生産者会議は民主的選挙により選ばれた労働者評議会から設立されるであらう。

われわれは、全国労働組合会議と、こうした問題について次のように意見が一致した。すなわち、下部から民主的選挙によって、生産者会議を、さすき上げ、指導者の有効な交代をすることが——このようにしてのみ全国労働組合会議は平等に交渉団体になれるから——必要であるということ。

労働の再開が、われわれがもはやわれわれの本部をブタペスト電車ビルディングに持続することができないことを意味したので、ヤノス・カダールは、とにかく電車ビルに充分な余裕がないから、国の公共建物にわれわれの整理事務室及び会議室を提供するように提案した。われわれは本部を移転する前にわれわれの新しいアドレスと電話番号を新聞、ラジオを通じて労働者に報じるだろう。

今進行中の労働者評議会常任委員会選挙についてカダールは、地域によって臨時評議会のメンバーである誠実なコミュニニスト(野心家ではなく又ラコシ派でもない)が彼らの主義及び以前に属していた団体の故に評議会常任委員の資格がないと考えられている事実に対し異議をとなえている。これに関して、われわれはそのようなケースは、ほとんどなく、誠実であり能力があるということが常任評議員選挙の決定的要因であると彼にのべた。新しい党の組織に関連して、旧ラコシ派の中からメンバーを募集しようと試みる組織者がいるということののべた。われわれは、立身出世主義や宗教心から、社会主義労働者党のためにではなく彼らの個人的出世のためにのみ働く、精力的扇動政治家を記憶

している。

ヤノス・カダールも彼らは組織を害し統一の強化を邪魔するからこれらの人間を認めないと宣言した。カダールは更に続けて、将来党組織は産業及び公共団体の内部の経済管理を妨げる権利をもたないだろうと宣言した。

われわれは多数党制の問題をあげた。カダールは現在の状態ではいくつもの党の設立を適切とは考えないと述べた。彼の意見では、これは順序として、人民の完全な民主主義強化の後でのみできるというのである。

われわれはできる限り早急に社会主義に味方するあらゆる党を組織することが認められるべきだという意見を表面した。

党員は自発的なのである。だから個人的仕事と考えられるべきである。当分われわれは、経営内の党細胞の設立に反対である。

大ブタベスト中央労働者評議会は交渉の過程で基本的点で討議されたあらゆる問題において一致に到達するためにあらゆる努力をした。われわれの意見では、労働を組織し、労働を再開し、労働者評議会の権限を強化することが最も重要な仕事であるということである。

ブタベスト第十一地区

労働者評議会の宣言

十一地区の勤労者と労働者の代表は満場一致で、ハンガリアの社会主義建設の利益のために、次の諸条件のもとで喜んで労働に復帰するであろうと決定した。

1. われわれは革命的労働者階級が工場と土地を労働人民の所有であると考えていることを力説したい。
2. 労働者の議会はカダール政府を、もし政府がそれ自身の合法性を保証するために人民の意志に従って再組織するならば、それを有効な交渉相手として承認する。
3. 人民は、かれらの意志が実行され続けることを確実にするた

めに、労働者評議会に忠誠を誓っている。われわれは労働者評議会の権限が経済的、文化的、社会的領域において政府によって拡大され、再確認されることを要求する。

4. 秩序を維持し、平和を回復するために、われわれは、生産手段が社会に属するという原則に基いた社会主義的秩序を一貫して承認してきた政党のみが参加を許されるような自由選挙の期日を決定することを要求する。
5. われわれは革命によって任命されたイムレ・ナジ政府の閣僚および自由戦士たちの即時釈放を要求する。
6. われわれは停戦が即時命令されること、同様にブタベストからのソヴィエトロシア軍隊の速やかな撤退を要求する。

ハンガリア当局は労働者の力によって秩序を確保することができ。さらにわれわれは労働者が労働に復帰するやいなや、ハンガリア政府は、ソヴィエト軍隊のハンガリア領土からの漸次的な秩序ある撤退のための交渉を開始すること、この交渉の過程を公衆に知ら

せることを要求する。

7. 警察は工場の誠実な労働者および人民に忠誠な軍隊のなかから組織されなければならない。
 8. 右の諸項目は、ラジオおよび新聞を通じて政府の手で公けに発表されるべきことを要求する。
- 結論、われわれは即時、復興と人民に食糧を供給する活動を開始するであろう。しかしそれ以上の労働はわれわれの要求が承認され実行された後にのみ着手されるであろう。

一九五六年十一月十二日

ブタベスト第十一地区労働者評議会

※(ブタベスト第十一区労働者評議会は、ソ連スターリニストクレムリン官僚のさし向けたハンガリア革命の絞殺者、ソ連重戦車部隊に対して、ハンガリア労働人民の先頭に立って、最も持続的な武装抵抗を闘い、一番最後までその全エネルギーをもってソヴィエトハンガリアのために強力な抵抗闘争を展開した拠点である。ブタベスト第十一区とソヴィエトこそはハンガリア革命の中核部隊であったのだ。このことが何を物語っているかスターリニストや帝国主義者によって宣伝されでちあげられた神話の破産は余りにも明瞭であろう)

武装革命青年団の宣言

われわれは十月二十三日のデモストレーションをやりとげた。われわれは放送局を占領した。コルヴァン、テアテル、ミシユコルツ、ジェール、ドウナペントレ、テペルはわれわれの側にある。全ハンガリア国民は一人の例外もなく、われわれの側に立っている。革命は勝利したのだ!

人民の名において、人民の背後から、労働者農民の政府と自ら名のっている数名の議会のみじめな政治家たちが、いかなる権力に基いて人民に対して戦車をさし向け、われわれ全ハンガリア人を反革命およびファシズムと誹謗しているのか、神のみぞ知っている。かれらはわれわれを裏切り、ソヴィエト政府に売り渡し、治安警察に、ゲレ、ラコシとその恥すべきグループに引き渡そうとしている。

奴等はヒットラーさえも尻込みするような野蛮な残酷さをもってわれわれの市街を破壊した。裏切り者の張本人はヤノス・カダールである! 彼の犯罪はかれの前任者のいかなる者よりも大虐殺、不信、怯懦の罪で数千倍も重い!

死者に代り、ハンガリアとロシア人民の死者に代りわれわれは彼を断罪し、かれおよびかれのボス、ソヴィエト政府の責任ある指導者を断罪する。われわれはハンガリア領土内に一兵たりともとどまっている限り、ストライキを続ける力をもって証明するであろう。

中立、独立、民主の社会主義ハンガリア万歳!

取り引きも容赦も弁明もありえない。われわれは弾劾する。告発はこたえられなければならない。

一九五六年十一月十二日

武装革命青年団

※(ハンガリア革命の動力をなした青年学生から成る部隊の宣言である。なお、「独立中立」の真の内容は、スターリニストがかかっている同じ言葉が意味する階級闘争の休戦ではなく、ソ連スターリニスト官僚の抑圧的支配からの脱却であり、同時に帝国主義の干渉介入の政治的排除を意味している)

中央労働者評議会の結成

— いわゆる「ユペスト会議」の詳細

バラーズ・ナジ

各工場で、労働者はじりじりしながら、ソ連軍の耐え難い存在に對して、反革命的な現政府に對してもっと有効な闘争を展開するようになり、そして革命の目標を擁護するように自分達の評議会に圧力をかけた。ストライキは続行し、工場の代議員たちの責任は重大であった。緊張した雰囲気の様々な会議のなかで、労働者たちは、革命的な基礎にたつた決定をあくまでも成功させようという意志を表明した。彼らは一つの成果を期待していた。それ故カダールとその一派が一步も譲らなかつたので、労働者の力が組織されて一つに誕生することはさげられないことになった。

代表者の集合と集会の構成

十一月十四日、電話の回線はひどく混んでいた。労働者たちが夕方集會を準備しており、工場では電話のベルはなりやまなかつた。

午後になると代表者たちが、ユペスト市庁舎の前に集合しはじめたが、市庁舎はすでにソ連軍に占拠されていたので、エージェェスト

る。労働者たちは彼らの代表者を選出するために工場に集合した。第十四地区のテレフォン工場では、次のように行われた。

▲代表者の選出は、下から上にむかって民主的に進められた。まず、工場のなかでは、労働者自身が、労働者評議会のメンバーの中から、集會に出席する者を選出した。代表者を選出したのは、労働者評議会ではなく、労働者全体だったのである。▽注し

ブタペストの大工場では、集會の席上で労働者たちが代表者を選出し、彼らの立場を代表するよう委任した。とくに「ベロヤニス」工場の例がそれを示している。ほかの方法をとることはできなかった。何故なら、後に述べるように真の代表ということが、評議会が存在する一つの重要な条件だったのである。

代表者たちの正確な数を明らかにすることは難しい。いろいろな筋の語るところではこの集會に出席した代表者の数は、四五百とあることだが（例えばネップサバドザグ紙）、しかし実際の集會は、これらよりずっと少い人数しか含んでいなかった。確かに工場の大集會室の中やその周辺には、多くの労働者、多分四五百人がいたが、これは、同じ時にもう一つ別の集會が開かれていたためである。代表者たちは到着するとこの労働者の群にまじり込んだ。これもまた、多くの労働者が集會がはじまるとこれに参加した理由である。（注し）

われわれはこの集會が自然発生的に組織されたことを称賛しはしない。しかし、この集會が官僚的な組織化、招請者名簿、会議防衛隊などをその重要性にもかかわらず考慮に入れなかつたことを確認したい。人々は混乱があつたと語るだろう。それも一面からいえばその通りである。だが、事實は、とくに中央労働者評議会の誕

・イツソ（合同電球）▽工場の方へゆっくりと向って行った。

だが、誰に對して「革命労働政府」はソ連軍を動員したのかここで考えてみよう。政府がしきりに言いはつたように、労働者階級を左右していた「疑わしい分子」に對してなのだろうか？

これら労働者評議会の発生とその活動とを知りつくじているわれわれは、評議会が労働者の直接民主主義から極めて自然に生まれたものであると言明できる。「疑わしい分子」が労働者階級を左右できるなどとは、馬鹿でもない限り「労働者」のどの代表が断言しえただろうか？

またこのことは、労働者階級が十年間も人民民主主義の教育を受けたにもかかわらず、自分で進んでいくことができなかったことを意味しているのだろうか？ しかし、なぜ、「労働者」政府でなく、これらのいわゆる「疑わしい分子」が労働者に影響を及ぼしたのだろうか？ また、いかにして？

これらの流言はそのまましておこう。われわれはユペスト集會のために実施された代表者選出の方法に關し正当な事實を知っているが、労働者の「集會」で同意をえたという、一つの重要な要素を強調する。代表者とそれを選んだ労働者が、等しく語り合う権利をもつことのできたこの集會。混乱、たしかに混乱があつたかもしれないが、質の高い混乱なのである！

代表者たちの構成は、政府の主張を全くばかばかしいものとしてしまふ。詳細にわたることはやめて、われわれは工場評議会の構成に關して、すでに指摘されている興味深い特徴を二つだけあげておくことにしよう。

その第一は、多くの代表者たちが、青年も年長者もかつての労働運動の闘士だつたことである。彼らは一九一九年の評議会共和国の時期にあるいは社会民主党の中で、労働組合運動の経験をもつていた。彼らの多くが、スターリン時代の間、その社会主義的思想と行動のために投獄されていた。彼らのなかには、共産党が戦後真の労働者の党として出現したとき、その黨員だつた者もいた。年月は過ぎたが、彼らは労働者としてとどまり、党の「大欺瞞」を牢獄や運動の周辺で発見したのだ。たとえば、テレフォン工場の労働者評議会メンバーの九十パーセントが、共産党の黨員だつた。だが、労働者評議会の構成、ことにこの集會での構成を明らかにするための最上の例証は、サンデル・バリである。

「ベロヤニス」工場の労働者であるバリは、長いあいだ社会民主党の黨員だつた。解放後一九四五年に共産党に加入したが、一九四八・五〇年における労働者の大昇進（注し）にもかかわらず、労働者としてとどまつた。まさしく労働者としての経験ゆえに、彼は黨員としては積極的に活動せず、党機構に對して対立するようになつた。これは労働者階級と共産党との關係の、古典的とさえ言える例

であり、コミニストに支配された国で、コミニストと労働者との関係が発展し変質していく一例である。

かつてのサンジカリスト、社会民主主義者、コミニスト、それにその他諸傾向をもった社会主義者などは、評議会において統一性を認めた。そしてまた、これらの評議会とこの十一月十四日の集會は、労働者の真の統一をひき出した。がしかし、中核となる機関も党もなくただ労働者の自発的な活動にそれは依存していたのである。

労働者評議会とこの集會のもう一つの特徴は、青年たちが多数参加したことだった。評議会のメンバーと代表者たちの大半が、二十三、八才の若い労働者だった。一九四五年の旧制度崩壊の時には、これら若者たちはまだ十二、七才だったにすぎず、彼らは人民民主主義の教育を受けてきたのだということを読者は思い返してほしい。

この二点のおかげで代表者の構成は均衡がとれていた。一方では豊富な経験ともう一方では活動力である。代表者を送った工場のリストをみても、十一月十四日に、ブタペスト労働者の最強の部分が統一したことが示されている。

代表者が集會に出席したのは以下の工場であった——
▲チェペル製鉄冶金コンビナート▼、▲チェペル植物油工場▼、▲チェペル自動車工場▼、▲ベロヤニス工場▼、▲テレフォン工場▼、▲市内電車営団▼、▲マバグ工場▼、▲ガンズ電気工場▼、▲ガンズ車輛工場▼、▲アルミニウム工場▼、▲ラング工場▼、▲マジヤール・アセル工場▼、▲ガンド造船所▼、▲アザイ・フェジエスフォノ工場▼、▲第二十区の大製糸工場▼、▲エジエスルト・イツソ工場▼、

いたように、▲労働者たちは明らかに周囲の複雑きわまりない状況をみもしないような方法で自分の力を評価していた▼。すなわち、これらの労働者たちは自分に都合のいい新中央権力を樹立することができると考えていたのだが、知識の不足と未経験のために具体的な任務を打ち出すと困難を生じたのであった。そしてその結果は、戦術の問題や方法を明確に構成するに於いての確実性の欠如としてあらわれた。

緊急な任務の迅速明解な選択における不確実性、それにひきかえ、計画としての、要求としての地位獲得に対する確実性と透視力。参加者の一人であり、後に中央労働者評議会の一メンバーとなるフェレンツ・テューケは、こう書いている。▲……全員が一致して、地区および大企業労働者評議会を組織化する中央労働者評議会の結成を望んでいた。だが彼らはそれを、いかにして、どのような基盤のうえにたって作り上げらいたのかわからなかったのである。▼

目的を設定すること、すなわち中央労働者評議会の計画をたてることは、案外簡単なことだった。特に▲……その中央労働者評議会の設立会議では、すべての人々がそれぞれ別々の工場からきていながら、前もって自分たちの意見を統一しておいたかのようになり、すべて同じ要求をしたのであった▼から。先に引用した知識人の証人もまた指摘している。▲それぞれ別個に生れたものであるのに、プログラムの種々の点において、および目標の設定が、みな完全に一致していた▼。

それでは労働者のこれらの目標とプログラムを見てみよう。このプログラムは、従来の要求とほぼ同一のものであった。第十一地区の評議会の代表者たちの決定と、朝のうちにカダールに対し

▲マジヤール・パムト工場(ユペストの大製糸工場)▼、▲ハンガリア光学公社▼、▲ガンマ工場▼、その他。

したがって大工場はほとんど全部が代表者を送っていた。大きな工場は直接に、小さな工場はいくつかの工場を代表する地区評議会を通じて間接に、首都の八ないし九地区がこれに参加した。

地方の代表者もいくらかきていた。例えば最も活動的だった二つの地方労働者評議会(工業地域のボルソド郡と工業都市ジョール)の代表者が出席していた。

評議会の構成についてその概略を説明したことで、われわれはこの集會が非常に重要な、革命以後の最も重要なできごとであったことを断言することができる。この理由から、知識人もまた、種々の知識人組織の代表として、あるいは個人の資格で、これに参加して、再び労働者と知識人との革命的な協力を強化したが、中央労働者評議会の準備の際にもこれはすでに大きな貢献を果たしていた。(注4)

一致した要求

代表者たちは集まった。場なれして上手な▲エジエスルト・イツソ▼労働者評議会のメンバーが議長席につき、そのうちの一人が開會を宣言した。

この集會が、▲歴史的必然▼であることについての一般的な確認のための開會演説によって多くのことが明確にされた。まず第一に集った労働者は、労働者評議会の連合統一のなかで、だが具体的な任務、方法、戦術についてはまだ漠然とした知識しかもっていないということであった。参加証人のある一人の知識人が後になって書

て提出された諸要求は、労働者のすべての意志の一致を確認するものであった。というのも、労働者がこの集會でそれらをつたたび聞いたことになるからである。

しかし今度の集會には非常に重要な意義がふくまれていた。代表者たちは次々に発言しながら、▲工場を、資本家的所有にではなくて、真の集団的所有に帰する▼要求を強く主張した。

このことはなんら驚くべきことではない。なぜなら彼らは、労働者評議会が工場をその手に握らないかぎり、いかなる権力も権限も現実には代表することはできないということを知っていたからである。この集団的所有は、労働者評議会の基盤であった。当時の状況のもとでは代表者たちは、資本家に対してでなく、カダール政府による経済生活の中央集権的、官僚的再編成化に対してこそ、それを要求した。これは十一月十三日の政府命令に対する明確な解答であった。

代表者たちのもう一つの重要な主張は、多数政党制の要求と関連していたが、労働者たちは社会主義的原理を認め、その上にたった政党だけを欲していたのである。

この二点は、代表者たちの討論の中にしばしばくり返されて出されてきたものだが、それぞれ密接に関連している。労働者たちは、工場所有を保持する評議会制度を主張していた。彼らはこの所有を評議会から引き離そうとするような、あるいはそれを欲するような政党を決して認めようとはしなかった。

だからもしも、労働者たちが多数政党制を要求したということを示明らかにする者があったとしても、それは革命以来たえず確認され、しかも正しいのであるが、この労働者たちは社会主義的政党を

こそ欲していたということを決して忘却してはならない。

したがって、この集会は数党の政党がその中で活動できるような制度を擁護する立場をはっきりとった。われわれは後で、評議会と政党との関係の基本的な問題を分析するだろう。だがここでは労働者が政党を拒否しなかったばかりでなく、自らすすんで要求したということも記憶してはほしい。

演説はさらにいわゆる国民的といわれる一般的な要求にも集中した。代表者たちは、ソ連軍の撤退やイムレ・ナジの復活や民主的権利の保証をかちとろうという労働者の意志を表明した。

この集会で一致をみたプログラムが確立された。このプログラムは、労働者の、社会主義的要求をつよく出し出しているながら、同時にまた国家的秩序にたつた要求も付け加えられていた。それに、労働者は社会主義を民族的条件に規定されるシステムと考え、国家を社会主義社会に基いたものと考えていた。後になって中央労働者評議会が次のように記している。

「……われわれが労働者階級の使命をうけているのだということをもう一度確認しよう。われわれはこの使命に忠実であり、資本主義の復活のすべての試みに対して、われらの工場とわが祖国を、生命をかけて守りぬく用意がある。われわれは同時にまたわれらの独立祖国にハンガリア・タイプ^(注5)の社会的経済的秩序を樹立する意志を表明するものであり、革命の要求はこれを何一つ放棄するものではない。」

政治路線に関する討論と組織の諸問題

しかし、この作成された見事なプログラムを、いかにして実現す

た問題は反応を失ってしまった。

集会の議長をつとめていた▲エジエスルト・イツソ^(注6)の労働者たちの態度は、この演説を▲重大な時点^(注7)におけるむだ話だと非難しているようであった。労働者は勇敢だが、あまりにも理論的な問題と全般的な重要性とに集中しており、この集会は、基本的目標である中央労働者評議会の創設を忘れているかのようであった。

例の知識人は、演説の中で、ユベスタの革命的労働者評議会のメンバーの逮捕に関し、政府に対して抗議するよう提案した。議長団の労働者がそのままにしておく、チェベルの代表者たちが提案に賛成の態度をとり、各代表者も支持しようとした。ちよつとした騒ぎが始まり、代表者たちの間に主導権の移行を引起し、議長団を交替させようと、再び混乱が生じた。明確で具体的な成果に到達しようと考えていた人たちは、この集会が、失敗に終わるのではないかと恐れを抱いた。

その時、バリが語りはじめた。彼はカダールとの交渉について述べ、結論を要約し、ペロヤニスの労働者はすでにこの交渉の経過について知っており彼の提案を承認したと代表者たちに話した。

労働者の出発点は——バリは語りつづけた——カダール政府承認を基盤としなければならないだろう。だが労働者は、何らかの組織を結成し、政府にその機関を承認させねばならない。ただこの機関だけがカダールから必要な譲歩をかちとることができるのだ。ゼネストに支援されながら、労働者の要求を集約し、政府につきつけるような、中央労働者評議会をわれわれは組織しなければならぬのである。要求が受け入れられるまでストライキは続行すべきである。

るかということが、問題として残されたのである。代表者はいずれもカダール政府の不承認を強調し、ナジ政府こそ合法と認めはしたが、誰もそれに適応する政治方針について提案するものはなかった。

この時、ユベスタの革命労働者評議会の集会にすでに参加したところのある一人の知識人が発言を求めた。かれは知識人のとるべき態度について詳述しようとしたが、それはユベスタの集会で述べた内容と同じであった。彼のいう態度とは、ビボ計画に基本的に基いていたが、その計画は、労働者の力をぬきにしては実現不可能であるという考えで補足されていた。

だが、この知識人の演説は、ざわざわした騒音の中で聞えなくなってしまった。議長をしていた▲エジエスルト・イツソ^(注6)の労働者が、この知識人の発言資格に疑問が言った。▲エジエスルト・イツソ^(注6)の工場はライバルであるユベスタ労働者評議会の影響が、彼に感ぜられたからである。

大企業評議会と地区評議会との間にみられるいくらかのライバル意識をどうして言及して悪いことがあるか？ 先進的な労働者たちの作業場であり、評議会の運動の確固たる本拠地である▲エジエスルト・イツソ^(注6)の工場は、例えばその地区、ユベスタ労働者評議会と張合っていた。だが、別の事情もあった。参加していた労働者たちは、労働者以外の力がこの集会を中をさかすことのないよう、極めて注意深かったのである。彼らは論議し合ひ決議する事項は、ただ労働者の中からだけ提起されることを望んでいた。^(注6)

その知識人が、議長に演説を中断させられて、どこかの工場を代表してきているのではないことを認められると、彼の演説と提出し

次に代表者が発言し、バリの提案に賛意を表明した。カダールの拒絶の故に、彼らの諸要求を貫徹するために労働者階級の力を表明する必要性が生じ、中央労働者評議会成立の必然性が増大していることを、彼らは強く主張したのである。

この集会がその目的いかえれば中央評議会の結成に到達したことが満場一致で確認された。しかしもつと先見的な代表者もいた。一部の人たちは、全国の労働者の意志を伝達するような全国中央評議会を結成するとの構想を明らかにした。この提案はそれ自体自明なことだったので、多くの代表者たちが支持した。ところがある人たちは、大ブタバスタ中央労働者評議会の設立のためにだけしか委任権限は認められていないと反対し、あるいは地方の多くの代表者の欠席のもとでそのような決定を行うことは許されないと反対した。

この反対意見に対して表明された一般的な賛同はナンセンスだと思えるだろう。ことに、全国評議会は、政治的にもつと有効な存在であったし、政府にとってそれは一層危険なものになったであろうからなおのことである。だが、一見して純粹に組織的な問題とみえるこのことは、評議会の極めて重要な一面を表わしているとわれわれは認めたい。すなわち、全国労働者評議会の問題が、労働者によって単なる政治的な効力の視点からだけでなく、とくに民主主義の精神でもって考察されていたことである。

ハンガリアの労働者とその代表者たちは、労働者評議会の最大の価値を、その民主主義のうちに見出した。つまり、労働者階級全体に代表者を密着させるといふ関係に見出していた。そしてこの関係のもとでは、代表者は労働者の意志の代理的遂行者でしかなかっ

た。評議会のこの運動のなかで、労働者はしばしば委任の権限をひろげて代表者を送ったことに、注目したい。だが労働者たちは、代表者があまり独立してしまふのを好まなかった。だから代表者たちが、些細な問題にいたるまでこの民主主義が主張されるように、細心な注意をはらったのもうなずけることである。ハンガリア革命の一般的な雰囲気は、できるかぎりにおいて民主主義を保障する姿勢を強固なものとしていった。ところでこの革命は、民主主義のわずかな徴候をも抑圧し、人民の意志を完全に無視した冷酷な弾圧政治に対して、爆発したものであった。したがってハンガリア革命は、いわば民主主義のチョンピオンであり、その象徴であった。革命は民主主義を確立しようとした。つまりは、まるでヴェルサイユ宮殿の舞踏会におけるメヌエットの作法のように、この革命の状況のなかで民主主義の意味が、きわめて重要な役割をはたしたのである。

この民主主義のルールを守ろうとする試みは一度ならず、集会の中で示された。代表者たちは、現実の労働者評議会が一時的なものであることを強調し、短時日内に、労働者階級全体の信頼を受けた評議会を選出するために、工場や各地区において総選挙を行うことを幾度かくり返して提案した。

この重要な現象を強調する必要があるのも、ハンガリア革命の西欧の友人のなかに、政治的な民主主義の重要さを忘れている者がおり、ハンガリア（あるいはポーランド）の革命家がこの民主主義に固執しているのを、彼等の眼には誇張されて見えなためか焦立っている者がいるようだからである。だがそれ以上にっと重要な理由がある。このようにして直接民主主義、策略のないそのものの民主

ある。全国労働者評議会を樹立しようというその提案は、労働者自身が自ら権力をもちたてようとする本能的な意志を明らかに示すものであった。だが、力を表現しようとする意欲にもかかわらず、現実の可能性はその実現をゆるさなかった。

集会では、大ブタペスト中央労働者評議会を結成するとの決定がなされた。そしてこの工場の大集会室に集まっている労働者に、このニュースを公表することが決定された。しかし、単なる通知だけでは、とりわけ行動計画を期待している労働者を満足させるには、不十分であろうと参加者は感じたのだ。

そこで、集会は、続いて中央労働者評議会の実際の任務の討議にうつった。参加者は代表者も代表としてきているものではないものも、同時に様々の意見を發表したので、集会は大混乱におちいった。するとこんどは奇妙なことに、労働者は、このような非組織的な集会では諸決議を明確に出すことはできないと言ひ、執行機関の必要性を認めだした。そこで、各地区のメンバー一人ずつで構成され、投票にはかる決議を前もって準備する委員会を設立しようという提案がなされた。

こうして執行機関は誕生したが、これは後に中央評議会となるもので、労働者との関係を失うことも、いわゆる常識的な意味での指導機関となることもなかった。この機関の構成を検討するまえに、ハンガリアの労働者評議会に特有な現象として、中央労働者評議会の結成にいたる歩みは、諸状況の力に拘束されて、ひたすらに漸進的なものだったということを確認しておきたい。ハンガリアの労働者は、予め思想や理論を精密化していたのではなく、何をなすべきかを前進しながら学んでゆかねばならなかったのだ。このことは、

主義を回復しようとするこの傾向は、この設立会議において後の中央労働者評議会の活動を多かれ少なかれ特徴づける、ある矛盾をすでに引き起していた。それは、現実的な政治的効力としての要求と、労働者評議会という新しい社会的政治的制度に付与された性格との間の矛盾である。ところで、政治的計画の効力を強化するためには、その戦術や方法において、労働者民主主義を基礎として新しい社会を作るために要請されているものとは、明確に異ったものを選ばなければならないのである。

例えば具体的に、全国労働者評議会においては、この機関が設立されていたならば、労働者ははるかに大きく効力のある政治的効力を獲得できたであろう。事実確かに政府ははるかに困難な事態に追い込まれてしまったであろう。また別の面から言えば、全国労働者評議会ができていたなら、多分地方の労働者もさらに容易に動員できたであろうし、さらにうまく組織化できたであろう。

だがこれはあくまでも仮定にすぎないし、そしてまた仮定は現実以上によく見えるものである。それにこの驚くほどの労働者の民主主義への固執は、後日明らかになったように、いわば報いられるものであった。というのも、このことは大ブタペストの労働者評議会によって採択された政治方針をある時点において批判した地方の活動的な一部の労働者評議会（例えば北部の鉱山労働者評議会）が、中央労働者評議会に同意するのを容易にしたからである（注7）。だから政治的効力が必ずしも最も有効なことであると限らなかつたわけである。

自らの力を表現する手段をようやく見出した労働者たちが、提案された一つの形態をさらに強固に押し進めたことは興味深い確認で

どんなに単純な組織的な問題についても言えるのである。このようにして彼らの経験は、微小な問題にいたるまで、真に労働者的であり、ハンガリア労働者階級の真実の意識を反映していた。

残念ながら、この決議を準備するために話し合った二十ないし二十二名の完全な名簿を再びつくることは不可能であり、今後も決してできないだろうと思う。しかしながら、次にアルファベット順にあげる何人かだけは、はっきりそれとわかっている。

ヨゼフ・ババイ市内電車営団の代表、書記になり、中央評議会の行政部門の責任者。

アルパド・バラーズII巻揚げ機工場の労働者でユペスト地区代表
ヨゼフ・バラーズIIマジョール・アセルV工場の旋盤工で、第十三地区の代表。元製錬工組合の闘士で、一九四五年以後共産黨員。中央労働者評議会の提唱者の一人で、そのスポークスマンになる。メンバーのうち最年長者。

サンドール・バラーズII金工具製作工、元製錬工組合の闘士。ジェズルト・イツソV工場の代表。

サンドール・バリII金工具製作工、第十一地区およびペロヤニス工場の代表者。およそ三十八才。彼については前述した。

デベニII労働者でチェル製鉄冶金コンビナートVの代表。（後に彼は、政府スパイの疑惑で評議会から除名される）

ジョルジ・カロチエイII化学技師で約三十二才。チェル植物油工場とチェル地区の代表。評議会の副議長となる。

カルサイII金工具技師、ラジエーターV工場の労働者で二十六才。第十地区の代表者。

ミクロス・セベスチエンII技師で二十六才、ハンガリア光学公

社Vの代表。ずっと後に新聞部門を担当。

フェレンツ・テューケII金工具製作工、第十四地区とAテレフォンV工場の代表者。工科大学の学生労働者、二十六才。ずっと後に中央評議会の組織部門を担当。

この名簿では、不完全ではあるがそれでもこれによって中央労働者評議会の構成を検討することができる。なぜならずっと後までほぼ同じ均衡が保たれたからである。

まず中央労働者評議会の構成は、各工場の評議会の構成と全く同じように、青年と年長者の非常に均衡のとれた連合体としてできあがっていることに注目したい。青年の数が相当多かったことは、革命の躍動的戦闘的な性格を反映していた。しかしこれら若者たちの大量参加は、後にはこれがさらに増加するのだが、政治的プランに関して一つの興味ある事実を明示している。

青年たちは人民民主主義の中で教育を受けた。だから彼らは、同志や先輩が資本主義制度のなかで持ったのとは全く異った経験を受けていたのである。彼らはコミュニズム的政策、国有財産、計画化などについても知っていた。極端にいえば、彼らはこの制度しか知らなかった。彼らは人民民主主義の中における労働者の生活を完全に知らない人々にとってはほとんど理解しにくいような若者だった。なぜか？ これらの若者たちは、社会主義の原理や理念を組織的に学ぶことができて、当時までに知られていた社会主義の現実的の制度に抵抗しながらも、その理念は認めていたのである。矛盾といえるかもしれない。だが労働者が自らの社会主義を樹立しようとして、天下りの社会主義を強固にはねつけようとしている状況には、何か非常にたのもしいものがあるのではないだろうか？ 社会主義が、

ては何もつけ加えることはない。年長者のサンドール・バリ、ジョゼフ・バラース、サンドール・バラースについていえば、彼らは一九四五年以前の長い間、A製錬工組合Vにおいて、労働運動に参加していた。この組合は、ホルティ政権のもとで、及びそれ以前からしてさえも戦闘的で、その革命的闘争はこの組合に栄誉と労働者前衛の不動の役割とを与えていた。多くの革命的な経験をつんだ労働者がこの環境から巣立っていった。

次に労働者の専門の職務からこの構成を見てみよう。これら十人のメンバーのうちには、七人、後にサンドール・ラスが加わったので八人の製錬工がいた。四人の技術者に対し三人の若いA労働者Vである。これら製錬工のうち数人が金工具製作工だったことは興味深い。サンドール・バリ、サンドール・バラース、フェレンツ・テューケ、そして後になってラス。金工具製作工の労働は高度の知識を要求されるものと知られており、また彼らは独立に労働をする。

一般的に彼らは、モデルをつくるのであるから、その労働は連続的生産とは相容れないのである。彼らは製錬工の貴族といわれる。たとえばハンガリアでは、この階層の労働者は、数十年來、労働運動に対して多くのすぐれた闘士を提供していた。

これら活動的な青年技術労働者、資本主義制度のもとで労働運動の経験を豊かにつんでいる年長労働者が、結合して、ブタペストの労働者階級の意志を表明し、諸決議を明確にうち出したのであった。

大ブタペスト中央労働者評議会の誕生と、最初の決議

残念ながら、これらの労働者たちは、文書を作成しなかった。彼

機構の存在ではなくて、労働者自身のものであるためには、社会主義を労働者の手に移行することが必要なのではあるまいか？

もっと正確にいえば、中央評議会のこれらの労働者は、非常に多くのことを学んだのである。人民民主主義の時代に幾らかの変形と変形とが受け入れられるようになり、社会主義的成果を正当に主張できるということをも十分に認めていた。また他方、避けなければならない畏は、その大半の場合が、A社会主義的経験Vのない人の目に、もっとも魅力的なこととしてうつつる畏であることを彼らはよく知っていた。

労働者が保持しようとした成果に関して述べるのは、そのうちの最も重要な教育の大きな可能性についてにしよう。これは学校や大学で、容易に集団的な学習をすることのできる、労働者にとって真の成果であったし現在もそうである。

例えば、前述の名簿に、三人の青年（カルサイ、ゼバスチエン、テューケ）がいるが、いずれもが人民民主主義の中で技術者になっているということは注目すべきことである。テューケはやや例外で、彼は一九五六年にやっと大学の卒業証書を手にした。テューケはこの現象を次のように語っている。

A労働者の間にまじっているんなことを学んだ。過去十年來（人民民主主義になって）おれわれは、党のパンフレットを避けながら学ぶより他に仕方がなかった。労働者がかつての労働者である技術者に対しては、管理者に対するよりもずっと好意的であった。何故なら技術者は、工場の中で労働者と共にいたし、親しく労働者の中にとけこんでいたからだV(注8)

政治的経験にしたがってこの構成をみてみよう。青年たちに関し

らは政府当局の手に渡りそうなおそれのあるものは作らなかった。この態度はともよく理解できるのだが、そのためにこれら二十ないし二十二名の人たちの間で展開された討論を物語ることができなのである。討論は、このことははっきり分っているが、非常に活発で相当長時間にわたった。そしてついに、明確な決議が発表された。彼らはバリの提案の立場に立って、大ブタペスト中央労働者評議会を組織することを決定したが、全国評議会を樹立する権利は持っていないことを宣言した。それとくに、代表者が後に説明したように、ブタペストの工場の一部しか代表していなかったからである。こういうわけで、労働者の同意団結を促進し、中央労働者評議会を組織的に強固にすることがその最初の活動となった。

中央労働者評議会は、次の提案を了承した。すなわちA各労働者評議会はブタペストの各地区に大工場の指導のもとに組織され、かつその代表を大ブタペスト中央労働者評議会に送らなければならないV(注9)

したがって、中央評議会は、まず強固に組織され、労働者階級の間に深く根をおろそうとしていた。この強化は政府に対してさらに大胆に闘うためには中央評議会にぜひとも必要なことだった。代表制の保証は、最初の任務だった。なぜなら、ただ労働者との確固とした関係のみが、有効な力を評議会に与えたからである。だから、評議会が最初に専念したのは、組織的体制であって、プログラムの諸点ではなかった。現実的な闘争および運動が、プログラムの諸考察に先立って重きをなしていたのである。

しかしそれと同時に、中央評議会は、評議会結成を通告し、その要求をつきつけるために、政府とただちに接触をもつことを決定し

た。このために代表者委員会は、評議会の創設、およびその要求を含めた決議を認めた。それは以下の通りである——

▲今日、一九五六年十一月十四日、各地区の労働者評議会代表者は、大ブタペスト中央労働者評議会を結成した。中央労働者評議会は、ブタペストの全企業労働者の名において交渉する権限を与えられ、労働の停止と再開とを決定する権限を与えられた。われわれは生産手段を集団所有にすべきだと考へる。

1、われわれは集団的所有を常に守る用意がある。われわれ労働者は、平穏と秩序の再建には、人民の信頼を受けた人物に指導をゆだねることが必要だと考へる。したがってわれわれは、同志イムレ・ナジが政府の指導を再びとるよう提案する。

2、われわれは、新しい公安機関のうちに、元国家秘密警察機関 (AVH) のメンバーが残っている事実に対して抗議する。われわれは、この新しい公安機関を構成する人間は、若い革命家、人民に忠誠を守った警察官および兵士、工場労働者のなかから徴集されるように望む。新しい公安機関は、いかなる場合も党や特定人物の利益を保護し、保証するものであってはならない。

3、われわれは、自由のために闘うものに対して、なかならず、パル・マルテルとその同志に対して絶対的な自由が保証されることを要求する。

4、われわれは、わが国とソ連との間の友情が強化されるべく、すみやかにソ連軍が撤退することを要求する。

5、われわれは現在拘留されているすべての人民の釈放を要求する。

6、われわれはもはやラジオ及び新聞が事実と一致しない情報

を報道しないよう要求する。われわれの要求がいれられないかぎり、われわれは国民の日々の生活を保障するに欠くことのできない企業以外の労働再開を認めないであろう。維持されるべき労働は国民経済の緊急な必要に応ずるものに限ってのみ、継続されるであろう。

7、われわれは、一党独裁制の廃止と、社会主義に基づいた多数政の承認のみを要求する。

8、満足な解答を受け取りしだい、労働は再開されるであろう。▽ (附10)

この決議の一般的な性格は、エルノ・キラリーもまたその著作の中で書いているように、主として政治的なものであった。だから中央労働者評議会は、その能力を知って要求の受け入れを求める政治的機関として出現した。

この機関は、その決議を分析すればわかるように、三つの基本的な原則のうえに立っていた。

まず第一に、社会主義であり、労働者であるので、以下の原則を宣言し、擁護する決意を表明した。

- a、生産手段の集団的所有
- b、公安機関および労働者軍隊への労働者の統合
- c、数党の社会主義政の活動

四番目の原則を加えなければならないだろう。それは本文には現われてはいないが、当然現われてくるものである。すなわち、労働者評議会の制度の強化がこれである。

第二に、中央労働者評議会は、外国の侵略者に対する独立の闘争

のなかで、ハンガリア人民の代行者として出現した。労働者および

社会主義者の要求のなかに、国民的な要求を含みながら、評議会は民族的闘争に参加し、国民の最も適確な代表者となった。懸念することはない。中央労働者評議会によって代表されたこの国民とは、ブルジョワ的混乱体ではなく、一つの社会、共通の国語と伝統を持ち、社会主義の建設をめざしている人々およびグループの全体であった。

他方、評議会は、ソ連の干渉に抗議しながらも決して単純な反ソ主義のなかでなかった。なぜなら、評議会がソ連軍の撤退を求めたのは、▲我が国とソ連との間の友情が強化されるべく▽であったからである。

第三に、評議会は労働者と人民を代表しており、カダール政府を認めなかったけれども、その権限を必要以上に行使することはなかった。評議会が、要求したのはただイムレ・ナジの指導する政府にすべてを託すということであった。

このことが誤りであったかどうかの分析は後ほどこころみよう。ここでは、われわれは中央労働者評議会が、ブタペストの労働者を代表することを宣言したこと、そしてこの事実のみにとどまって、評議会がその役割を、たしかに政治的機関ではあるが、国家を代表する権力ではないとして制限したことをここに付け加えるだけにとどめたい。

また評議会のこの決議が、プログラムではなかったことは注目されよう。中央評議会はその成立を報告して、基本的な要求を▲ただ単に▽構成することを欲していた。労働者の代表として、評議会は労働者の要求を要約したが、仲介者としての役割をしか主張しな

った。

しかもこの決議は、権力の立場でよびかけた。もし中央評議会が、権力を要求しなかったとしても、そのかわり、国家をゆりうごかす力をもっていた。この決議が三度くり返してストライキに言及したのも、単なる偶然ではない。ただ評議会のみが、労働の停止と再開とを決めることができるということを明らかにしていた。この宣言によって、中央評議会は、一方では自らを当面の労働者階級の唯一の代表であると考えて労働組合を遠ざけ、他方では、ストライキの意味する政治的効力の重大さを示したことになるのである。さらに国民を安心させるために評議会は、▲国民の日々の生活を保証するに欠くことのできない▽企業の労働再開を宣言した。

だが第八項は政府に対する重大な警告であった。▲満足な解答をうけとりしだい、労働は再開されるであろう▽したがって、この設立会議で、労働者が望んだのは妥協を考へることではなくて、ゼネストによって彼らの要求全体を認めさせることだったと言ふことが出来る。

この決議の起草をすまずと、代表者委員会は、その日の夕方に、カダールに会見するためのグループを選出した。十二〜十五名の代表者が選ばれて、チェルネル地区代表のデベニをリーダーとする代表団が作られた (註11)

彼等は、臨時議長として主催地区ユペストの代表、アルパド・バラズを選んだ。ところが、出席した代表者は、同じくユペストから出ており、エジエスルト・イソツ工場の代表者だったサンドール・バラズには反対した。彼はそのことに不満だったが後には中央評議会の活動に参加した。

決議事項のすべてが、一項目ずつ出席している労働者に承認を求められ、満場一致で了承された。このようにして大ブタペスト中央労働者評議会が生まれ、波乱と様々な経験に富んだ短い戦闘的な生涯を歩むことになったのである。

▲大ブダペスト中央労働者評議会が、各工場の労働者評議会の活動を結びつけ、その諸要求を代表するために、十一月十四日、大企業の発議で結成されたことは、すべての人々に知られている▼

(注12)

(注1) フェレンツ・テエーケの証言記録による。傍点は著者。

(注2) 中央労働者評議会の元メンバーであるミクロス・セベスチエンの記録による。

(注3) 権力を握ると、共産党は国家の経済および文化生活ならびに行政を急速に変革した。この変革と「社会主義の教化」の仕事をために、党は労働者の中から募った新しい指導エリートをつくり出した。ところが、労働者から構成されているにもかかわらずこのエリートは、党の言うままに動く、労働者からは完全に分離した特権階層になりさがってしまった。(ミロバン・ジラス「新しい階級」)

(注4) 集会の構成ならびにその経過は、その証言にしたがって再構成したものである。(中央労働者評議会の資料より)

(注5) 各工場、ブタペスト各地区および各地方の全労働者評議会に対する大ブタペスト中央労働者評議会の訴え(一九五六年十一月二十七日)。

(注6) ミクロス・セベスチエンの記録による。

ドキュメント

2

大ブタペスト

中央労働者評議会の活動

一九五六年十一月十二日、その日当時私が代議員であったハンガリア光学工場労働者評議会は、ブタペスト各地区労働者評議会の代表会議をユベスト市庁舎に招請するというユベスト革命評議会のアップピールを受取った。われわれがそこへ行くと、一人の代表が待っており、十一月四日以降に組織されていた武装兵士団による妨害を避けるために、われわれを会議が開かれることになった電球工場へ連れていった(原注1)。

数部門の労働者評議会の代表が、われわれが着いたとき、すでに集っており、直ちに話し合いを進めることができた。しかし、多数の工場の代表が欠けていることが認められたので、話し合いは翌日に続けることとし、その間にすべての重要部門の労働者評議会に日時と場所を知らせることに決定した。

翌日十三日、われわれは、すべての大工業工場の労働者評議会の参加のもとに、もしも私の記憶が正しければ、十四項目の要求から成る覚書起草し、またその同じ晩、カダール政府にその要求を提出するため代表を選出した(原注2)。

(注7) 例証としてこの事実をあげただけである。中央労働者評議会の構成に関する研究では、その歴史にとり組む必要はない。

(注8) 証言記録中央労働者評議会資料より。

(注9) ミクロス・セベスチエン「ハンガリアの労働者評議会」所収「労働者の管理参加」文化的自由のための会議主催国際セミナー刊(ウィーン公文書資料より)

(注10) エルノ・キラリーより引用。

(注11) この代表団の人数については、いろいろ矛盾した事実がある。フェレンツ・テエーケはその証言で六人だと語っているが、他方ミクロス・セベスチエンは相当多数少くとも十二人はいたと記録している。ネップサバドザ紙十一月十五日号は十九人の代表団と述べている。

(注12) 中央労働者評議会の訴え。

(La Formation du Conseil Central Ouvrier de Budapest en 1956 par Balazs Nagy, supplement a «Correspondances Socialistes»よりその第四章「Reunion Constitutive du Conseil Central Ouvrier」を本誌編集部訳出)

ミクロス・セベスチエン

しかし、カダールとの交渉は何らの成果ももたらさなかった。代表の一人として私は、カダールがわれわれの要求すべてを拒否するまさにそのやり方を目撃した。十人の代表(原注3)の責任者であるチペール工場の労働者は、カダールに新しく結成された中央評議会の諸要求を伝えた。カダールは、革命の集約された最も重要なそれら諸要求の一つ一つ反論した。次のようにである。労働者評議会は、イムレ・ナジがハンガリア首相となること、ソ連軍隊が撤退すること、数党の政党活動が許されること等を要求した。これに対してカダールは、自分もまた喜んでイムレ・ナジと事態を話し合いたいととくに強調したが、相憎なことにナジはユーゴスラビア大使館の建物を離れることを拒否したので、そのため会うことは出来な。い。もしも——カダールは続けていった、労働者評議会がイムレ・ナジに会おうと努力し、ユーゴスラビア大使館を出るように説得すればうまくいくであろう。またカダールは、多数政制の要求には全面的に賛成するが、現時点では適当ではないと考えると強く固執した。現在の状況では、このかなり混乱した条件を整理し、労働者

に労働を再開させるのが、最も重要な任務である。そして、中央労働者評議会の代議員としてストライキを止め、労働に戻って模範を示す代りに、要求を提出したり政治活動に入り込んでいるといつて、彼はわれわれを繰り返して非難した。さらに、労働者に労働再開を説得するのが中央労働者評議会の義務であるといふことを長々と説教した。国家はいまや重大な危機にひんし、国家の富は日一日と破壊され、飢餓と病毒とが国民を脅かしつつある。すべてこれらの状態を変えることが出来るのは、ただ労働者評議会のみである。その任務は労働を再開することであり、それから——とカダールは結んだ——政治的問題を論議しよう。

政府は、われわれの要求と相入れなかったため、代表は空しく引上げた(原注)。しかし、中央労働者評議会の結成は、ソ連軍の援護に依存しながらカダール政府が打出してくる政治的解決方法とは別個の、新しい選択、方法を推進する第一歩を踏み出したことであつた。われわれは、全国にひろがる労働者評議会の組織網と人民の大多数の支持を基盤とする労働者評議会の中央機関の確立に着手した。しかしながら同時に、われわれは自分達の要求の非妥協的性格を修正しなければならぬことを学んだ。それは、十一月四日以降、われわれが革命で勝利をえていた日々を作り上げた諸要求を固執するのはや不可能になっていたのである。政府から少くとも譲歩を待ちとり、それと同時に労働者の信頼を確保していくためには、より柔軟な解決方法を見出さなければならなかった。

中央労働者評議会活動の第一幕

中央労働者評議会の結成後人々がわれわれに多大の信頼を置いて

なかれ以前と同じものであつたが、より柔軟な形式で分類を変えて表わしていた。しかしながら、政府とわれわれとの間の対立は、提出した要求の形式や内容によるのではなくて、基本的問題に対する見解が政府とわれわれとは完全に異なっているという事実にあることがすぐ明瞭になつた。政府がその意を尽す最良の方法は、全面的もしくは少くとも部分的にわれわれの要求を履行することであり、その場合には中央労働者評議会はストライキを中止するであろうとわれわれは主張した。他方、カダール政府は、中央労働者評議会がまず最初に労働者を労働に戻らせるべきであり、われわれの要求の履行はこの状況が安定するまで待たなければ不可能であると主張した。

われわれは、ストライキが唯一の武器であり、それ以外には政府に影響を与える手段をもっていないことを十分に認識していた。ストライキを止めることは、われわれの武器を捨ててに等しかった。中央労働者評議会の内部では、われわれの要求を確実に達成する方法について激烈な討論が行なわれた。一つの派の考えでは、われわれは最初に綿密に作成した要求を強固に保持すべきであり、ストライキを続けて政府に圧力をかけるべきであると主張した。

この見解をとった人々は国内の現実の状況を考慮に入れていなかった。革命的戦闘、ソ連軍による破壊、数週間にわたるゼネストの結果、人々は完全に消耗しきつており、国家自体破壊の淵に立っていた。ストライキの続行は、まず第一に、供給を断たれた人民に打撃を与えたであろう。それに加えて、ソ連軍の援護のもと政府は最も強圧的な手段をも用える状態にいる。政府は中央評議会を解散させ、労働者に銃をつきつけて労働に戻らせることも可能で

いることが即座に明らかになつた。彼等は自分達の問題と困難の解決にわれわれの援助を求めていた。政府は全く無視され、解決すべき問題のある者は皆われわれの所へやってきた。したがって、人々の多かれ少なかれ緊急な問題を処理することが、われわれの日々の一つの重要な任務となつた。ソ連軍ブタペスト司令部と接触をつくるように至つたのも、この日常任務からである。われわれは、ソ連軍に對し、ハンガリア人の国外連行を止め、すでに国外に連行された人々を戻すようにと要求した(原注)。またわれわれは外国から到着する食料、医薬品などの配布を助け、その乱用に終止符を打つた、等々。

しかしながら、われわれは最も重要な任務が政治的性格のものであることを決して忘れてはならなかった。われわれは、人民を窮地に見捨てておくことは出来なかつたけれども、われわれの第一の義務——労働者および革命の政治的要求を可能な限り代表し遂行するということ、それを心にとめておかないのは重大な誤りにならうと思つていた。われわれにとって深刻な苦惱は、政府が全面的あるいは少くとも部分的に受け入れるようにはどんな要求を提案すべきかであつた。しかも、国内のすべての人々とすべての労働者が、ソヴィエト軍隊の即時もしくは早期の撤退、政治結社の自由に基づいた自由選挙、イムレ・ナジの首相への復帰を要求しており、これら諸要求と当面の政治的可能性とを調整しながら要求を綿密に組立てていくことは極めて困難なことであつた。

十一月二十二日までに、われわれはカダール政府との話し合いをもう二、三回行つた。私はとくに十一月十八日の会談を自分がその責任者であつたためによく覚えてゐる。われわれの要求は多かれ少

あつた。そして、人々の耐えている困難を中央評議会に責任転化して状況を利用することもできたのである。

中央労働者評議会の大多数によって支持されていた第二の傾向の考えは、政府と妥協することであつた。われわれは労働に戻らる。しかし、それはもしわれわれの要求が受け入れられないならば、われわれは再びゼネストを呼びかけるという条件でのみ戻ることである。(原注)

しかし、また第三の考えもあつた。つまりわれわれは、要求が履行されるどうかにかかわらず、即時労働を再開すべきであり、そして政府がいかに反応するか見守り待とうというのである。この見解をとる代表は、交渉の結果によらず、それにはかかわりなく、労働の再開を求めていた。ジョゼフ・バラズを代表とする中央労働者評議会のごく少数がこの考えを表明した。多数のものは、この見解は政府に無条件の信頼をおくことになるからと非難した。労働者評議会の見解の支持を思い止まるようなことを自ら認める者は、中央労働者評議会が労働者を代表しているのには適わしくないし、日和見主義者であり追放すべきであるとわれわれは決定した。そうして、われわれは、もし私の記憶が正しければ十一月十九日に、ジョゼフ・バラズを中央労働者評議会から除名した。

当初からわれわれは、労働者評議会の組織を強化し、その中央機関を確立することによってのみ、その成果を挙げることが可能であると確信していた。したがって、第一回会議以降、われわれは、労働者評議会の活動を統合していくこと、その統合機関であり急いで結成されいまだ暫定的な中央労働者評議会を労働者によって承認された永続的な形態にしていくことを決意していた。

労働者評議会の組織に関する限り、われわれの第一の目的は、ブタペストの各地区に労働者評議会を設立し、これらの評議会から選出された代表で大ブタペスト中央労働者評議会を結成することにある。われわれは、各地区の労働者評議会は三人から五人の代議員を中央労働者評議会に送ること、しかし各地区は、チェベルが二票をもつことを除いてはただ一票のみを有することに同意していた（原注）。工業労働者は自らの代表を送りはしないが、それは地区評議会で代表されることになっていた。

われわれはまた、中央労働者評議会自体の組織についても検討した。十一月十五日から二十一日までの間は、われわれはリーダーを決めていなかった。各会議ではそれぞれ各評議会の代議員が變つて議長席の席についた。われわれは、現実の状況に對処する書記局を設け、ソヴィエト軍司令部との接触を維持する任務をもつ一委員会を設立することにした。

中央労働者評議会の活動を組織し、ブタペストに地区評議会の創設がすむと、われわれは、全国労働者評議会、即ち、各地の工業都市、地方の代表による労働者評議会の議会とその組織化を計画した。そして、われわれは、十一月二十一日にブタペストで、全国労働者評議会大会を召集することに決定した。

中央労働者評議会活動の第二幕

十一月二十日から二十一日を、中央労働者評議会の第一幕の終りとみなしてよい。労働者評議会は形成された。中央労働者評議会も結成され組織された。そしてその政治的方针も明確に決定され、権力機関として容認されていた。十一月二十一日に召集された全国大

会は、いわばこの第一幕の最後を飾ると同時に、中央評議会の歴史に新しい一幕を開いたのである。

全国大会の最も重要な任務は、労働者によって執行される全国的な権力を作り上げ、カダール政府に對する對抗勢力を形成することであった。中央労働者評議会は初期の段階でもこの分野で極めて積極的に活動したものの、いかに強大とはいえないその権力と影響力とは全国的統一権力にとって代ることはできなかったであり、われわれはそれを作り出そうと努めていた。われわれがこの大会で達成しようとして望んでいたのは、ブタペストの労働者だけでなく全国の労働者はもちろん、全ハンガリアの人民が組織的形態によるその活動と政治的熱望によって中央労働者評議会と計画中の全国労働者評議会を支持してくれることにある。われわれの目的は、いまだに労働者評議会の組織されていないすべての町でそれを組織し、農村地域での農民評議会の活動とこれらの活動を統合していくことである。

ハンガリア国有鉄道の電信網とハンガリア郵政局の電話網の援助をかりて、われわれは全国大会の計画を地方の労働者に通知した。私の覚えていた限りでは、最初に到見た代表は、ジョール、コンロ、ヴェスプレン、タタバンヤ、ペチ、オズト、サルゴタリヤンからで、また農民代表も多数いた。

われわれは、初め選んだ秘密会場に政府がソヴィエト軍を送向けていたので、中央労働者評議会の狭苦しい場所で大衆を開くことを余儀なくされてしまった。この挑発に對して、われわれは労働者——十一月十九日に再開されていたが——止め、四十八時間ゼネストの宣言で答えることに決定した。

この会談の前に、彼の協力者の一人は、われわれのうちのある者、サンデル・ラスと私にも政府に加わるように要請したのである。しかしながら、われわれにはこの申出を拒否する以外道はなかった。

この会談は、彼がわれわれを味方に引き入れようとしているとの印象を受けた。私ははっきりと彼の言葉を覚えていた。諸君、私を助けてほしい。分かってくれ、スターリニストに囲まれて私は孤立しているのだ……助けてくれ！

彼は、生産者評議会として中央労働者評議会の合法的活動を認める決定を政府が下す用意があると語った。そこで、私はこの会談で、ここに出席しているカダールとその協力者たちはスターリニスト路線の正統な代表ではないこと、政府の内部で小教派を形成していることを確認した。われわれは中央労働者評議会に戻って、この興味深い会談を詳細に検討した。

われわれはすべて、カダールはロシア人の助けを借りて紛うかたなき反革命的な徴候を打破するため、そして十月三十日に到達した地点から革命的な政治路線を進むため、十一月四日の直前にソヴィエトの介入を受け入れたのだと確信した。カダールは、もしも介入政策で指導権を握っているならば、彼が適当と認めた地点で介入を止めることが出来ると思像していたのである。しかし、またわれわれはすべて、そのような幻想を抱くということ、革命と革命的な人民に對するそのような完全な無理解をするには、とてつもない単純さが必要であるということに一致をみた。何故なら、思慮分別ある人間なら、革命の目的がソ連の銃剣の助けによって達成できるなど

やと今十二月の初めになって、特にイムレ・ナジ誘拐の衝激の下で、自分の全くの無力感と、ソ連の介入とその意味する重大さのすべてを目前にして、彼の理由づけの偽善的性情とをカダールが認識しはじめていたということがわれわれを驚かせた。それが、今彼があらゆる政治家たちを試したり、われわれを味方に入れようなどしている理由なのである。

翌日、非常に特徴的なエピソードをわれわれは知った。十二月一日の会談では、カダール政府は一定の譲歩を行い、それを自分自身はラジオで放送すると約束した。カダールが、放送のために議事室内の放送局に行くと、ムニツヒが現われて、彼の手から怒って書類を引きちぎり、放送すべきではないと言明したという。

十一月後半、とくに十一月二十一日に開く全国大会を準備している期間は、組織を強化し、中央労働者評議会の活動を確立し、その権威を人々によって容認された唯一の政治権力であると感じさせる時期であった。

十一月二十五日もしくは二十六日頃であったか、われわれは、われわれの決議と活動について全国に、とくに各工場に知らせなければならぬとの結論に達した。われわれは新聞を発行することに決定した。しかし、すべての印刷所はソ連軍の手中にあったので、謄写刷り機関紙しか出せず、地方にはその内容を電話で連絡した。だが、中央労働者評議会が活版新聞をもつべきだという考えは捨てなかつた。カダールとの話し合いの中で——すでに十一月二十日以前に——われわれは再三再四そのような新聞の発行を認めるように要求してきたが、彼は拒否した。紙が不足している折から、党や労働組合機関紙（ネプサバドサグとネパカラト）と並んで別の新聞を発

われわれの要求と政治的熱望に関する限りわれわれはすべて完全に一致していた(原注)。そこで、これらの問題に対しては何ら重要な論議は行なわれなかつたので、われわれは、全国労働者評議会を作り上げていく上での、より実質的な問題に深く入っていった。

大会はその任務を成功のうちに達成した。地方の代議員たちはわれわれの行動を支持することに一致をみた。そして、われわれは全国労働者評議会を結成こそしなかつたものの、一方では常任代議員を通じて、他方では電信電話連絡を通じて、国内全地域との関係を設立した。われわれの四十八時間ゼネスト宣言は、ブタペストのすべての労働者によって守られた。

十一月二十二日の晩、われわれは、政府の行動に抗議するため、ストライキを宣言し、われわれの要求を履行するよう説得しようとかダールに会いに行った。

、カダールは七時三十分に来るようと言ったのだが、われわれが着いたときにはそこにおらず、われわれは午前二時まで待たなければならなかつた。初めわれわれは、これまた挑発を意味するものと考えたが、後で、彼はイムレ・ナジとその仲間が誘拐されたことを知ったばかりで、極めて不安な教時間を過していたのであるという結論に至った。

翌日、中央労働者評議会の討論は荒れ狂った。イムレ・ナジと彼の友人を極悪にも誘拐した事件は代議員を激しく怒らせた。われわれは全ての非難をカダールとその政府に浴びた。事件が全く終るまで、カダールが何も知らなかつたので、というようなことは、われわれには思いつきもしなかつた。

革命的な首相とその協力者の誘拐は、状況を悪化させ、政府と取

行することは誤りであると思うという。これは明らかに言い訳にすぎない。もし中央労働者評議会が新聞を発行すれば、誰も党や労働組合機関紙を読まなくなり、中央労働者評議会は権力を増強できるであろうとは衆知のことだつたからである。

十一月二十三日を過ぎてから、もし政府が新聞の発行を許可しないのなら、許可なしで発行することにわれわれは決定した。中央労働者評議会は私にこの仕事を委託した。印刷組合の委員長は、**「フオラス」**印刷所の労働者評議会と連絡をとれば、多分新聞の印刷をするのに同意するであろうと指示してくれた。新聞の編集を頼んだ二、三人の記者と一緒に私は、すぐに印刷所へ行き、そこで労働者評議会を召集した。労働者評議会は、中央労働者評議会の依頼を討論し、**「労働者の新聞」**と題された新聞を発行することに賛成した。

記事はそろい、新聞はほとんど出来かけたときに、政府がわれわれの計画を探り出し、それを挑発行為と見なしているとのニュースが入った。新聞の記者や編集者の間に激烈な討論が起つた。編集者と私は、何をあつても発行することを求めたが、記者の数人は、もし発行すれば政府とのいかなる妥協も不可能になると反論した。このようにわれわれが討論している間に、中央労働者評議会の代表が到着して伝えた。評議会では再び討論した結果**「挑発」**と烙印をおされるいかなる事態をも避けるとの決定に達した、したがって**「労働者の新聞」**を発行しないことに決定したという。

この行為によって政府の許容範囲をひとたびこえてしまったわれわれは、自らをさらに狭い円い枠のなかに閉じこめなければならなくなつたように思われた。

引するいかなる試みも不可能にしてしまった。その時点では、われわれは、すべてにわたつてカダールを非難したが、カダールと政府の他のメンバーとは違つたことに気づいていなくなつたわけではないのである。われわれがカダールと交渉した場合には、マロサンとビズクもまたその話し合いに加つており、彼等のわれわれに対する態度はカダールとは較べものにならぬほどごう慢なものであつた。一度など、マロサンはこう云つた。もし労働者が望むならストライキを続けるがよい。しかし、もし政府がその支持者を集めても、まだ労働者があえてデモンストレーションを続けるなら**「……われわれはお前らに発砲するだろう！」**革命労働政府の閣僚が労働者のデモについて語ることができたのはこのようになるのである。ただカダールに対しては、基本的には彼も他の者と同じことをしたわけなのではあるが、われわれは異つた印象をもつていた。例えば、イムレ・ナジの誘拐については事件の起るまで彼は何も知らなかつたのでわれわれは考えるようになった。事前に知らされていなかつたので、それは極めて彼にとつて苦痛であつたのだとわれわれは感じていた。われわれは彼と行つた極めて興味深い会談で、この考えを確認した。それは十二月一日で、カダールは中央労働者評議会のメンバーを五時のお茶に招いた。われわれの代表は六人で、カダールは腹心の協力者だけと共にいた。

交渉は二時間ないし三時間続いた。カダールは何らかの妥協に達する第一歩となりうるような一定の譲歩をしようと約束した。カダールは、ある政治家例えばベラ・コバチやパロ神父を加えることによつて政府の幅を広げようとしたが、全員に協力を拒まれたといつた。

しかし、なおその間にも、われわれはソ連軍司令部とかなり友好的な関係を樹立するのに成功していた。接触は十一月十五日、中央労働者評議会結成直後に確立されていたが、それは、証明書をもつたり、国外連行者を呼び戻してもらふことに限られていた。けれども、ソ連軍司令部が、中央労働者評議会の全員に、夜間外出禁止令にもかかわらずいつでも街路を歩けるような通行証を与えだしたのは異例のことであつた。その上、中央労働者評議会の全員に武器を携帯する許可証も与えた。

工場および地区労働者評議会だけでなく、大ブダペスト中央労働者評議会つまり真のソヴィエトもが結成されたことを知ると、ソヴィエト軍司令部は通訳をつけて一人の大佐をわれわれのところへよこした。彼は、もし私の記憶が正しければ十一月二十日からしばしば一日中われわれの会議に同席した。このようにして、ロシア人は何が行なわれているかについて直接の情報をえており、イムレ・ナジの誘拐事件まで、中央労働者評議会の活動をほとんど共感をもつて眺めていた。しかし、われわれは会議に出席している大佐の反応から判断して、彼等ロシア人は中央労働者評議会とは現実は何であるかを明確には理解してないかと推測した。それは第二の政府なのか、国内すべての人々によつて支持された人民の権力なのか、彼等の革命的ソヴィエトに似た機関なのか、それとも他のものか？ また、中央労働者評議会は、カダール政府に対する対立政府、つまり国内的政治的対抗組織なのか、あるいはカダールとの協力機関なのかも彼等は分らなかつた。われわれの会議にはカダール政府の代表もまた出席していたこと、およびわれわれがカダール本人としばしば会談していることが、この問題を彼等と討論することを一層困難

にしていた。ロシア人に、われわれの現実の状況が何であるか理解させることは出来なかった。その後しかし、十二月の初め六日もしくは七日に、突然われわれの關係は切れてしまった。中央労働者評議会の代議員がソヴェト軍司令部に招かれ、そこでセーロフ大將から勝負はついたと言明され、われわれの要求を引き下げるようにと命令される羽目に会ったのである。事実また十二月九日に中央労働者評議会は解散させられてしまった。

しかしながら、ここで、われわれは、中央労働者評議会の活動、とくに組織的關係と活動に関して若干詳細に付け加えておかなければならない。

中央労働者評議会は、ハンガリア作家協会、諸々の知識人、学生その他の革命機関とたえず協力して活動した。しかし、労働組合とは、カダールと共にした会談の度毎に提案されたにもかかわらず、協力しようとはしなかった。彼等政府が本望に望んだことは、共産党に指導される労働組合の支配下にわれわれをおくことにほかならなかった。例えば、われわれが自らの新聞を発行する許可を求めたときに、彼等は答えた。労働組合の公認機関紙に、望みだけのスペースを、毎日全一頁でも中央労働者評議会は使うことができる。われわれは拒否した。何故なら、とくに当時各種の労働組合の労働者、例えば織物労働者、印刷工、その他多くが共産党指導の下の労働組合評議会を脱退し、自分達自身の新しい労働組合委員会と幹部、つまり自由で独立した労働組合指導者を選出しようとしていたからである。労働組合評議会は組合員のいない形骸となりつつあったので、われわれはそこに加入する意図は毛頭なかった。

われわれが中央労働者評議会の組織を強化しだしたのは、十一月c、教党の社会主義政党的参加のもとで投票の秘密を保つ自由選挙。

これら政党的のうち一党は農民の利益を代表する農民党とする。3、農民が農民によって選出され、労働者評議会の場合と同様の管理権を与えられた地域、地区、郡の革命的農民評議会を設立することを許すように、われわれは権力ある政府に対して要求し、要請する。

もしもう一カ月あったなら、国中の労働者および農民評議会によって支持された全国労働者評議会を結成することまでできたであろう。しかし実際にはわれわれは十二月九日の全国大会を秘密に準備することができただけであり、そしてその同じ日中央労働者評議会は解散させられ、そのメンバーの数人は逮捕されていたのであった。

原註 『ザ・レビュー』誌編集部

(1) 合同電球工場はブダペストの労働者地区および工業地区ユベストにある大工場である。電球とラジオ部品を生産する。

(2) 中央労働者評議会に関する状況および設立の時期については、様々な証人が様々な証言をしている。例えば、フェレンツ・テューケは設立会議について詳しく説明をしているが、その日付は十一月十四日としている(テューケ「ハンガリア革命における労働者評議会の成立と消滅」『ザ・レビュー』誌第三号一九六〇年一月。本誌(批判と展望)二号と三号に翻訳掲載)。ユベスト革命評議会から労働者評議会の召集権限を与えられ、中央労働者評議会の設立準備に重要な役割を

二十三日を過ぎてからであった。われわれは永続的リーダーを選び、サンデル・ラスを議長とし、カロチエを副議長とした。バイは書記となった。われわれは四ないし五部門、組織部、政治部、報道部、経済部などを設立した。

こういっただけのことが中央労働者評議会に大きな権限を与えたので、われわれは、以前の計画つまり全国労働者評議会の設立の実現を真剣に考える状態に至った。

全国の工業中心地との接触は、永続的、かつ密接になった。ヴェスプレン、ペチ、タテンヤ、コンロ、サルゴタリヤン、ミスコルツ、チザ河以遠の地域、チザ河とダニューヴ河との中間地域の各代表はブダペストに住んでいた。毎日、中央労働者評議会は三十人から四十人の地方代表の訪問を受けたが、彼等は各種工場を下宿に使っており、電話や鉄道員に送られる伝言やで各自の組織と接触を保っていた。われわれは最も重要な工業中心地との人的連絡を見事に確立していたといっても過言ではない。

われわれはまた三人から四人の農民代表の訪問も受けた。彼等の態度は、農民独自の要求が補足された点を除けば、あらゆる点でわれわれと一致していた。われわれは十二月四日付の機関紙に農民代表の要求を発表した。次はその抜粋である。

われわれ、ボクド、チエザール、ダトの個人農および集団農場農民、それにわれわれと結ばれている職人、工業労働者、知識人は、われわれの代表として自由に選ばれ代表された全国委員会を通じて次のことを宣言し要請し要求する。……

2. 国家全体に関する問題についてはすべて大ブダペスト中央労働者評議会の要求に全面的に賛成する……

演じたある証人は、ユベスト革命評議会のアッピールは予じめ中央労働者評議会の設立を目的として発していたという。また彼によれば、最初に予定された会場から電球工場へ代表が移動しなければならなかったのはユベスト革命評議会の全員が前夜逮捕されてしまい、建物は武装兵士団により占領されていたからである。(証言記録「イムレ・ナジ研究所資料」)

(3) テューケは代表は六人といっている。

(4) テューケは一つの事項で両者が同意したといっている。すなわち、カダールはソ連軍隊の撤退に関する交渉を開始すると約束し、中央労働者評議会は十一月十九日にストライキを止め労働に戻る約束した。

(5) テューケによれば、十一月四日の数日以後にソ連軍との交渉が成立したのは、国外連行を止めさせるための理由からだけではなかった。

(6) ストライキは十一月十九日に終わった。もつともセベスチェンは詳しくは報じてはいない。

(7) テューケによれば各地区は一人の代表を有し、二十二人の代表から成る中央労働者評議会は直ちに議長と書記を選出した。テューケは、地方とくに鉱山の代表が政府に対する中央労働者評議会の態度を非難したので激しい討論が起ったといっている。その非難によれば、中央労働者評議会は政府が中央労働者評議会に対して戦車向けようとする毎に政府を信じてストライキを止めたという理由であまりにも条件闘争的であるというのである。しかし数時間にわたる討論の後、妥協に達するための政府との交渉が必要であるというブダペスト代表の見解を彼等は認めた。

(8) (The Review; Vol. 3, No. 2, 1961より本誌編集部訳)

ハンガリア放送の記録

〔10・23〕11・8〕

これはハンガリア革命の全過程をつうじてハンガリア労働者の血の叫びを伝えるハンガリア各放送局の放送テキストである。ハンガリア国外で傍受、速記録された全内容はここに集録した部分の五倍、六倍にもなるものであるが、残念ながら紙数の関係上その多くを割愛せざるをえなかった。機会があればその全内容を刊行することによって、ハンガリア革命の全容とその生きた声に直接に接することができるだろう。ここに集録されなかった放送局もふくめて、ハンガリア労働者の声を刻々伝えた放送局は、デプレツェン放送、ドウナブントレ放送、エゲル放送、ジェール放送、

送、ガボシュヴァルツ放送、ミシニコルツ放送（三局）ミシニコルツ放送、ボルショド州労働者評議会の放送局、サボルチーサトマル州労働者評議会の放送局）、ニイレジハザ放送、ソンバティ放送、ベチ放送であり、ブタペスト放送（コッシュニート放送）は、十月三十日以後自由コッシュニート放送となった。なお、以上はいずれもハンガリア公立放送局であるが、その他所在地が確認できなかった自由放送局としてチョコナイ、ラコツイ、ロカ、ライク各放送局、また戦闘中ときどき放送したアマチニア放送および軍関係の短波発信所がある。（編集部）

十月二十三日 火曜日

十一時 コッシュニート放送

……ブタペストの数大学で学生大会が開れ……次のことが決定された。

ブタペストの青年はポーランド人民共和国の大使館の前で無言の同情デモを行なう。この無言示威の目的はポーランドにおける事件に青年の深い同情と連帯を表明するものである。

……大学生たちは本日午後二時半、作家協会事務所の前に集合する。

十二時 コッシュニート放送

ハンガリア作家協会事務局コミニケ

ハンガリア作家協会はポーランド事件、社会主義の強化、そしてポーランドの共産党中央委員会が提出した決議にふくまれる指令に關して大きな理解を表明したい。過去において民主化のためラコシ政策に反対する闘争を行なってきたハンガリアの作家たちは、ハンガリア国民の主要任務は、第一に社会主義民主主義の道にそって前進を確保すること、第二にポーランド事件によってかもされたハンガリア労働者と学生の熱望を利用して国民の幸福と政治努力をかき

乱すようなすべての挑発を排除し、打ち挫くことであると考える。

十二時五十三分 コッシュニート放送

内務省コミニケ

公安を維持するため、内務省は追って通告をするまですべての集会と示威運動を許可しない。 内相 ラスロ・ピロシ

十四時二十三分 コッシュニート放送

ラスロ・ピロシ内相は集会と示威運動に対する禁止を撤回した。

十五時 コッシュニート放送

十月二十三日午後二時ハンガリア共産主義青年同盟中央委員会は会議を開いた。同中央委員会はポーランド人民共和国に同情して行なわれたブタペスト青年の示威運動を是認した。……次いでこの示威運動に参加を決定し、会議は打ち切られた。……同委員会は大学生およびその他の青年たちのデモ参加者あらゆる挑発行為をつつしむよう要請する。同委員会はポーランド青年に賞讃の電報を送る決議を採択した。

十九時三十分 コッシュニート放送。国内国外向け解説

……本日午後、秋空のブタペストで行なわれた一大デモ行進……われわれはこのことを予期していた。本年二月いや一九五三年六月以来、労働者、農民、公務員、学生、作家、ジャーナリストはわが国の経済的、政治的生活を正しい社会主義基盤の上におくことを次第に声高く要求していた。マテイアス・ラコシ、ミハイ・ファルカ

スその他の指導者たちが社会主義の神聖な理想を汚して多くの犯罪と誤りを社会から拭い去ることが要求されていた。

過去数十年間、各大学における会合につぐ会合で青年たちはイムレ・ナジの指導する政府を結成するようにとの要求を採択した。

その他の要求は次の通り。

政治的経済的平等と相互に国内問題に干渉の基盤にたつハンガリア連、ハンガリアユーゴ友好関係の樹立。専門家の参加による農村社会の再編成。ハンガリアのウラン鉱の最も合理的利用。工場に労働者の自治制度の導入。強制割当供出制度の再検討および個人経営農民の援助。コッシュニートの国家紋章の角使用。三月十五日と十月六日を休日と制定すること。

各大学のなかには十二項目の要求を掲げるものもあり、また二十項目の要求を提出したものもあった。しかしこれらはどれも公正な頭脳と温い心をもって行なわれたものであった。

本日正午、内相はブタペスト大学生のデモを禁止したがハンガリア勤労者党（共産党）政治委員会はこの命令を変更させた。大学院の学生、哲学、法学、経済学部学生、その他の学生たちは、彼等の教授とハンガリア勤労者党の幹部たちに率いられて示威行進を行なった。

最初はずか二、三千人だった。しかし、それから通行人、兵士、高等学校の学生、電車の運転手および一般市民も加わり数方を数えるに至った。

「われわれは新指導者を望んでいる！ われわれはイムレ・ナジを信頼する！ 人民の軍隊万才！」街中にとどろいた。……ブタペストの町には再び自由の息吹きが感じられた。

■十月二十五日 木曜日

時間不明 自由ミシュコルツ放送

ブタペストにおけるハンガリア人の虐殺をやめよ。嘘言を信ずるな。ハンガリアからソ連軍隊を撤退せよ。ストライキだ。われわれはストライキをやる理由がどっさりある。われわれはもう沢山だ。ある種の指導者の独裁政治はもう結構だ。

われわれとて社会主義を望んでいる。しかし、ハンガリア労働者階級とハンガリア国民の利益、ならびにわれわれの最も神聖な民族感情を反映した、われわれ自身の特殊な条件に適合した社会主義なのだ。

われわれは個人崇拜によって外聞の悪いことをやらかし、自らを汚した人々すべてを排除するよう要求する。

われわれはプロレタリア国際主義の諸原則を守り、とくにわれわれハンガリア民族の伝統を、千年の過去を尊敬する共産主義者：が政府ならびに党生活において最も重要な地位を与えられることを要求する。

計画経済の領域で犯された重大な誤謬に関しては、計画当局の責任ある指導部の即時罷免を要求する。

われわれは実質賃金の増額を要求する。

われわれは議会がもはや選挙機械ではなく、議員がもはやイエスマンでなくなれば、われわれの要求が実現されるものと信じている。

■十月二十六日 金曜日

昨夜二十二時以後——特赦期限の切れた後も依然として戦闘を続けるグループに対する掃蕩は開始され、続行中である。

十時 コシニウト放送

第十一地区では武装部隊の抵抗は粉碎されました。同地区では現在孤立した若干のグループの掃蕩が行なわれています。

今朝までにユレイ街、ゲルト、バラロシ広場、ダニューグ河沿いおよびエルケル街で切られた地域は掃討されました。そこには完全な秩序が行き渡っています。第十三地区の大部分は平和です。各工場には労働者評議会が順次結成されつつあります。第十地区ではコパニヤイのエナメル工場、オリオンその他の工場で労働者評議会の結成準備が進行しています。

ブタペスト市議会はわれわれに次の報告を依頼してきた。

ブタペスト公共事業労働者、食料・小売商品生産労働者諸君、ブタペストの市街に流血の闘争が起ってから四日目になる。首都の物資供給は良好状態にある。……市民の重要な要求を満足させ、ほとんど不可能と思われた問題を解決したのである。首都住民の名においてわれわれはすべての労働者に感謝する。

十二時 コシニウト放送

ブタペストで騒ぎを引き起しているグループ勢力は打倒された。昨夜十時までに大部分の騒擾者は武器を投げ出した。……闘争を停止した。今朝までに残った反革命の中心地はわずかに三カ所である。

時間不明 自由ミシュコルツ放送

大ミシュコルツの労働者評議会の委員会、および党委員会は労働人民の決意の上に立って……提出された要求をそれが基本的に実現されるまで引下げないことを決意した……

1、われわれはソヴィエト軍が即時ハンガリアを引きはらい撤退することを要求する。

2、新しいハンガリア政府

3、労働者のストライキ権

4、革命に参加したハンガリア人の完全な大赦。

5、これらの要求が実現されない限り、ボルソド州および大ミシュコルツの人民は炭鉱、鉄道、病院、公共事業、電力、新聞をのぞいてそれぞれストライキに入るであろう。

青年労働者および学生諸君、秩序ある方法で行動せよ……われわれを信頼せよ。われわれは労働者によって選出されたものであって政府によって選出されたものではない！

ボルソド州および大ミシュコルツ労働者評議会指導部

■十月二十七日 土曜日

七時三十分 コシニウト放送

昨夜のブタペストの情勢調査。各地区において多くのグループが特赦令を機会に武器を投げ出した……昨晩は一昨晩よりも平穏であった……第十一区からのニュースによればこの地区に労働者評議会が組織されつつある。イカルスには工場を防衛する労働者警備隊がある。臨時労働者委員会はチェル自動車工場にも結成されている。彼等は工場保安の準備をした。工場周辺には発砲はなかった。

これらもまた掃蕩されつつある。昨夜十時までに武器を引き渡したものは特赦令によって帰宅を許された。

……ブタペストおよび地方の数都市の一般市民は、これらの地方の武装グループが……混乱を起すようなビラを配っている事実にわれわれの注意を喚起した。……諸君はどんなビラでも、同志イムレ・ナジの諸声明や中央委員会の諸決議に合致しないものは信用してはならない。

十二時二十五分 コシニウト放送

これから労働組合委員会(SZOT)の二つのコミニケをお伝えします。

労働者諸君、諸君の要求は実現され、各工場は労働者評議会によって指導されるであろう。このことは、工場が人民、労働者、技術的助力者の所有に移ったことを意味するのである。今後諸君は、諸君の身を以て動かす工場が諸君のものであると思つてよい。極度に集権化された工場管理は停止されたのである。このことは労働者評議会にとり一大責任を意味する。したがって、これら評議会の代議員には最大の考慮をもって、最も経験を積み、最も優秀な労働者を選出すべきである。新政府は低賃金所得者の賃金を引上げるであろう。諸君が工場で生産のスタートを切り、労働者評議会がよくその機能を發揮すれば発揮するほど早急に賃金は引上げられ、しかも最可能の範囲まで引上げられるであろう。それ故、社会主義を建設する自由で民主的なハンガリアのため、新ハンガリア政府を支持せよ。

労働組合委員会幹部会

ハンガリアの技師、技術者諸君

新しいイムレ・ナジ政府は民族統一を表わすものである。新政府は祖国の問題を人民とともに討議するであろう。また人民経済の再組織と重要な技術上の問題を技師、技術者諸君と討議するであろう。将来は重要問題が専門家の知識を待たずに決定されるということは何り得ないであろう。将来の専門家の言辭が国内で大きな比重をもつことになる。

労働組合委員会幹部会

十三時十二分 コシュート放送 論評

新政府が組織され、同志イムレ・ナジを首班として、過去数年間政治的なおざりと誤りによって追い込まれた悲劇的な情勢からこの国を引き離すことを誓う宣誓就任式を行なつた。政府は結束を固めて、発表した国家計画の実現に努力するであろう。これは美しくも偉大なる任務である。ハンガリアのいかなる政府も長年これに類した任務をもつたことはない。……政府は全国民の後援を感ずるが故に、諸任務達成は可能である。……同志イムレ・ナジは官僚主義的中央集権政策を終始一貫拒否し、下級機関の独立と発意とを考慮に入れることを一九五三年に実証した政治家である。新組織の政府はこれと同じ目的によって導かれているが、われわれはなお、政府は国内経済を現実の事態に基いて中央で指導する立場にあるとつけ加えてもよいであろう。

……

十五時三分 コシュート放送

者の経済条件が改善されてこなかったことを知っている。それどころか、それは絶えず悪化してきたのだ。われわれは人民が、労働者が、すべての者が政府の政策を生活水準が向上したかという観点から判断することを知っている。われわれはこうした思考様式は生活環境によって形成され、美辞麗句を使つても変えることはできないものであることを知っている。過去に生じた事件は過去の政府の方針のもたらした最も重大な結果であつた。……

十八時四十七分 自由ジャーナル放送

こちらは自由ジャーナル放送、波長一八五・五メートルおよび二二・八メートルです。

親愛なる聴取者諸君、現在の正確な時間は一八時四十七分です。ジャーナル・ショブロン州行政委員会の指導者は、ジャーナル・ショブロン行政委員会のハンガリー労働者党に対する次の通告を行った。市民諸君同志諸君！ 本一九五六年十月二十七日ジャーナル・ショブロン州ハンガリア労働者の行政委員会が組織された……。

これ以上の流血は中止し、平和、秩序、および平和建設活動を展開しよう……われわれは武力戦を即時停止すべきである。全国内の国家治安警察は武装解除され、武器はハンガリア軍に引き渡さねばならない。

次に、労働者党中央委員会および政府はハンガリア駐留の武装ソ連兵士が戦闘を停止するよう手段を講じ、この国から撤退する保証をとりつけなければならない。党の地区委員会はジャーナル・ショブロン州の労働者の権力とその指導的団体ジャーナル・ショブロン州臨時国民評議会を支持する。この州臨時国民評議会はその中に労働者評議

……

首都のバス工場には労働者評議会が結成され、すでに活動中である。評議会は労働者のために食糧を集めた。また所有する大量の医療品を病院へ送りつつある。

国内各方面から工場内に労働者評議会を設けるとのニュースが伝わってくる。チョグラド州では、セグドやドメゾヴァアシャルでもそうだが、大部分の工場内に、またヘヴェシ州でも労働者評議会は結成されている。

同じようなニュースはベネツァアシャハの紡績工場、同地の機械工場、ニイレツハザの鉄道駅、ドウナペンテレからも伝えられ、同地の労働者評議会が結成されている。

十九時十五分 ペチ放送

ペチのハンガリア鉄道本部の労働者は、この危機に当って改訂された中央政府と同志イムレ・ナジを支持し、独立した民主主義ハンガリア実現のため戦う。しかし、われわれは新政府がラ・ペブリチを通信便郵政省に任命したというニュースに大きな衝撃を受けた。このペブリチは鉄道に独裁的テロ組織を持ち込んだので……法を侵した者であるが故に直ちに罷免し、……鉄道員の正当な利益と企業内に社会主義的秩序を実践する……者の任命を望む

次にわが町に兵士の声明

労働者諸君、ペチの労働者諸君、わが町にとどまる国防軍部隊はラジオ放送にあつた各工場の要求に同意している。われわれもまた労働者、坑夫、農民、インテリの息子だ。わわれれ、わが国の労働

会、兵士評議会、農民評議会、知警評議会および青年評議会を包含する。このことは反革命とは何の関係もなく、ただ、……正当な民族的な要求を実行せんとするものである。

十八時五十分 自由ジャーナル放送

モンヨンマジヤロヴァルの金属加工企業の労働者評議会は自由ジャーナル放送に決議を送つた。

九箇条から成り立つ彼等の決議の中で、彼等は、いずれの側であれ、ハンガリア人民の自由のための戦闘に倒れた犠牲者およびハンガリアの英雄達と固く結びついていることを声明した。

彼等は、ハンガリア青年がその宣言中で公にしたハンガリア人民の要求に同意する。前記工場の労働者達は、モンヨンマジヤロヴァルでは守備隊に対して忘れることのない尊敬と感謝を表明する。十月二十六日、その守備隊はわれわれを救助に来……そして、われわれの町を解放した。同時に彼らは協力に対して……感謝を表明した。

……十月二十九日まで活動をつづける。……彼らは職員局の幹部の書類綴全部を手に入れ、それらを労働者のパトロールに記した旨報告している。十月二十九日には彼等は全幹部書類綴の資料を職場委員会の処置に委ねることだろ。労働者評議会は、正当な賃金制度の作業に関する適当な専門家でもって一委員会が創設されるよう提案するだろ。ハンガリア青年の宣言第十七項に従つて、網索工業労働者は中立の原則が遵守されるべきことを要求している。

十九時十五分 自由ジャーナル放送

ソーニイの石油工業企業の労働者評議会代議員は今日午後、ジェ

ールの貨車工場の労働者評議会とジエールにおける出来事および同地の労働者評議会の活動について理解を深めるため会談を行なった。ソーニイからの労働者達は、ジエール・タタバニヤ間の各地域では、国民評議会および労働者評議会が組織されていると語った。コマロムおよびソーニイにおける工場労働者はプタペスト労働者との結束を表明した。タタバニヤでは秩序は保たれれば平穏である。

二十時十分 自由ジエール放送

こちらは自由ジエール放送です。

本日の出来ごとを簡単にふりかえってみよう。人民の正当な戦いは完全な勝利に向って急速に進んでいる。われわれが今日、ラジオ放送についてみただけでも情勢の発展を知ることができる。昨日の夕方までわれわれジエールだけが放送していた……その時マジヤロヴァールの人民が放送局を手に入れた。次いでマシヨンマジアロヴァール放送もわれわれに加わった。かくてわれわれは自由ジエール放送のための二つの有力な放送局を持った。われわれの放送を注意して聞いた人なら午後おそくにわれわれが有力なソニバティ放送局の労働者をあたたかく迎えたことを聞いたであろう。ソニバティ放送局労働者は本日午後、われわれの放送に加わった。従って自由ジエール放送が、いわば、ほとんど全ドウナントル(西部ハンガリア)すなわちジエール・コマロム・ヴァシ・およびアプシヨ・ザラ各州に放送していることを、今夕、聴取者に告げることができる。われわれ人民の真の戦いの情勢と成果についてドウナントルの過半に知らせることができる。ハンガリアの他の都市でも本日の情勢は同様であったと思われる。人民はわが国将来の運命の管理人を人民自身

の掌中に握ることとなった。……報告によれば、プタペストの情勢は次第に落ちつこうとしており、現在、比較的平和と秩序がたもたれている。

国民の真の戦闘は間もなく勝利を得ることは確言できる。この日の特に注意すべきことのなかには、全国に駐留するソ連兵士の行動と考え方に変化が挙げられる。当地では人民による平和を求め、正義の戦いであるということを知って、ソ連兵士達はわれわれに傷を負わずな、われわれも君達に傷を負わせない。われわれは帰国できたなら有難いのだと言明した。親愛なる聴取者諸君。大小幾多の出来事について話し、それらを分析してもよいのだが……。ジエールにおいてばかりでなく、西部ドウナントルの全地域で、われわれの不屈な国防軍将兵が、われわれの夜の休息中も手に武器をとって警戒に当たっている。親愛なる聴取者諸君、さあもう休みませう。われわれには夜の休息が必要である。というのは秩序が完全に恢復されるまでは、われわれは今までに手に収めず結果を守り続けねばならないからである。

自由ジエール放送の勤務者達は夜どおし勤務についており、特別の事件の場合には夜中でも聴取者諸君にお知らせすることになっている。親愛なる聴取者諸君、明日までさようなら。日曜の朝にはジエール放送は完全なプログラムを持って再び放送を続けるであろう。

二十時三十五分 ミシユコルツ放送

………

選ばれた委員会は疲れを知らぬ活動を続けているが、同志イムレ

ナジはすでに要求を受け入れた。そこでわれわれは今後の任務遂行に諸君の助力を求め、スト委員会が指令を発したならば、現在のストライキは中止されよう。労働者委員会およびストライキ委員会

………
ボルシヨド州および大ミシユコルツの労働者評議会は、工場および企業体の安全運営の確保と、内部の安定を援助するため——労働者評議会と労働大衆の申出を基礎として——直ちに全工場、および全企業体が工場評議会および企業体評議会を、即時結成することを要求する。

労働者評議会は、工場および企業体の指導者に対して所属の関係を検討することなく、ただ人民の信任の点を考えて、できるだけ速やかにこれら評議会の代表を選ぶことを要求する。

工場および企業体評議会の構成員は、ギルシヨド州および大ミシユコルツの労働者評議会およびこの下に行動するストライキ委員会と協力して任務を果さなければならない。……われわれはボルシヨド州のすべての労働者が党所屬に関係なくわれわれを助けることを期待する。

ボルシヨド州および大ミシユコルツ指導部

時間不明 ミシユコルツ放送

この二日間ミシユコルツ市は労働者評議会と学生評議会の指導下にある。労働者評議会は守備隊および警察の指揮をとっている。労働者評議会と学生の要求は新聞とラジオによって公けに知らされた。二十一項目の労働者評議会の要求も、十一項目の学生の要求もともにである。周知のごとく、州ストライキ委員会は、郵便、運

輸、報導機関、食糧店、病院、動力源を除いてすべての工場でストライキに入るよう要求した。

ミシユコルツとボルソド州では主としてわれわれの大規模な秩序かく乱なしにすすんでいるというのが事実である。われわれはこのことを誇りとする。われわれは今後も秩序かく乱を避けよう。しかし、われわれはまたストライキの手段によって要求の即時実現を聞いとるために努力しつづけるであろう。

ボルシヨド州労働者評議会および学生評議会

■十月二十八日 月曜日

八時四十分 自由ジエール放送

労働者評議会は至る所で組織されなければならない。労組全評

(SZOT)議長職の提案!

労働組合全国評議会議長職は、各工場、鉱山、および事業所に労働者の経営管理を実現するよう労働者諸君に示唆する。労働者評議会の結成は選挙によらなければならない。労働者評議会は工場の大きさに従って二十五人ないし七十五人の構成員を持たねばならない。また、労働者の各階層が代表されねばならぬことを示唆する。一〇〇人以下の労働者の工場では、全員が会議の構成員であってよい。

労働者評議会の任務。労働者評議会は工場の生産、経営、管理に關するあらゆる問題を決定する。生産を指導するため、労働者評議会は、工場の常任指導者を補佐するため五人から十五人の経営委員会を選出する。この委員会は、労働者評議会の直接指令に従って工場の経営に關する問題を決定する。労働者評議会は工場に最も適合

した賃金体系、工場の社会的、文化的補給規定の開発、および投資資金と利潤の利用を決定する。労働者評議会は工場または鉱山の作業計画を定める。労働者評議会は適切な経営および国家に対する義務の履行について労働者全体に対し責任を負う。労働者評議会の主要任務は事業所における秩序と規律を保持し、また生産を開始することである。労働者評議会は——全労働者の援助を受けて——労働者全評議会組織に対し示唆する上述の基礎に立って、彼等の共通の生活と工場とを防衛せねばならない。

労働組合全国評議会議長職

十時五十分 自由ジャーナル放送

二人のイタリア人ジャーナリストがブタペストから到着して目下ホテルに滞在している。……彼等はブタペストの住民が過去数日間非常に雄々しく戦ったと語った。秘密警察は事実上存在しなくなった。秘密警察隊員は彼等の服装を変えて隠れつつある。そのジャーナリスト達はまたソ連戦車が反乱者達に味方していたのを幾回か見たと語った。彼等はブタペストの境界で、自分らの正しい身許を告げるよう求められたと語った。彼等が自分等はイタリアのジャーナリストだと告げた時、ソ連兵士達はガリバルディを賞めせやし、そして二人の将来を祝福した。

十時五十分自由ジャーナル放送

ソンパティ国民評議会の要請

ソンパティの同じ地方民諸君、ハンガリア労働者諸君！ソンパティ国民評議会は住民の最も広い階層から結成された。そして、国

民評議会は国家政府の計画を承認する。以下はその目的である。

- 1、ソ連軍隊のハンガリアからの即時撤退に関して、ハンガリア・ソ連両国政府間の即時折衝開始のために、秩序と平和が保証されるべきである。

- 2、諸工場および諸企業はその労働者評議会を直ちに結成すべきである。

- 3、全国評議会は賃金および家族手当の引上げ、老齢年金設定および令書無発行課税の取止めを支持する。

- 4、国民評議会は、婦人の労働条件改善のために戦う。

- 5、国民評議会は住宅条件の早急改善を要求する。

十一時七分 コシニート放送

サバドネツ紙(勤労者共産党機関紙)の論調

われわれは過去数日の事件を反革命ファッショの企図以外の何ものでもないと考える人々に賛成しない。……わが国において一大国民民主主義運動が展開し、全国民を一つに結びつけたが、過去数年間の独裁制に抑圧された国民の感情が自由の最初の微風によって爆発したものであることを、われわれは今日までにさとっていななければならない。この大きな愛国的示威運動が血によって汚され、最も憂うべき戦いの発端となった事実に対する原因、および誰がそれに対して責任があるかは立証されなければならない。この問題にはわれわれはまだ答えることができない。けれどもわが人民は明瞭で真実な解答が与えられないかぎり、心を安んじえないであろう……真実は、反乱者のなかで社会主義民主主義は安定していると考えなかった愛国者——共産党員を含めて——の数が非常に大きかったと

いうことである。この上の流血を避け……るためにも……まだ戦いを続けている者に対し……武器を放棄するよう要請する……

十三時二十分 コシニート放送

この上の流血と停止と平和確保のためにハンガリア人民共和国政府は直ちに全域の発砲停止を命令する。軍隊は攻撃を受けた場合のみ発砲するものとするをここに通告する。

イムレ・ナツ

十三時三十分 自由ジャーナル放送

ジャーナル市臨時国民評議会は州内人民の同意の下に、コシニート放送がこの劇的な時期において人民に対する報道の義務を果していないことに遺憾の意を表する。それ故、われわれは、真理と人民の利益に従って国家と人民に報道するため、コシニート放送をハンガリア作家たちに引渡すよう政府に要求する。

十四時二十五分 コシニート・ペテフィ放送

射撃は停止されている。われわれはこの不幸な内戦が終結し、これ以上の射撃がブタペストの街上で行なわれないことを信じたいし、また確かにそうなると感じている。

この最近の劇的な事件の真の理由は、ハンガリアにおけるスターリン主義の八年、すなわち……独裁の猛威である。われわれには一九四五年に自由ハンガリア建設を始める機会があった……運命によって与えられたその機会を利用することがわれわれには許されなかったことをはっきり認める。

民評議会は国家政府の計画を承認する。以下はその目的である。

- 1、ソ連軍隊のハンガリアからの即時撤退に関して、ハンガリア・ソ連両国政府間の即時折衝開始のために、秩序と平和が保証されるべきである。

- 2、諸工場および諸企業はその労働者評議会を直ちに結成すべきである。

- 3、全国評議会は賃金および家族手当の引上げ、老齢年金設定および令書無発行課税の取止めを支持する。

- 4、国民評議会は、婦人の労働条件改善のために戦う。

- 5、国民評議会は住宅条件の早急改善を要求する。

十一時七分 コシニート放送

サバドネツ紙(勤労者共産党機関紙)の論調

われわれは過去数日の事件を反革命ファッショの企図以外の何ものでもないと考える人々に賛成しない。……わが国において一大国民民主主義運動が展開し、全国民を一つに結びつけたが、過去数年間の独裁制に抑圧された国民の感情が自由の最初の微風によって爆発したものであることを、われわれは今日までにさとっていななければならない。この大きな愛国的示威運動が血によって汚され、最も憂うべき戦いの発端となった事実に対する原因、および誰がそれに対して責任があるかは立証されなければならない。この問題にはわれわれはまだ答えることができない。けれどもわが人民は明瞭で真実な解答が与えられないかぎり、心を安んじえないであろう……真実は、反乱者のなかで社会主義民主主義は安定していると考えなかった愛国者——共産党員を含めて——の数が非常に大きかったと

十七時二十五分コシニート放送

イムレ・ナツの演説(略)

国歌吹奏

十二時十五分 自由

ジャーナル州国民評議会の要請

ブタペストへのメッセージ
ドウトルの名において、ジャーナル州国民評議会はイムレナツ議長に次の措置を取るよう要求する。戦闘を停止するため、一九五六年十月二十八日のおそくも二十時までに措置を取ること。上記要求遂行のため、彼はソ連部隊司令官に戦闘の中止を要求すべきである。……おそくも二十時までにイムレナツ自らの回答を期待する。

ジャーナル州国民評議会

十七時四十三分 自由ジャーナル放送

ジャーナル守備隊の兵士たち、および士官のメッセージ

ジャーナルの労働者諸君！親愛なる友人たちよ！われわれはジャーナル守備隊の兵士は、諸君の正当な要求を支援した。われわれはそれらを支持し、それらのために生命をかけている。正しい示威運動を行なっている労働者の群中に秩序破壊分子を送り込む者がいる。彼等を信じないように……誤って導かれるな。……われわれは古い資本主義秩序は欲しくない。独立ハンガリアを目指すわれわれのために闘え……

十八時四十分 ボルショド州労働者評議会の放送

ハンガリア労働者評議会および自由戦士に訴える！デブレセン、セゲドハトヴァシ、セケシュフェルヴァル、ペチ、ソンパティ、ジェル、モションマジャロヴァル、ソルノク、ニイレジハナおよびすべての地方の労働者評議会、自由戦士、わが青年諸君！われわれの数日間の自由の闘争の間に、全国の共同要求がおもむろに形づくられ始めている。ここでミシュコルツ労働者評議会および学生評議会に率いられるわれわれ労働者、学生および兵士は次のような提案をする。

一、われわれは自由な社会主義国家のために戦い、またラコシ政権に仕えた閣僚の入れない、真に民主主義的で主権をもち独立した新しい臨時政府を要求する。

二、かかる政府は通常自由選挙を通してのみ作られ得る。現状ではわれわれはこれを達成することができないから、イムレ・ナジが最も必要とする各省だけで臨時政府を組織することを申入れる。現状では二十二の省と三人の副首相を置く必要はない。

三、人民戦線……および……ハンガリア勤労者党の連合に依存するこの新しい自由独立な臨時政府の最初の任務は、ソ連軍隊のわが国からの即時撤退、彼等の基地へのみでなく、自身の国ソ連への引揚げである。

四、新政府はわが国の全労働者評議会ならびに学生評議会が提出した要求をその計画の中に含め実行すること。

五、新国家の権能は二つの武装隊、すなわち警察と国防軍（国土防衛）のみを持つこと。秘密警察は廃止されるべきである。

六、戒厳令の廃止、および反乱に何らかの形で参加したすべての自由戦士の……全面特赦。

七、二ヶ月以内に諸政党参加の上で総選挙が行なわれるべきこと。

以上においてわれわれはすべて共同の態度を取るべきである。……主としてラジオによって結成せよ。ペチ、ジェル、マションマジャロヴァル、ミシュコルツ、デブレツェン、ニイレジハナおよびその他は放送局をもっている。このことは連絡はラジオを通して確立される可能を意味している。……われわれは諸君の提案を待っている。われわれの共同の立場をできるだけ早く作るのではない。か。そして現政府を崩壊に導き、われわれの要求実現のためイムレ・ナジの率いる臨時政府を組織しようではないか。

諸君のすべてがソ連部隊に対してロシア語を用いて、ハンガリア人民の自由のための合法的闘いを抑圧するため戦うことのないよう呼びかけよ。……ラコシの同類ゲレと彼の共犯者は彼等が反革命者、ファシストの悪党およびギャングと戦わねばならないと偽って、ソ連軍隊を呼び込んだ……われわれは諸君の回答と……発表を推進するような提案を待っている……

ボルシヨド州労働者評議会および学生評議会

二十一時二十六分 ミシュコルツ放送

ソ連軍にあてたミシュコルツ労働者および学生の要請を読み上げる。ロシア語からの翻訳。将校および兵士諸君！われわれは諸君が、諸君の兄弟、ハンガリアの労働者、学生、青年と戦わないよう要求する。わが国民は諸君に対してではなく、ただ自分たちの合法的な要求達成のために反乱をしたのである。われわれの利益は同一である。われわれも諸君も全く、よりよい社会主義的生活のため

に戦っているのである。ハンガリア人民の正当なる闘争を撃滅する単なる道具となるな！

ミシュコルツの労働者ならびに学生

時間不明 自由ジェル放送

ハンガリア労働者党ジェル・シヨブロン州国民防衛委員によるハンガリア労働者党中央委員会、および新政府に対する要求

1、かれらは、ブダペストおよび地方の国家保安警察を武装解除し、その武器をハンガリア人民の軍隊に引き渡さねばならない。

2、かれらはハンガリアのソヴィエト武装勢力が戦闘を停止し、ハンガリアを自発的に撤退することを保証しなければならぬ。

これは反革命ではなくて、ハンガリア労働人民の民族運動である。ジェル・シヨブロン州の労働者農民は工場所有者や地主の権力の復活を欲していない。民族革命は旧体制の復古を目的とするものではない。

政府とブダペスト放送はジェールの労働者代表によって提起された要求に答えなければならない。ブダペスト放送はジェールの革命的事件のニュースを放送しなければならない。

時間不明 自由ジェル放送

ショムバセリの情勢についての報告。自動車修理工場の労働者はロシア軍がハンガリアを出てゆくまでストライキを続行すると決定した。二人の政治犯が地方刑務所から解放されたこと。かれらは満場一致でこの修理工場に働くよう引き渡されたこと。石油精製工場の工場長は罷免され、職員は労働者評議会の監督下におかれたこと。労働者は一滴の油も生産しないであらうこと。なぜなら、か

れらはソヴィエト戦車にたわらを供給することを欲しないから、な

どが報じられている。

十月二十九日 月曜日

七時五十二分 自由ミシュコルツ放送

革命的知識人委員会によって発表された書簡

……わが経済的、自然的宝物を罪を受けることなくして冒瀆したり、売ったりすることのできた時代は終わった。スターリン主義者の一味であるラコシ・ゲレ・ファルカシラの時代として、労働者やわが青年たちの抱く愛国心を粉砕し、除去することを企てた時代は終わった。

同胞市民よ、われわれはソ連軍がこの国を立去るといふ約束を得た。今から後、この国ではハンガリア国民に、人民軍に組した青年闘士たちに、警察隊、労働者評議会、そして村落の人びとに権力が移ることになった。われわれが一つになれば、われわれは独自の、自由な民主主義を樹立し、形成するだけの十分な力を有している。

それ故に、ブダペスト革命知識人委員会は、すべての勇敢な自由の戦士、青年労働者や若い農民、大学生、ペテフィ・サークルの人々および人民学会の旧会員に対し国家防衛の任務に当るため申出るよう要請する。これらの人々は、警察隊、国防軍兵士、および労働者評議会のメンバーと共に、すべての人々が熱望している国家の秩序と平和の確保に当るのである。

ハンガリア国民よ、われわれ各自の間には意見の相違もありえよう。しかし、われわれは次に述べる最も重要な要求については確実

に一致しているのだ。

(一) 政府はこれ以上の遅滞なく、ソ連に対するわれわれの関係を

平等の基礎の上に立って調整しなければならないこと、ソ連軍は直ちにこの国全体から撤退を開始しなければならないこと。

(四) 政府は、ウラン、ボーキサイトおよび農産物などハンガリアの天然資源が秘密契約を通じ、法外な低価格で外国に売られることを防ぐために現在の外国貿易協定を破棄するべきこと。

(五) 国民がこれらの代表を自由に指名することができるといふような秘密投票による選挙。

(六) 工場や鉱山が真に労働者に帰属すべきこと。工場や土地が資本家や地主に帰されないこと。工場の管理は自由選挙により選ばれたメンバーによって構成される労働者評議会に委ねられるべきこと。

(七) 政府は搾取的ノルマ制度を廃止すべきこと。経済的可能性に応じ政府は低賃金や年金の増額を行なうこと。

(八) 労働組合は自由に選出された諸機関によって労働者の真の利益を保護すべきこと。働く農民階級の利益を保護するための保護機関を設立すべきこと。

(九) 政府は、農業における自由耕作、および個人ならびに自発的に設立された協同組合に対する適切な援助を確保すること。搾取を意味し、憎悪的である強制供出義務制度を廃止すること。

(十) 政府は、農地調整その他不当な措置により損害を被った農民に対して公正な処置をとり相当な補償を行なうこと。

(十一) 言論、出版の完全な自由と、集会の自由。

(十二) 政府は国民の自由の戦いの開始された日である十月二十三日を国家の祭日として宣言すること。

ブタペスト 一九五六年十月二十八日

ハンガリア革命知識人委員会を代表して
署名 革命学生委員会………

ハンガリア作家協会………

ハンガリア・ジャーナリスト連盟

ハンガリア芸術家連盟………

大学教授団………

ペテフィ・サークル………

十時 コッシェート・ペテフィ放送

フエレンツ・モルナルが『サバドネップ』紙に書いた次の論説は、それが『ブラウダ』紙に答えているものであるために極めて重要である。

ブラウダはその最近号で同紙の通信員がハンガリアの情勢について書いた報道を発表した。その標題は「ハンガリア民衆に向けられた冒険の崩壊」という。しかし、この報道は誤っている。ブタペストで起った事件は民衆に向けられたものではなかった。それは冒険でもなかったし、崩壊もしなかった。五日間にわたり、機関銃は死をふりまき、この都市は苦悶を続けた。最も声高く呼ばれたのは社会主義民主主義のスローガンであり、反動あるいは反革命のスローガンではなかった。ペストおよびブタの革命市民は、自由、ならびに専制と恐怖のない生活、食糧の増加と国家の独立を願っている。ブラウダ紙はこれを民衆に向けられた冒険と呼んでいるのである。真に崩壊したものは、それはラコシ・ゲレ一派の支配であった。

十三時二十八分 自由ジャーナル放送

四名のメンバーからなるシヨプロン大学代表団が、本日教授および学生を代表してジャーナルに到着した。代表団は一六〇〇名の学生を代表するものであり、この上の流血をさげなければならぬということを第一の項目とするこれらの要求を提出した。それを実現するためには、政府は反乱軍を攻撃したその主張を即時撤回しなければならぬ。政府は平和条約に従い、ソ連部隊ができるだけ速やかにハンガリアから撤退する措置を講じなければならぬ。シヨプロンの学生たちの要求は、すでに述べてきた労働組合、ペテフィ・サークルその他の要求と一致している。しかし、シヨプロンの青年たちの要求は、また多くの正しい事実ハンガリア国民の注意を喚起している。かれらはすべての権力が人民の手に集中されるような自由な民主主義ハンガリアの実現を要求している。かれらは現在の議会および政府の構成には同意しえず、したがってそれらのものが新選挙法の制定に当ることは適当ではないと考えると述べている。

かれらは新しい議会が、都市と各地域の国民の評議会の代表から選出され、その臨時議会が直ちに適切な措置を講じ、新選挙法を作成すべきことを要求している。かれらはまた、わが国のソ連に対する関係を改善すべきことを要求し、さらにわが国がソヴィエトに従属させられていたために受けた損害の補償をソ連に要求している。

かれらは治安警察が解体されるであろうという昨日のイムレ・ナジの演説に不同意である。彼らは治安警察はすでに解散させられたと政府が声明することを要求している。

十三時三十分 自由ミシユコルツ放送

レーニン製鉄工場労働者評議会の声明

レーニン工場の一八〇トン熔鉱炉がふたたび作業を開始していることを知ったとき、世論は分裂した。事実と異なるすべての宣伝を矯正するために、われわれはわが国の人民ならびにすべての労働者に対し、前記工場の一八〇トン熔鉱炉の作業開始は、同工場労働者評議会ならびに州労働者評議会の同意によって行なわれたものであることをお知らせする。われわれはそれにより、ボルシヨド全州に宣言されたストライキから離脱しようとするものではない。それどころかこの措置はミシユコルツ全人民の利益のために決定されたものである。それは鉄工場、水道、その他重要施設は東部発電所から電力の供給を受けており、同発電所はその運転に必要なガスを一八〇トン熔鉱炉から供給されているからである。……同工場労働者たちはボルソド州全労働者にメッセージを送り、かれらが病院その他の重要施設に必要な電力を供給するため全力を尽す……

十四時 ミシユコルツ放送

ボルシヨド州労働者評議会は、国家警備員以外で武器を所有するすべての人々に対し、ミシユコルツのポチカイ兵舎に出頭報告するよう要求する。これはそれらの人々を人民警備隊に編入するためである。……

ボルシヨド州労働者評議会

十四時十五分 自由ミシユコルツ放送

こちらはミシユコルツIIニイレシハザ労働者評議会のミシユコルツ放送局です。

親愛なる聴取者諸君、これからボルシヨド州労働者評議会および

学生評議会が最近発表したコミニユケを放送します。

「血闘の戦闘は時々刻々続いている。ハンガリアの若い愛国者達の生命を代償として自由の戦いの成果は実を結びつつある。われわれがすでに論評において指摘したように昨夜行なわれたイレムナジの宣言は多くの積極的な面を持っている。ナジの宣言はわれわれの要求の大部分を含んでいる。しかしながらわれわれはその演説ならびに約束をそのまま受け入れることはできない。そしてわれわれの次の諸要求が応諾されねばならぬことを絶対に強調するものである。

(一) われわれはソ連軍隊が単に基地に帰るということではなく、ブタペストのみならずわが国の全土から即時そして完全に撤退することを要求する。国内のいくつかの都市においては、われわれの諸要求に全面的に同意している労働者評議会や学生や農民たちが権力を握り、軍隊を支配している。われわれは各地の秩序を維持しており、騒乱を避けることを欲している。もし騒乱が発生するような場合、それはすべて秘密警察員によるものである。しかしながら秩序を護るためのわれわれの活動はわれわれが政府の旗じるしを支持していることを意味するものではない。

(二) われわれはかつてラコシ政権に奉仕した多くの閣僚がその中に見出される現政府の構成には同意し得ない。現在の情勢においては、われわれは二十二名の閣僚も三名の副首相も必要とせず、ラコシ派の閣僚に至っては全くこれを必要としない。

十六時 自由ジャーナル放送

ジャーナル兵士評議会は、ブタペストで起った事件の結果、ドウナ

ントル地域には所屬部隊を離脱してしまい。自分たちの任務が何であるか判断しえずにいる兵士がいることを知った。ジャーナル兵士評議会は、それらすべてが国防軍司令部に出頭するよう注意を喚起する。もしそれらの兵士のなかに国境警備隊員がいた場合、関係司令部はその旨ジャーナル国境警備隊本部に通報されたい。

ジャーナル兵士評議会は所屬部隊を離脱したすべての国防軍兵士に対し、かれらが出頭した場合には、いかなる責任をも問わないことを言明する。

国民評議会内ジャーナル兵士評議会

十七時二十五分 自由ジャーナル放送

五名の代表から……鉾山代表団は次の要求を行なった、ここに挙げるのは最も重要な項目である。諸鉾山におけるノルマ制度は廃止されるべきこと。また労働者は一日四〇フロリントの基本賃金を保証されること。各鉾夫に対する特別勤務手当、および夜間作業に対する三十％割増賃金の支給。

労働組合の権限を拡大すること。労働組合は独立性を有すること。病気の時の特典は本人が労働員であると否とにかかわらず与えられるべきこと。……最も重要な問題の一つ、プスタヴァンのアパート建設計画は実現されるべきこと。……プスタヴァンの鉾山労働者は……かれらの要求について農民と一致している。

二十時五十分 自由ジャーナル放送

コッシュェート放送の声明に反して、ブタペスト市民は今なお自由を獲得するため武器をとって戦っていることをお知らせする。

だ。われわれの闘争を助けてくれ。

十時三十分 ミシユコルツ放送

ハンガリアの自由戦士とストライキ中のハンガリア労働者はかれらの最も重要な要求が実現されるまで武器をすてないし、労働に復帰しないであろう。

1、ハンガリアからソ連軍隊が自国すなわちソ連へ撤退すること。

2、面汚しのラコシ派閣僚および党指導者全部の追放、かつかれらの活動をすべて停止させねばならない。

3、人民の発言した要求はすべて政府の計画に組み入れるべきこと。

……

現在の戦闘が帝国主義者によって準備され始められたものであるとして、ある方面では反革命と呼ばれているが、これは正しくない。

レーニンが教えたように、革命は輸出できないしまた、輸入もできないのであって、彼のこの教えは現在でも生きています。レーニンの教えに従えば、われわれはこの革命を輸入された反革命と呼ぶことはできない。これは、人民の抑圧された願望の自然発生的爆発である。

二十一時三十五分 自由コッシュェート放送

当放送は今回から自由放送を呼称することになったのに御留意を願います。

■四月三十日 火曜日
時間不明 自由ミシユコルツ放送
スロヴァリア、ハンマニア、セルビアの諸君、血はわれわれの傷から流れているのに諸君は沈黙している！ われわれは自由のために闘っている。しかるに諸君はわれわれをファシストと呼ぶ！ ハンガリア人に非ずしてハンガリアの敵であるラコシ一党は同じことをいったものだ。……われわれは諸君もまたわれわれが払いのけようと欲しているさびの下にすることを了解している。今、外国の利益が諸君をしてわれわれに敵対させるよう企んでいる。……われわれは諸君がかれの嘘言を信じないだろうと固く信じている。われわれはわが国の人民の完全な発展を保証するような社会主義国家を提起しているのだ。われわれは君達のためにも、平和と社会主義の真実のためにも、わが国の人民の自由な発展のためにも闘っているの

■十月三十一日 水曜日

時間不明 自由ジャーナル放送

親愛なる聴取者諸君、国民評議会はジャーナルにおいてわれわれの諸問題を討議し、政府のいぜんとして不満足な措置のためにわれわれは革命の諸要求の即時実行が保証されたとは見なすことができないうという結論に達した。夜まで続けられた協議の結果、次の決議がなされた。

1、ジャーナルにおいてトランス・ダニエーブ会議代表は一九五六年十月三十日にトランスダニエーブ国民評議会を組織した。評議会の本部はジャーナルにおかれる。評議会はあらゆる意味で自由のための闘争と同一物である。

2、評議会に参加した各郡の国民評議会は四つ、都市は二つでそれぞれ代表を送っている。

3、評議会は自分自身の計画を作り、自ら統治するであろう。

4、評議会は他の国民評議会に対して一緒に結合することを求め、ポルソド州国民評議会、バックスクン州国民評議会およびチェル島労働者評議会はすでに統一していることを報告する。

5、評議会は二十四時間以内に国民の要求を完遂するために政府と交渉を始めることに決定した。

6、評議会は人民の要求、とくにソヴェエト軍隊の撤退に関する約束を実行する確かな保証を要求する。

7、評議会はパバ、ジャーナル、タターザラエシエルゼグに駐留する部隊が、必要とあれば上級の命令を無視してでも、いかなる攻撃に対しても人民を防衛するであろうと宣言したことを確認している。評議会は統一軍事指揮系統を確認することが必要であると考える。

はない。

ミシニコルツの各高等学校の学生会議は十月二十六日開かれた合同会議で次のような要求を発表した。

- 1、われわれは大学青年の決議に合流する。
- 2、われわれはハンガリアからのソ連軍の即時無条件撤退を要求する。
- 3、ソ連同盟からのハンガリア人戦犯その他の囚人の即時釈放を要求する。
- 4、ラコシ独裁時代の官吏を政府より追放し、裁判に付するよう要求する。
- 5、ソ連軍の介入を招来した罪ある者たちすべてに対する人民裁判、そして即決裁判の布告を要求する。
- 6、……すべての秘密軍事協定の即時廃棄を要求する。
- 7、政府がソ連の借財供与を拒絶することを要求する。
- 8、秘密警察の拷問者を裁判に付すことを要求する。
- 9、経済原則に基く農業の改編成、強制供出制度の廃止を要求する。
- 10、ノルマの廃止と賃金の正当な判定を要求する。
- 11、学校における歴史の授業は現実の政治と切り離して行われるべきことを要求する。

ミシニコルツ各高校学生会議

■十一月一日 木曜日

る。

8、政府はおそらく一九五七年一月末までに、いくつかの政党の参加する秘密普通選挙を声明しなければならぬ。

9、地方の軍勢力は評議会の監督下に組織されるべきである。

10、国民評議会が召集されるまで、大佐あるいはそれ以上の士官は組織されている国民評議会の承認のもとに指名されるであろう。

11、評議会は政府内部の変更が必要であると考える。われわれは政府のなかに自由の戦士の代表を入れることについて交渉するであろう。

12、ハンガリアは中立を宣言すべきである。

13、演説、新聞、宗教の自由が保証されなければならない。

14、もしも政府がこれらの要求を承認しなければ、トランス・ダニエーブ国民評議会は条件つきでも政府を承認しないであろう。いかなるものがあってもストライキは続行されるであろう。トランス・ダニエーブ国民評議会は新しい政府を組織するためにプタバエスト国民評議会との接触を確立した。この目的のために評議会の一代表が即刻イムレ・ナジのもとに派遣されるであろう。

二十三時三十五分 ミシニコルツ放送

われわれは政府が卒直に気がねなしにコツシュエート放送を通じて語ることを要求する。さもなければ、われわれは戦いを停止しないであろう。われわれはロシア軍隊が即時、実際にハンガリア撤退を開始するよう要求する。なぜなら、かれらが立ち去らぬ限り、貴重な血で染められたわが国の大地の上には秩序も静寂もないからである。われわれは政府をその行動によって判断する。言葉によってで

時間不明 ミシニコルツ放送

放送を聞いているスロヴァクとチェコの友人諸君、諸君がまだわれわれを理解せずにわれわれをポーランドの同志たちのように支持していないことがわれわれを苦しめている。われわれは諸君の援助と医療品に感謝する。……しかしながら、諸君の新聞がわれわれを非難の言葉で語っていることは遺憾の極みである。……

われわれは資本家や大地主の復活を望んでいない。われわれは貴族の旧ハンガリアを望んでいない。われわれは平等な権利をもって生活することを欲するのだ。われわれは生産物を自由に分配しうることを欲する。さらにわれわれは自由な民主主義的選挙を欲する。われわれは小農や中農や自由な自発的な基盤の上に設立されたあるいは設立されるであろうすべての集団農場を支持する。われわれは社会民主主義的な諸党、二度と再びわれわれ人民の要求に反対しないような諸党を欲する。……われわれは諸君もまたこのような線にそって考えているであろうということ、チェコスロヴァキアのラジオの中傷を信じないであろうということを確認する。

時間不明 ライク放送

同志諸君、もし共産党が指導的な役割を果そうと欲するならばハンガリア人民の正当な要求のすべてを今すぐ大声で語り、要求しなければならぬ。われわれは共産党がロシアおよび友好的な各国共産党に対し、ワルシャワ条約からのわが国の即時撤退と、わが国からのロシア軍の撤退を支持するように正式にかつ公然と要求する。ラコシの「サラミ戦術」は逆火を起し、破局をもたらした。なぜならそれは、人民の自由を削り取った。……ソヴェエト指導者はか

れらが軍隊を使用してわが国民の……信念を変えすることもできなければ、マルクスレーニン主義でハンガリア青年をロシア人につくり変えてしまうこともできないことを知るべきである。

十一月三日 土曜日

時間不明 ライク放送

ソビエト解放軍が一九四四年にハンガリア国境に到達したとき、すくなくとも国民の半数は共産党を信頼していたということをロシア人やその他海外の同志たちに説明する必要がある。ソヴィエト占領軍の行動のおかげで、われわれは次の自由選挙でたった六分の一の投票しか得られなかったということを平直に説明する必要がある。

今日、わが党は一切切が破産寸前にあるということ平直に海外の同志に告げよ。過去数日間の流血とロシア将校連による無責任な大衆の虐殺の結果として、われわれ共産主義者は一九四五年にわれわれが発したときよりも一層悪い状態に押し戻された。われわれの同志たちに新しい占領はハンガリアをしばらくの間ロシアの植民地として留まることを保証するかも知れぬが、新しいラコシあるいはゲレがモスクワに対してハンガリアの新しい共産党について報告することすら不可能であり、党費を出させることすら不可能であるということ知らせよ。しかし、マルクス・レーニン主義の高尚な教義は根柢すらこせす、わが国から失せるであらう。

十一月四日 日曜日

八時〇分 自由コツシュート放送

は連全世界はもとより全共産主義者にも、結局ソ連が共産主義に愛着しているのではなく、単にソ連軍国主義のために……共産主義を売物にしているのだということを悟らせたのである。……

しかし、われわれはまた裏切者たち……植民地支配者の汚い役割を演ずるヤノス・カダール一味について語らう……

われわれはかれらに、われわれがかれらを共産主義に対する裏切者と考えるとの声明を送った……

これらの悪党どもは、歴史的事件を偽り……一九四五年の事件だけでなく、昨日の事件やその前の事件をもごまかし、先週モスクワが全世界に嘘をついたごとく、血なまぐさい殺戮によって彼らがこの不幸な国を反革命分子から解放したとの嘘をついてラコシの仕事を続けるだろう。同志たちよ、われわれは真の共産主義者としての闘争を公然とまた非公然と両面にわたって続けよう。われわれはヤノス・カダールに釈明を求めようとはしない。何故なら彼の罪と彼の同類の罪は明らかであり、宣告はすでに発せられている。われわれハンガリアの共産主義者は宣告が実行されるのを注目しよう。時間不明

同志諸君、再び不幸なわが国において、血が流されている。ソヴィエト連邦の指導者は、スターリンとラコシのテロリスト的な植民地政策を復活させた。かれらは、われわれが友好的に交渉するようアップルをしてに、われわれを裏切った。かれらの戦車と大砲は、再び大虐殺を始めた。……このような残忍な行動によって、かれらは共産党が将来わが国で公然と誠実に存在することを不可能ならしめた。ヤノス・カダールとかれの組織した党は国民を愚ろうしようとするかも知れない。

自由コツシュート放送最後の言葉 SOS……受信者諸君！われわれは全聴取者の諸君に向けて、全世界のすべての著作家、科学協会、宗教指導者に対するハンガリア作家同盟の訴えを聞いて下さい。

われわれは諸君の援助を切望する。余裕はない。諸君は事実を知っている。今更説明の要はない。ハンガリアを救えハンガリア人民を救え！ハンガリアの農民、科学者、インテリを救え！ SOS SOS SOS

二十一時十五分 コツシュート放送

ハンガリア人民への訴え

十一月四日の事件はハンガリア国内の反動勢力の一掃に終わった。

反動革命勢力の先導となっていたイムレ・ナジ政府は解消した。

われわれは思まわしい反動勢力がいかに恐るべき方法で労働者革新青年、平和な民衆を処遇していたかということを知ることが出来る。民主ハンガリアの社会主義勢力は、助力のため招聘されたソ連部隊と協力して革命労働政府の着手した事業を献身的に完成せんとするものである。

十一月五日 月曜日

十八時三十分 自由ライク放送

何干という愛国者が戦車と大砲で殺されたが、……一方には残忍なソ連のテロ政府のサービスを受け入れた新しいラコシたるヤノシユ・カダールの指導下の裏切者たちがいる。

われわれはソ連の指導者たちについて語りべきことはほとんどない。ソ

しかし、ロシアの大砲がハンガリアにおける民主主義を破壊しつつあることは事実である。……占領軍といかなる方法によろうとも、いかなる党の名目によろうとも協力するものはハンガリアのみならず共産主義をも裏切るものである。われわれはかれらと戦うであらう。同志諸君、すべての誠実な共産主義者の場所はバリケードである。

十一月六日 火曜日

十二時 ラコツイ放送

ソ連兵士諸君、ハンガリア国民は占領者、暴虐に対して立ち上ったのである。われわれの間にはファシストはいない。国民全体が自由のために戦っている。諸君は労働者に対して戦っているということを知らないのだ。射たないでくれ。われわれの間にはファシストはいないのだ。諸君はわれわれの友であり、これからも友なのだ。これは宣伝ではない。真実なのである。

十八時三十分 ライク放送

同志諸君、ヤノス・カダールの偽共産党に即時、できれば指導的地位で参加し、全力を尽してこの偽共産党から真の共産党を作り出せ。この任務がいかに長びき、いかに困難なものであるろうとも、この党をハンガリア共産党に転化せよ。嫌悪や憎悪がいかにあろうとも、われわれは共産主義の虚偽の旗印のもとに、ラコシの後継者としてソ連の帝国主義に引き続き奉仕し、血をたらしつつ歴史上最も卑劣な虐殺をハンガリアで仕でかした者共からこの任命を受けた、破廉恥で裏切者のヤノス・カダールの党内に、われわれ真のハンガリア共産主義者は留まらねばならない。

十一月七日 水曜日

十一時十二分 自由ラコッイ放送

ハンガリアにいるソ連兵士へのアッピール……
兵士諸君！

諸君の国家は諸君が自由を得るために流血の闘争という代価物を払って樹立されたものである。今日あたかもこの革命の三十九周年記念日である。

何故に、君達はわれわれの自由を打ちくだこうとするのか？ 諸君は諸君に対して武器をとっている者が、工場所有者やブルジョアジーではなくてハンガリア人民であること、一九一七年に諸君がそのために闘ったのと同じ権利のために戦っている者たちであること、それを目撃してはいないか。

ソヴェエト兵士諸君！ スターリングラードでは君達は外国侵略者に対して君達の国を防衛し通すことができることを証明した。なぜ君達はわれわれが祖国を守りぬいでいることに驚いているのか？ 兵士諸君！ ハンガリア人民に対して武器をとるな！

十二時五分 ラコッイ放送

一九五六年十一月六日ケケケメト(ブタペスト南方六十哩)のソ連軍司令部代表が、次の通告を国民委員会と抵抗軍司令部に手渡した。私はドウナペントレの守備隊に武器を引き渡すよう呼びかける。

武器を引渡す者はすべて生命、自由、政治上の諸権利を全うしようであろう。守備隊が武器を引き渡さぬ場合、ソ連司令部は武力をもって同市を占領するであろう。戦闘終了後、兵士たちと民間人たるを問わず武器をとった者はすべて捕虜として取扱われるであろう。ドウナペントレ軍司令部と国民委員会はこの最後通牒に次の回答

を行った。

ドウナペントレはハンガリアで最も社会主義的な都市である。住民の大多数は労働者であり、権力は労働者の手中にある。十月二十三日の革命の勝利ののち、労働者は国民委員会を選出した。……都市の軍司令部は国民委員会に密接に協力した。……町の住民は武装されている。……住宅はすべて労働者自身によって建築されたものだ。……労働者はファシストの行きすぎから町を防衛するであろう。しかしソヴェエト軍からも防衛するであろう。われわれはソヴェエト・ロシアが、われわれの内政問題に干渉しない限りかれらと平和に生活する用意がある。工場の大多数は動いている。町にはいかなる反革命主義者もない。……

十一月八日 木曜日
九時〇分(自由) ライク放送

裏切者ヤノシ・カダルの約束に一顧も与るな。外国軍隊がわれわれの不運な祖国で集団虐殺を行なっているときに、共産主義の崇高な主張と主権が最も血なまぐさく、最も野蛮な方法で足下に踏みこみじられてはいるか？ といふこの時にあたって、カダル一味がハンガリアの主権を保証するだろなどと信じてはならない。だれがヤノシ・カダルとその一味をいゆる政府に任命したのか。主権を有するハンガリア人民か。それともわが国でその軍隊が数千の死体を踏みこみじっている外国占領軍どもであろうか。たとえ新しいラコシが彼の明らかに不実な約束を履行しようと思つたにしても、ソ連の指導者連中がそうする機会を許すといふことにどんな保証があるといふのか、ヤノシ・カダルの政府ではなくて、ソ連の指導部がわれわれの祖国の絶対者なのだ。わが祖国はまたしても植民地の状態に押し下げられているのである。……同志諸君、マルクスレーニン主義の闘争精神を持ち続けようではないか。社会主義、ハンガリア人民の独立のために、われわれの裏切られ、踏みこみじられた党の枠内で戦いを継続しようではないか。

ドキュメント 4

キリアン兵舎の日記

十月二十三日(十一月八日)

ペーテル・ゴズトニー

十月二十三日、火曜日

これは、ハンガリア革命全過程にわたるハンガリア一兵士の証言である

私は兵舎の当直であったが、ほとんど何もすることはなかった。P F二〇〇旅団(1)所属の技術部隊は朝いつもの時間通り作業に出でいき、後に残ったのは当直兵士と病人、民間従業員だけであった。昼近くなると、私は『自由青年』誌(2)に送ろうとしていた手紙の写しをとる時間さえあった。その手紙はスターリン市(3)という名称の変更を要求する全国的運動に加わるため三日前に採択されたわれわれの部隊の決議を報告するものであった。その会議で新しい社会主義都市はコシュエート市(4)と命名するよう要求することを私は依頼されていた。

午後の五時をまわったころ、バル・マルテル大佐(5)の命令で、ラヨス・デバ大尉(6)が部隊所属の全武器を集め、地下の空いている倉庫にしまった。この命令は何か異常なことが起りつつあるという最初の兆候であった。われわれがまだせせと武器を集めている

ときに、新しい次の命令が入った。市内は不隠状態にあり、部隊は直ちに作業地点から兵舎に戻るべし。そのすぐ後に、また新しい命令が来た。兵舎に戻ってから全員エルノ・ゲレ(7)のラジオ放送を聞くべし。

普段と違うこれらの命令は、市内に何か既に起ったか、もしくは起りつつあるといふことをわれわれのすべてが認るのに十分すぎるものであった。そこで、任務を解かれるとすぐ、私は他の非番の将校たちと一緒に興奮を覚えながら急いで兵舎を出た。いつもなら午後のこの時間には、ユロイウト地域は市内での労働を終えて家路をたどる人々で一杯なのだが、今日は違っていた。郊外へ向う市内電車は空っぽで、市内に行く車はひどく混んで、ドアのステップのところには人々はぶどうの房のようにぶら下がっていた。人混みに運ばれて、私はコシュエート広場に達した。そこで、私は何が起ったかを知った。人々はお互いに自分の知っていることを、早口で、支離滅裂でもあり、興奮して、熱狂的に話していた。そして、議事堂前をぎょしり埋めた大群集に巻き込まれたころには、ペトフィの銅像前で始まったデモやバーム広場で起った出来事についても私は知っ

ていた(8)。そしてここで、興奮して熱狂した人々にはさまれながら、私はイムレ・ナジの短い演説を聞いたし、また、ブタバストの人々が自由を要求して新聞やくず紙で作ったたいまつを燃やすのを見た。労働者も、学生も、兵士も……

■十月二十四日 水曜日

夜明けに、ラジオで私は起された。▲ファシスト、反動分子が公共建築物を攻撃し、また警察分署を攻撃した……▼私の時計では四時半だった。最初に私の頭に浮んだのは兵舎のことであった。ひどくあわてて服を着ながら、私は混乱した考えをめぐらしていた。兵舎に何が起っているのだろうか？ ファシスト、反動分子——昨夜のうちに何が起ったのだろうか？ マリ・ヤザイ通りは武装した車がひしめき走っていた。軽機関銃をもった将校や秘密警察員が通りをせかせかと駆けまわっており、また、なかには民間人のように服を着込んだ警察のスパイもいたが、彼等は一マイル先からでもそれと分るのだった。マルガレイト橋のペスト側の口に、三台のスターリン型ソヴィエト戦車が鉄道西駅を脅かすように砲門の狙いをつけて止まっていた。私は大通りにそって歩いていった。昨夜のうちに町の様相は完全に変ってしまった。駅の前には燃えた車の残骸が夜明けの闇に不気味な遺物のようにころがっていた。オクトゴン地域では、高級なジス型乗用車から銃と弾薬が配られていた。私はそのナンバー・プレートを見たが、それは大臣用の車であった。二十四時間前には誰が乗りまわしていたのだろうか？ 私は思ってしまった。マヤコフスキー通りの角では、一丁の銃が私の手に渡されてきた。誰がくれたものか、民間人だったのか、兵士だったのか、今だに私

にはわからない。

ニューズ映画館の方角から、ソヴィエト戦車が進んできた。ゆくり注意を配りながらこちら側へ向き、反対側へ向きを変え、そして銃弾をバラバラと浴びるのをわれわれは見たが、砲口はわれわれに狙いをつけたままで火は吐かなかった。ウエスレー通り地域では、人々ははがれた舗石や鉄レールでバリケードを築くの一生懸命働いていた。青年も少女も兵士も——将校も予備役も——中年の労働者も誰もが石やレンガを運ぶのに忙しかった。どこでもほほを赤く染めて、眼は輝いていた。

私がユロイウトに着いたのは九時五十分過ぎ、マリヤン兵舎のこわれた門はみずから事態を語っていた。サンドール・ラヨス・チバ大尉は何か起ったのかを話してくれた。サンドール通りの放送局周辺の戦闘の途中で、秘密警察が始めた虐殺に激怒した群集は、一番近いキリアン兵舎に銃と弾薬をとり押し寄せた。私の後で当直についてたボロス中尉はお手上げだった。空しく彼は、兵舎には武装部隊はいないし、武器は見つからないという返事をして返した。群集は正門をこわして入り、昨日われわれが集めた地下室の古い銃をかきつけ出し、それには弾薬はなかったのだが、持ち去ってしまった。衛兵は彼等を妨げることは出来なかったのか、あるいは妨げようとしなかったか？ 兵舎にいた者たちはものんきに構えて何もせずにはいたのではない。二百人あまりの兵士は、兵舎を後にして反乱に加わるために出ていった。兵舎は全く混乱してしまった。当直将校は兵舎司令官チバ大尉に電話し、間もなく彼はマルテルの副官ホルバート中佐と一緒に到着した。すぐ後にコシュエト陸軍士官学校から——マルテル大佐の命令で——士官

学校生徒部隊が——銃はもって、しかし弾薬はもたず——兵舎の民間人を追い出すために到着した。そしてくり返し長々と討論し説得して——しかし暴力なしに彼等はその任務を朝までには完遂したのであった。

私が兵舎に着いたときには、再び完全な混乱が起っていた。チバ大尉は国防省の管轄部門に電話をして指示と情報を求めたが、それは何の役にもたらず、ただ非公式で意味のない返答を得ただけであった。兵舎の中には武器と名のつくものは何もなかった。ただ待ってもしられなかったので、われわれは探しに出かけた。ほんのちよっとの間に、二、三丁のライフルと小型機関銃と少量の弾薬とを附近の反乱者から手に入れることに成功、これらは将校たちに配った。そうこうするうちに、年配の曹長の一人は、ラコシの鎌と槌の軍章を帽子からむしりとり、帽子の中に長年隠しておいたコシュエトの紋章をつけた。

兵舎と反乱者との関係は朝のあいだに良くなっていた。数多くの見知らぬ反乱者が銃の使い方や弾のこめ方を教わりにやってきた。兵舎の興奮はその極に達し、誰もが何かをし、行動する要求に燃えていたが、われわれはしばらくの間、戦闘には介入しないことにした。将校は、現在は中立にとどまった方が良いと決めていた。われわれはコシュエト放送が動揺し混乱し、狂いじみて驚き口ごもっているのこの決定を確認していた。昼頃になって、われわれはオルチイ通りの方角からモーターの音、というよりむしろ地響きの音を聞いた。その地鳴りはだんだん大きくなって一瞬の後、一台のソヴィエト戦車が兵舎の前に現われた。向い側の家から火えんびんが投げられたが、狙いははずれて舗道で爆発し、わずかな損害しか与えな

かった。戦車は止まり、火えんびんの投げられた家の方へ向きを変えて銃弾の雨を浴びせた。家の中の反乱者は銃火とさらに火えんびんで応えた。そこへ、もう一台の戦車がペトフィ橋の方角から四方を見境もなく砲撃しながら全速力でやってきた。スピードが出ていたので操縦兵は十字路で止めることができず、火の海の中にいた初めの戦車に衝突し、その片側のキョタピラーをこわした。こうして一台の戦車は動かすことができなくなり、ほのおにつつまれた。もう一台は、相手を助ける道はなく自分も同様の運命に落ち入ってしまったと見てとって、初めの戦車が恐ろしい爆発で粉みじん吹飛ばした。ほんの一瞬逃げだす次第となった。

だが、これはほんの始まりであった。何台も何台もの武装車がどんどんこの兵舎の近辺に向って進んできた。しかも今度は彼等は機関銃に援護されてやってきたので、十字路に達することには成功した。けれども、そのなかの一台といえども火えんびんの壁を破ることはできなかつた。そこで他に方法も見つからないので、彼等はリリオム通りの角まで後退して、近くの家々や兵舎とその向い側の家を見張っていた。向う側の家の反乱者は弾幕の張られている中で機関銃を組み立てて、ライフルや機関銃火、火えんびんの雨で応戦していた。この戦闘はおよそ三十分間続いたが、ロシア人が後退した時には、われわれには、フェレンツールコルト地域向きの庭に二、三人の負傷者と一人の死者さえいた。チバ大尉の指令で、われわれは兵舎内に医務曹長のベルコヴァイツ、ミュラーという予備役の男それに市電の運転手のM・P夫人とで救助部隊を組織した。昼飯のベルが鳴るのを聞いたときにはわれわれはあきれたが、さらにはやはり妨げとなつたに違いない銃火にもかかわらず厨房スタッフが食

事を用意したのを見ても驚いたのであった。われわれの兵士は、出来事を興奮して眺めていたが、どちらの側につきともなくいた者たちであり、彼らは食堂へ降りてきた。食料があるというニュースはもれたとみえて、やがて反乱者の一団が門のところへきて彼等も何か食べるものをもらえらうかと訊ねた。そのとき、私は門の衛兵であったが、腹の空いた武装反乱者を食堂へ行かせた。彼等がわれわれの仲間と一緒に席についたかつかぬうちに、政治将校でよく最近一二六旅団から転任してきたばかりで、われわれみんなに憎まれていたサボ大尉が、走って私のところへやってきた。

—— 気でも狂ったのかね、中尉？ 君は知っているだろう、この奴等は……

—— 腹が空いているのです、大尉—— 私は答えた—— 台所には食料が沢山あります。

—— それは問題じゃない—— サボ大尉は顔を土気色にしてわめいた—— 彼等はわれわれの敵なのだ！ 彼等に食料をやって助けなけりゃならんとも思うのかね！ お前は免官だ。

もちろん、私は自分の部署にとどまった。われわれは、昨晚彼と他の政治将校が一つにかたまっていたから、彼には何の注意も払わなかったのである。夜遅くなって、私は自分の部隊のところへいったが、少年兵士たちは興奮しながら今日の出来事を論議していた。

■十月二十五日 木曜日

彼等は一晚中兵舎に砲撃を続けた。

しかし、向い側の家はロシア人ではなく、反乱者が占拠して

だった。コールマンが、自分の分捕った銃を彼等に渡したとき、私もついていって、彼等がわずかな弾薬を使い果たすのを見ていたが、連中は反乱者を射つ代りに空に向けて弾を射った。

われわれはいぜんとして悪魔のごとき深い海から脱け出せなかった。チバ大尉は国防省に再び電話して助けを求めた。そこではマルテル大佐が責任将校で任務についており、彼はわれわれの絶望的な状況を聞くと午前中に自分でくと約束した。その間に、反乱者はわれわれに対する全力攻撃は止めたものの、ずっと機関銃とライフルの射撃は続いていた。しかしながら、われわれはソヴィエト軍の行動については何の情報ももっていなかった。われわれは何かが行進中であると感じていたが……

突然、中庭の内側と外側の方向から銃声が聞えた。反乱者の一団が作業員通用口から建物に入ってきたのであった(15)。コールマン中尉は小部隊をひきいて戦いに出た。彼は四階の部下に命令を下し、ふいに彼の機関銃は火をふき始めた。間もなく、二人の兵士が一人の少年の死体を運んできた。私は彼の身分証明書を見たが、年は十七でガンズ工場(15)の若い労働者で技術見習であった。これらの連中がわれわれが聞かされている「ファシスト」なのだろうか？ だが私には考えている時間はなかった。どこかで一発銃声がし、コールマンが飛び出したので、私は押しのけて出た。

—— 今度は私に行かせてくれ！ 私は叫んで、答えを待たずに四階まで駆け上った。また殺されたのか？ いやきと違う—— 私は自分にいいかかせた。一人だけで十分だ。私は反乱者が気づかぬうちに近づいていった。彼もやはり若い労働者で知的な顔と眼をしていた。彼は私が攻撃する意志がないのを見て近づかせた。私は兵舎

た。つまり、これはサボ大尉の無知も味方のせいである。彼は昨日の反乱者が食事に来たという事件に満足しておらず、同志たちと連絡をきくとしたに違いない。そして、真夜中近くになると、同類である彼とコールマン中尉その他二、三人の政治将校は兵舎の門のすぐ内側にライフルをもって隠れた。こうして歩いてくる反乱者の歩哨を脅かし武装解除して、当時警察から回してあった四人護送車に閉じ込めるのに彼等は成功した。そして反乱者は、これに気づいて大部隊を送ってきたが、サボ大尉とその同志はこれを捕えようとしたので、小銃の火ぶたが切られた。サボはどうと倒れ、他の連中は逃げ出した。

戦闘が始まった。附近の全反乱者部隊に、キリアン兵舎は秘密警察が占領して、反乱者は建物の中に閉じこめられているというデマが流れた。朝までに、われわれは反乱者の攻撃を四方から受けていた。

サボ大尉の門の部署はコールマン中尉が占めていた。彼の位置はうらやましいものではなかった。彼にはほとんど弾薬は残っておらず、彼の仲間も一人一人と彼を見捨てていった。補強の望みも弾薬の追加の望みもなかった。兵舎内の砲兵将校は助けもなかったし、事実、彼等は反乱者に対して武器は使わないと卒直に叫んでいた。コールマンは自分の援護を兵士にさせようと努めていたが、わずかな成功しかえていなかった。ほとんどの者はとうの昔に反乱者について戦うために出ていってしまし、残っている者は消極的で、人民に反対して戦うのを拒否していた。そこで、コールマンは最近兵舎にきたチェルペル工場の共産党員を選んで、彼の援護を求めた。私はこれらの少年を知っており、彼等が応じないことは確か

の防備は数において優っており、命を無駄に危険にさらすことはいのだと説明した。彼はそれを理解し、私と握手をして、作業員通用口の方へ注意を配りながら退いていった。

私が四階から降りてくるまでに、看護兵はコールマンを運んできた。小型機関銃の一弾が頭に命中し、彼は望みを絶たれていた。残酷に聞えるかもしれないが、誰も彼を可愛想だとは思わなかった。自らそれを求めたのであったから。

突然、地響きがあった。これは三四型戦車(16)がナジバラド広場の方角から近づいてきていたのである。これらにはハンガリア軍のマークがあり、兵舎に到着したときには、反乱者は射撃を止めた。一台の戦車は向きを変えて門の方にバックし、そこからマルテル大佐が降りてきた。彼はチバ大尉を迎えられて報告を受けた。その他の戦車は兵舎の前に位置を占めて、向い側のコルバン・ミューズに火をふいた。反乱者も銃火で応え、たちまち戦闘はたけなわになった。

チバ大尉は何が起きたかを詳細にマルテル大佐に説明した。そこで、マルテルは国防省に電話をし、長い間話をした(17)。そして、チバ大尉が兵舎に捕虜がいると報告すると彼等に会いたいといいた。捕まえられた反乱者が連れてこられたときに、マルテルは戦車に砲火を止めるように命令した。彼は門の内側の伝令室で捕虜に会った。彼の眼は、一人の若い、明るい非常に知的な顔の男に止った。彼はその男の名前や職業、どうやって銃を手に入れたか、何故武装蜂起に加わっているのか？ などを訊ねた。若い男は、極めて正直に答え、その答えには不確実さや恐怖の跡もなかった。身近な個人的質問は次第次第に政治的分野にまで移っていった。その少年

は、ハンガリアの生活水準や、紙の上だけに存在する自由などに
いて話した。また、過去二、三年間裏切られ抑圧されてきたパトリ
オチズムについても語った。さらに、ここ二日の間に反乱者のなか
に広められた十六項目の要求について述べた。項目の一つを思い出
せなかったときに彼は、ポケットに手を入れて——奇妙な対称だ
が——古ぼけた共産党々員証の頁の間から十六項目の要求書を取り
出したのであった。

一瞬重苦しい沈黙がすべてを支配し、まるで、誰にももう疑問も
なく、それ以上の説明は必要でないかのようであった。マルテル大
佐は立ち上り、われわれを捕虜と一緒に室の外へ送り出した。中
から、彼が電話で誰かと話しているのが聞えた。

しばらくたって、彼はわれわれを呼び戻し、さっき話しをした反
乱者の方へ向いた。

——聞いてほしい。私は君と君の仲間を釈放しよう。反乱者のと
ころへ戻りたまえ。私が停戦を申し出ていると伝えてくれ。われわ
れはみな同じハンガリア人だ。私は反乱者を射ちたくないし、君達
もわれわれを射ちほしくないだろう。わかっただかね？

少年ははつきりと軍隊式に答えた——わかりました。

——くり返すが——マルテルはいった——誰も射ち合わない、わ
れわれも、君達も。

そして、彼はその若い反乱者と握手した。これは私が生涯決して
忘れることのない瞬間であった。

ついにお互いを認め合った人々の厳肅なこの沈黙を破って電話の
ベルが鳴り響いた。それはコシュニート陸軍士官学校からで、彼等は
士官学校生徒部隊をキリアン兵舎に送ったが、リリオム通りとツツ

顔が見えた。どこの窓も開け放たれ、笑いと歓呼の声を上げ喜んで
民間人と反乱者とがわれわれを見下していた。われわれは何も説明
する必要はなかった。士官学校生徒は元きた方へ戻っていったし、
われわれは兵舎に帰っていった。

その頃には、ユロイウトには附近の家々から武装した反乱者や武
器をもたない民間人の大群集が集まっていた。その中に、まわりの
すべての人よりも頭一つ高くマルテル大佐が立っていた。誰もが笑
っており、人々はわれわれを幸せな喜びの顔で迎えた。そしてわれ
われはマルテル大佐と話したがっているのを見ると、われわれを通
すように分れて道を開けた。私は任務を遂行したことを報告した。
白い布がまだ私の後ではためていたので、群集は耳が聞えなくなる
ほどにやんやとはやした。そのとき不意に、一人の若い男が人垣を
かきわけてマルテルの方に進んできた。手には明らかに自製と思え
るコシュニートの紋章を持っていた。彼は兵舎の正面のラコシの軍章
のところに飾ることを認めるよう大佐に要求した。マルテルは笑っ
て兵士に合図した。すぐに二人の兵士が、ここ数年兵舎を支配して
いた金属製のラコシ軍章をつるはしでこわしにかかり、たちまちそ
こにコシュニートの紋章がとりつけられた。それは明かに素人の作っ
たものと分ったが、しかしそれだけに一層その重要性を増している
ように思われた。その重要性は、まるで、兵舎の巨大な建物がその
後に完全に見えなくなると思われるほどであった。

マルテル大佐の高いやや前かがみの姿は群集の中に塔のように立
っていた。彼は笑い話をし、質問に答えていた。人混みの中から誰
かが大きな声で質問をすると、マルテルもまた声を高く張り上げて
答えた。

ルト通りの角で止められてしまい、銃撃戦が反乱者の間に起ってい
るといふ報告であった。士官学校はマルテル大佐に戦車を使ってキ
リアン兵舎への道を開くようにと要請した。マルテルはしばらく黙
って聞いていたが、突然話をさげぎっていった。

——キリアン兵舎周辺の状況は私の責任であり、すぐに平静と秩
序が保たれましょう。部下を戻すように命令しなさい、同志中佐！
何かの理由で、電話の接続が切れてしまって、線の向うからは何
の応えもなかった。

——O・K それなら自分で彼等に話をしよう——マルテルは受話
器を置きながらいった。彼はパトリック隊を組織するように指令し
た。それは反乱者のところへ行行って、休戦について知らせ捕虜が
伝えた連絡を確認することであった。私はコシュニート士官学校生徒
に彼の命令を伝える任務を与えられた。われわれはツゾルト通りに
面した門から通りへ出る——当然武器はもたずに——、しかしほう
きの柄に白い布をゆわえていくようにいわれた。街路は空っぽで
何も見えず聞えなかった。トンパ通りの角で、われわれはどんな危
険がひそんでいるか分らぬバリケードにぶつかつた。私は深い沈黙
を破って叫んだが、声は興奮してしわがれていった。

——使いの者だ！ 射つな！ 伝言だ！

私の叫び声は通りの沈黙の中に消えてしまつて、何も聞えず、私
の隣りの兵士が振っている白い布のはためく音だけがした。私の心
臓は喉のあたりでどきどきいい、額は興奮で汗がびっしょりであつ
た。私は自分の足許もよく見えない状態で以然として人影のないバ
リケードに近づいていった。やつと、コシュニート士官学校生徒がそ
の後から現われて、重苦しい沈黙が破れ、四方から笑いと安心した

——仲間であるハンガリア人よ！ われわれはみんな同じことを
求めている、自由で、独立した社会主義ハンガリアを。これには、
すべてのハンガリアを愛する人の支持が必要なのだ！

彼は民間人や武装反乱者に四方から取り囲まれている。みんなは
彼に握手をし、喝采を浴びせ、抱きかかえ、使いはやつとのこと
舎に戻る道を開くことができる。人々の幸福感はいい表わせないほ
どである。兵舎の門からあまり遠くない所では、一人の老女が舗道
の端に立って、ハンカチで涙をぬぐい、腕の中に顔を隠して、すす
り泣いている。一人の老人——フランツタット地域(18)の労働者ら
しいが、彼女に近づいて、こういうのが私に聞える。

——さあ泣くのじゃない、エルジ！ 泣くんじゃないよ！
しかし、私が見ると、彼もまたこぶしを上げて、涙をこすつてい
る。彼等に背を向けて門を入りながら、私も涙が自分のほほを伝い
口の中でしょうばいと感じている。私は、姿勢を正し、しっかりと
足音を響かせて歩く。私の手はポケットの中でハンカチを探してい
る。

午後になって、われわれは武装反乱者の代表の訪問を受ける。彼
等は司令官に会見を求め、兵舎が必要としているものを知りたがっ
ている。パンが欠乏していたのでわれわれはそう答える。夕方にな
ると、一台のバスが新鮮なパンを積んで中庭に入ってくる。それは
また新聞も運んできたが、われわれの一番好きな新聞は「イガザ
グ」(真実)紙でその勇敢な論調のためである。しかし、われわれ
はほとんど読む時間はなく、街路に出ていく。何故なら、ここそ
がここ二、三日の間、国の生命が集約されている場所だったからで
ある。

■十月二十六日 金曜日

ソヴィエト戦車は早朝から、三、四台かたまって攻撃を続けている。歩兵はいない。彼等は、兵舎に、向い側の建物に、ユロイウトの家々に、大通りに砲弾をぶち込んでいる。無差別であり、特に目標は定めていないように思える。しかし、彼等は窓の後や屋根の煙突の後に隠れている反乱者に対してはお手上げである。どちらを向いても、彼等は、モロトフカクテルと銃火の雨を浴びる。街路を震わしながら、彼等は機関銃弾を打ち込み、砲弾で壁をぶちこわしている。反乱者の銃火はだんだん強まり、ソヴィエト戦車もそれに応戦する。彼等の大砲は休むことなく砲撃を加え、一発射つたびに、厚い壁や柱がぐずれ落ちこわれる。医療部隊は疲れを知らずに働いている。

昼までにはわれわれにはかなり多数の負傷者が出たが、次々に兵士は銃の戦列に参加していく。彼等には指揮官はいないし、誰も命令を出さない。彼等はライフルや軽機関銃をもって進んで戦闘に加わっている。興奮と憤激とが、兵士の間に高まり燃え上がっている。

——これが奴等のいう友情なのか？ 何もかも粉々にこわしやがって？ ブタペストを再建したのは奴等の大砲の的にするためだったのか？

マルテル大佐は深く憂慮している。ソヴィエト戦車が再び新たな力をもたって攻撃してきたので、彼は国防省に電話する。そして大臣との話を求めている。私は彼の側に立っているのので、受話器からかすかにもれている答えがはつきり聞える。マルテルは熱心に訴えているが、声の調子は確固として落ち着いている。

——これがブタペストに秩序を回復する政府のやり方ですか？

——彼は戦闘の耳をろうする銃弾の音の中で叫んでいる。その音は電話線の向う側でも聞えたに違いない。彼はこの附近で作戦中の戦車を撤退させるようにソヴィエト司令部に介入せよと大臣に要求する。大臣の返答は、勇気づけるものというにはほど遠い。

——申し訳ないが同志大佐。私はソヴィエト陸軍の作戦に干渉できる位置にはないので……。

マルテルの表情はこわばるが、自分を押さえて、声は一層確固としたものになる。一語一語しっかりと聞き取りと発音する。

——その場合には、閣下、私はキリアン兵舎の射程内に入った最初の戦車から砲火を開くであろうと報告しておきます。

それがすべてであった。賭はなされたのである。

われわれは武器と弾薬を集めてみる。どちらも多くはない。二、三丁のライフルと二、三丁の小型機関銃があるだけで、機関銃もなく手榴弾もなく、火えんびんさえもっていない。マルテルは、銃をもっている者を建物の様々な地点で部署に着くように命令する。ライフルをもっている者は戦車の展望鏡を射つ役目で、小型機関銃をもつ者は戦車に援護されてくるかもしれない歩兵部隊を注意する役目である。同時に、Tに率いられたパトリール隊がツゾルト通りの門から兵舎を離れ、反乱者に武器を要請しに出かける。

午後になり、ソヴィエト軍の攻撃が少し止む。われわれは二、三丁のライフルと少量の弾薬を手に入れたことができたし、パトリール隊はまた火えんびんを持ってきた。これらでわれわれは攻撃を迎えうつのである。

夕方近くにになり、一人のソヴィエト軍少佐がマルテル大佐に電話

してくる(22)。彼は報告を求める。ファシストや資本主義者の話ができる。マルテルは全く平静であり、ソヴィエト少佐に説明しようとする。この附近ではファシストにも資本主義者にも自分はあつたことがない。もしもソヴィエトの同志が戦車を撤退させ、建物の無分別な破壊をやめるならば、直ちに平静さと秩序は回復するであろう。終始彼は、努めて平静で礼儀正しく話をする。

この日は、もはやわれわれの地域内にはソヴィエト戦車はこない。

■十月二十七日 土曜日

マルテル大佐は、最も緊急な組織的任務を見ているので、一瞬の平静さも役に立つ。過去二、三日の出来事は、兵舎の日課を完全に狂わしてしまった。武器をもたない者や中立にとどまっている者は建物の後の一階におり、武器をとっている者は三つの小連隊に分けられた。マルテルは不意の攻撃の場合に備えて三つの中庭全ブロックを占めた。この間に、われわれは一台の壊れた戦車からゴリューン式機関銃を救出し利用することができたので、それを兵舎の作戦上最も有効な地点、フェレンツコルトとユロイウトの角に組み立てた。また、われわれは正門やその他の入口に土のうやタンクスその他動かすことのできる物を使ってバリケードを築いた。

この日、平静さはほんの昼まで続いた。正午に、極めて強力なソヴィエト戦車連隊が反乱者と同様にわれわれをも攻撃始めた。コルヴァンミニューズ地域の反乱者は信じられぬほどの戦果を上げ、リリオム通りとユロイウトの間の区域は文字通り戦車の墓場となった。しかし、われわれの少年たちもよくやった。兵舎のフェレンツコルト

ト側では、戦車を一台と武装車を二台ダウンさせた。看護兵はわれわれの仲間とともに負傷したソヴィエト兵士も運んできた。始め、彼等は非常にびくびくしており、口を開こうともしなかった。しかし、われわれが彼等を自分たちの仲間と同じように取り扱ひ、危害を加える意図がないのを見て、言葉を思い出したか、もしもわれわれの手に落ちればどんな羽目になるか彼等の指揮官の語ったことを話し出した。

午後になり、われわれは最初の地方の人と接触した。年とった一人の農夫が馬車で到着し戦士にと食料を運んできた。彼は無口であり、まるで前線を通り抜けて運んでくるのは自分にとって極めて当然なことのように振舞った。

——あなたがたに食料が足らんと聞いたんで、少し持ってこようと思つたのさ。これしか助けであげることができんのでね。

夜遅くなつて、マルテルは一人のソヴィエト将校から電話を受けた。そのソヴィエト将校は兵士としての名譽にかけて訴え、兵舎の前に横たわっている負傷者と死者を運ぶ許可を求めた。マルテルは、負傷者についてはわれわれが運んであること、彼等は適切な処置を受けていること、そして戦闘状態が終わったら関係当局に引き渡すはずであることを彼に知らせた。死者に関しては——彼はいった——この暗闇では壊れた戦車から死体を収容するのは困難である。

■十月二十八日 日曜日

朝、パトリール任務中のイルス大尉が負傷したソヴィエト将校に降伏するよう呼びかけていて射たれて死んだ。後でその将校は結局

降伏したが、彼に質問をした結果、ルーミア駐留のソヴィエト戦車連隊所屬であること、プタペストのニュースが届いてからここに送られてきたことが明らかになった。彼は処刑されると思つて恐怖で震えていた。われわれは、何の危害も受けないと彼を安心させた。彼は少し落ち着いたが、しかし、自分の殺したイルス大尉が四人の子供を遺し、一九四五年以来共産党員であつたことを聞く、くずおれて泣き出した。

ソヴィエト軍は休みなく攻撃し、戦車をどんどん戦闘に送りこんできた。ユロイウトの区域のヴァレリア喫茶店の前から、一二三ミリ砲二門が兵舎の一角を壊そうと狙つて射つてゐる。多分彼等はそこに機関銃が隠されているのを見つけて、沈黙させようとしている。しかしながら、彼等の試みは、手遅れにならぬうちにわれわれの兵士が逃げだしたので失敗する。そのうちにソヴィエト戦車二台がコルヴァン・ミューズ部隊の火えんびんで爆破される。

午後、われわれはイムレ・ナジの戦闘中止の声明を聞いた。街路は人々で埋まり、喜びにあふれた男女が未来を話し合い、計画を語つてゐる。また壊れたソヴィエト戦車を調べたりしてゐる。

マルテル大佐はコルヴァン・ミューズの指揮官ジェルジエリ・ポングラスと連絡がつき彼をキリアン兵舎に招いた。しかしポングラスはまだ疑いをもつていて、副指揮官を送つてよこしマルテルが代りにくるように頼んだ。マルテルは承諾し、反乱者と二時間以上にわたつて過した。

戦闘の小康状態は兵舎に面白い客人をもたらしした。それはホルテイ陸軍当時のK・K大佐でわれわれを助けようとしてきたのであつた。彼はチバ大尉に、自分は経験をつんだ兵士であること、その

べてを考慮して二、三日の間は彼を閉じ込めておくのが一番良いことだと決定したのである。

午前中に、マルテルは將校会議を召集した。状況の概況を述べ、われわれ一人一人の任務を話した後でいふた。私は昼夜通して任務につく用意のある將校を必要としてゐる。現在われわれは休んでゐる時間はない。私もハンガリアからソヴィエト兵士が撤退してしまふまでは兵舎にとどまるであらう！ 家庭の事情その他の理由でこの任務につけないと感じている者には二週間の休暇を与えよう。二、三の者はこの申出を受けたが、圧倒的な大多数の者は残るほうを選んだ。

われわれは兵士を検閲することにした。マルテルは恐怖心の少ない、また銃の扱い方を知つてゐる兵士だけを求めていた。それに多勢いる未訓練の新兵には休暇を与えるのが一番良いように思われた。午前中ずつと、われわれは外出許可証を書き出すので忙しかつたが、まもなく、われわれの実兵力は五百人の新兵までにへつた。この残つた者たちで、われわれは三部隊を編成したが、チェベルからの百五十人の一部隊だけにしか武器を給与することはできなかった。残る二部隊にはこわれた石を取り払う任務が与えられた。マルテルはB大尉を武装部隊の指揮官に、ジョーゾ・フィスコ少尉を兵舎の守備隊指揮官に任命した。

その間に、街頭の興奮はまた高まつてゐた。イムレ・ナジの停戦声明にもかかわらず、四台のソヴィエト戦車がユロイウトに近づきつつあつた。群集はその進路をふさいだ。戦車は止まり、塔乗兵は言葉と身振りによつて自分たちは敵ではないと説明した。しばらくたつと、彼等は進んで降伏して戦車を渡したので、反乱者はロシ

上に、階級が上であるから当然自分がこの兵舎の司令官となるべきことをいつてのけた。そこでチバ大尉は實際尊敬に値するほどの忍耐強さでこう説明した、御老人が兵役を退かれてから時代は變つたのであり、残された一番良い道は、兵舎を出て家にお帰りになることである。

■十月二十九日 月曜日

夜明けに、コルヴァン・ミューズの指揮官ジェルジエリ・ポングラスが二、三人の反乱者と一緒に来た。彼らはマルテル大佐との会談を求めた。彼等は一人の若い男を引き合わせたが、彼の舌は秘密警察によつて尋問の途中でカミソリの刃で切りとられてしまつてゐた。また、彼等は論議すべき問題ももつてゐた。休戦の結果、コルヴァン・ミューズ部隊の兵員が増えて、そのため混乱と不和の兆が見える。ポングラスはマルテル大佐に助言と援助を求めた。マルテルはチバ大尉と一緒にミューズへ出かけていふたが、そこで彼は、軍事大臣ヤンザ(23)の使者ヴァラディイ少将がポングラスと話し合うためにすでに到着してゐるのを知つた。

マルテルとチバが兵舎に帰つてきたとき、昨日われわれが如才なく追い返した大佐を彼等が連れてきたので私は驚いた。しかし、チバ大尉が彼を自分で独房へ連れていくのを見てはそう驚かなかつた。それに、大佐は昨夜兵舎を出てからコルヴァン・ミューズへ行き、われわれが彼を助言者としてよこしたといふたことも明らかになつてゐた。当然のことながら、反乱者もわれわれ以上には彼の助言なるものに関心をよせず、マルテルが着いたので、彼を引渡した。彼がまっすぐに家へ帰るのを拒んだので、わが司令官は、す

ア兵士を自由にした。

やがて、われわれはハンガリア人やまた多くの外国人の新聞記者やカメラマンにつかまつた。彼等は写真をとり映画を撮し、われわれに教えきれない質問をした。有名なハンニア・スタジオの監督は助手たちと兵舎の前で仕事をし、フランスからのテレビの記者はユロイウトの角に。しばらくするとみんな中へ入つてきた。キリアン兵舎の前の群集は一分ごとに増えてきた。彼らはマルテルに歓呼の声を上げ、軍事大臣に任命されるべきだと要求した。マルテル大佐はそれらを受け流そうとし、門に止まつてゐる彼の戦車の大砲に入々が月桂冠をつけようとしてゐるのをまざるで止めさせたいほどにも見えた。

食料は増えていたので、どうすべきかをわれわれは考えていた。一日中、国内のあらゆる地方から馬車や荷車が到着し、リードや肉や家畜類を運んできたが、生きてゐる豚までが一匹生産者協同組合のトラックターでとどけられた。最初の赤十字物資もオーストリアから届いた。いわし、チョコレート、チーズ、マーガリン、煙草など。彼等は次のような千金の値をもつ言葉とともに食料を渡してくれた。これは兵舎にです。あなたがたはわれわれのために戦つてくれたのです、少くともこれだけがわれわれにできることです。われわれの食堂は今や反乱者にも食事を食べさせてゐる。コックやその助手たちはまかなうことができる以上を手にかかえてゐる。しかしそれはほんの短い間にすぎない。附近の家の婦人や少女たちが頼まれないのによつてきて、戦士のために休みなく働いてゐる。誰もが助けてくれ、何かをすることができて幸福である。

■十月三十日 火曜日

朝、不思議なものがユロイウトのあたりを歩いていた。ナジヴァラド広場の方角から武装反乱者が二人の男を引っぱって行く。彼等の両手は背中にまわされ、胸には大きなカードがかかっている。私は革命主義者ではない。けちな泥棒です！

われわれにはすることが沢山あるが、今日は比較的平穏に過ぎている。チバ大尉はコルヴァン・ミューズから六人の囚人を連れてきた。これらの連中は——ほとんど秘密警察員だが——彼等の事件が審理されるまでわれわれのところにいる方が安全だとチバは考えている。われわれは彼等に何の世話もやきたくないの、K・K大佐と一緒に閉じ込めざるをえない。

われわれは、マルテル大佐の防衛隊を編成する。彼の室の前を警備し、彼が兵舎を出る場合につきそって行くのである。D大尉はチエベル部隊の指揮官に、L・N曹長は副指揮官に任命される。われわれはマルテルの防衛隊を増やすため、反乱者の一団を投入する。

夜の七時、政府は、マルテル大佐にある電話番号の所に電話する。電話番号である。彼等はマルテルに議事堂へ来るようにと要求し、彼を乗せていくので車を送ってよこす。彼が戻ってきたのは真夜中をずっと過ぎてからである。彼はイムレ・ナジおよびゾルタン・テイルデイと会談し、多分、国防大臣代理に任命されることになる。とわれわれに話す。また、秩序の回復が、ソヴィエト軍の撤退に関する限り決定的な重要性をもつがために、最も緊急な任務であると説明する。そして、明日キリアン兵舎で武装部隊の総会議を開くので大きな室を準備するようにとの命令を出す。

は国家防衛隊として連合せよという政府の希望を表明したとき、は、全く激しい討論がまき起り、それは個人的な口論に落ちていった。ポングラスは、二人のコルヴァン・ミューズの反乱者を武装解除し叩きのめし閉じ込めたといつてマルテルを非難した。一人の色白な、やや理想主義的に見える青年は、ヨゼフ・デユダス(26)のグループの代表が会議に招請されていなかったというに反対を申し立てた。マルテルは簡潔に要点を答えた。

——私は二人の反乱者を叩きのめしたことを否定しはしない。それにまた、彼等を閉じ込めたことも事実である。しかし、ここであなた方みんなの前でいわせてほしい、私は、その男が武器を持っていようがいまいが、もしもその男のポケットに金時計や指輪を見つけたならば、そんな悪党は誰でも叩きのめして閉じ込めてしまおう！それに、君、若い君へ答えよう——彼はその色白の青年に向かっていった——私は自分でヨゼフ・デユダスをこの会議に招請した。だが、もしも彼がこない方を選んだのなら、理由は彼に聞いた方がよい！

散会する前に、会議は一つの決議を採択した。各代表は次のイムレ・ナジの提案に賛成した。十一月一日に武装部隊は国家防衛軍に編入されること、身分証明書が最初に、制服はその後で給与される、というものである。

この日、まるでキリアン兵舎は首都の注視の焦点であるかのよう思われた。会議が終わったときにも、さらに多くの代表がマルテルとの話し合いを望んで到着した。助言を求めにであり、あるいは命令を求めにであり、あるいは新しい党を結成する計画を立てて、彼の意見を聞くための設立規約草案をもってきていた。マルテルはタ

■十月三十一日 水曜日

朝の五時に、エズエルゴム戦車連隊指揮官のメセリ大佐は兵舎に報告をよこす。彼は自分と連隊の助力を申し出る。すぐ後に、マチヤスホルド空港指揮官は命令を求めて報告してくる。六時に、われわれはラジオを通じて空軍の参謀幕僚が革命を支持すると誓約したことを聞く。ラジオ及び通信士官学校は放送車とそれを動かす二人の者を送ってくる。これでわれわれは空港との接触を確実にでき、偵察パトロールは二時間おきに報告を送ってくる。

われわれは軍服から肩章をとり去る、そして新しい紋章をカラーにつける(24)。コシユートの紋章が一体全体どこから現われたかは神だけが知っていることで、多分、百周年記念祝典(25)からしまっておいたものであろう。兵士たちはお互いの手からもぎ取るようにしながら、それを、帽子に、捨てたラコシの軍章のあとへとめつける。

武装部隊会議への最初の代表は十時を過ぎてから着く。彼等は市内中から来る——ガンズ造船、ゴム工業、鉄道西駅の代表、それに反乱者の代表はゼナトルトンパ、コルバン・ミューズから。ハンガリア作家協会もまた代表を送る。会議場の入口には、武装兵士一人と武装反乱者一人とが警備の榮をになう。マルテル大佐、ベラ・キラリ、コパチ警察大佐、コヴァチ少将、ズス大佐や二、三の高官たちは十一時近くに着く。会議は、マルテル大佐、ジェルジュリ・ポングラス、ベラ・キラリ、コパチ、ヴァラディ、コヴァチ、ホルヴァート大将を議長団に選出する。

会議はえんえん五時間以上続いた。今では戦闘は終わっており、したがって意見の相違の兆が表われた。ベラ・キラリが、全武装部隊イブで打った紙を読み始めた。そして、文章の一方所でちよっと止まった。

——これが何を意味するかいってほしい。われわれはキリスト教を全教派とも支持する。これは君達がイスラム教や仏教を支持するのを拒否するといふ意味なのかね？

——しかし同志大佐、ハンガリアにはイスラム教徒や仏教徒はいません！

——確かにそうだ——マルテルは答えた——しかし、例えばユダヤ人は誰でも知っているようにキリスト教徒ではない。もしも、まだ気の狂ったファシストがうるついでに、彼等はこの文章をこんな意味にしてしまふよ。ユダヤ人を殺せ！

——しかし、それはわれわれの意図したことはないんで……すべてのととした方がよい。そう、規約でこういうのだ、われわれはすべての宗教を支持する。どうですか？

マルテルのエネルギーは無限なように思われた。彼は兵舎で起るすべてから眼をはなさず、一番最後に寝て、一番最初に起きた。未来に対する希望と確信に満ちており彼は分裂を寄せつけない統合力をもっていた。

■十一月一日 木曜日

午前中、私は官倉の指揮をとった——ほんの一時的で、二、三時間E中尉に代ったのであった。しかし、これは、私にとってキリアン兵舎の囚人を知る機会となった。当時、たった十八人の囚人がいた。ほとんどは秘密警察の将校で、二、三人ロシア人通訳がいた。ロシア人は自分から来たのであった。また、二人の泥棒がおり、反

乱者が商店のウィンドーを荒しているところを捕まえてきたのである。共産党は全国本部の党役人高官も一人いた。囚人の大部分は、反乱者のパトロール隊が連れてきたのであり、一人ならず怒り狂った群集にリンチされるのを救われていた。数人の者は負傷しており、われわれの看護兵に手当てを受けていた。すべての者はわれわれの兵士と同じように食事と煙草を与えられていた。彼等のなかでの年配者は秘密警察少将ジュラ・チキで、彼はサンドール・ロナイ(28)のボディ・ガードを勤めていた。彼はまた、共産党本部とマリ・ヤザイ通りの秘密警察本部を結ぶ地下通路があることを確認した。彼は、自分が秘密警察本部とバラント・パシ通り二十五番地とを結ぶ地下通路を五、六回通ったことがあるといい、議事堂と党のアカデミア通り本部とを結ぶ同じような地下通路があることも知っていた。囚人の中では、共産党役人フェヘルが最もインテリであるように思われた。つまり、革命の後に確立される制度において、恐怖を感じなければならぬ者は、ただ、過去多年の間残酷と殺人行為に手をかして、ハンガリア人民に多大の害悪を与え裏切ってきた者たちだけであるということ、それを彼は早くから認識していた。

午後、私は、マルテル大佐の事務室で働くようにまわされた。始めは、マルテルの副官の一人として仕事を助けたのであったが、それから新設された事務室の責任者に任命された。われわれは新しい国家防衛隊証明書を発行し始め、報告を読み、聞き、命令を伝達した。例えば、第九地区評議会はユロイウトの辺りにあるソヴィエト戦車の残骸や瓦礫をどかすので、われわれに援助を求めた。チバ大尉はメセリ大佐と戦車の撤去について検討した。それからま

た、ガラス屋が来て彼等は喜んで兵舎や周辺の建物の窓ガラスを入れ代えたいのだがといった。しかしそれは全国的なストライキを破ることに等しくなる。そこでわれわれは、仕事を許す許可を与え、彼等がスト破りではないと証明する書類を出した。こうして、▲前将校▽(30)や▲友人・知人▽の波が押し寄せ、みんな▲バル・マルテル▽と話すことを望んでいた。

マルテル大佐は驚くべき記憶力をもっている。彼は誰でも覚えており、相手に応じて誰をも扱かう。苦情をいい、近い将来幸運な時期に名誉回復つまり復職を要請する者たちには、われわれと話をさせ、そして、もう少しひまな時にもう一度来るようにと彼の▲友人▽に伝えるようにと彼は頼む。しかし国家防衛隊指揮官だけはいつでも彼と会うことが許されている。私はここでゼナトル反乱者部隊の伝説的指揮官アンクル・ザボに会った。彼の沈着な決定はすべての人に深い印象を与えていた。

私のこの新しい任務の最初の日に、イギリス陸軍武官カウリイ大佐は兵舎を訪れ、軍事大臣代理マルテル(31)との会談を求めた。彼等は通訳の助けをかりておよそ二十分ぐらひ話し合った。

■十一月二日 金曜日

マルテルは一日中議事堂で過し、ソヴィエト軍隊の撤退に関してイムレ・ナジと話し合っていた。代表たちや、野次馬、新聞記者、ニュース・カメラマンなどが兵舎にだれれ込んで来た。仕事は山のようにあり、すべてがスムーズに流れるようにわれわれは最大の努力をした。われわれは物資の貯蔵保管にまで手をつけ始めた。われわれに送られてきた食料や衣料を保管しておくことは全くやっかい

な問題だった。

午後、マルテルはチバ大尉に電話して、夜に客を連れて帰ること、ソヴィエト同志との話し合いはうまくいっていること、平和的協定に近づきつつあることを伝えた。その時に、彼は少将に昇進したことを自分ではいかなかったが、われわれはラジオで知る。

マルテルが夜遅くコヴァチ少将とズス大佐と一緒に兵舎に戻ってきたときには、われわれはすでに、ソヴィエト軍隊がブタペストに向って進んでいるという事実を知っている。それでもまだマルテルは希望をすてていない。しかし、ソヴィエト軍隊が、首都に次第に近づきつつあるという報告を受ける度に、彼の顔に暗い影が横切っ

て走る。マチオスホルド空港からの報告は警戒の度を増してくる。ざわめきの間から、われわれは未来について話し始める。ハンガ

リアの未来を。
——われわれは社会主義ハンガリアを求めている——マルテルはいう。誰にもそれを疑わせない。そうだ、われわれは社会主義ハンガリアを求めている。たとえ一部の紳士方がこの考えを好きにならな

いとしてもだ——彼はつけ加える——われわれは土地を、工場を、銀行をその元の所有者に返しはしない。ハンガリア人民はこれまで十分すぎるほど長い間抑圧されて利用されてきた。今やわれわれ自身の独立した国家を建設する時が来たのだ。その最初の任務は、秩序を回復し、労働を再開し、平穏と静寂を確保することである。これこそが、ソヴィエト軍に影響を及ぼせる唯一の道なのである——彼は続ける。
チバ大尉は多分ソヴィエト軍の進軍を一番心配している。マルテルは彼を安心させようとする。

——もうすでにハンガリアにおけるソヴィエト陸軍の実兵力は、われわれに対抗する行動に必要な兵力をはるかに越えている。私の意見では、彼等は西欧側に示すためにその戦力を展開しているのだ。戦争計画ではなく多分ただスエズのためにであり、力の誇示である。われわれにとつて最も重要なのは、ただの一発でも停戦を破ってはならないということである。そのようなわれわれの失策は、はかり知れない結果をもたらすだろう。冷静にみていなければならず、沈着な考慮と注意が必要である。

私はこの会話を結んだコヴァチ少将の言葉を決して忘れない。

——キリアン兵舎を必ず守ろう。やっとな今日この国の基盤が強固にきつかれたのだ!

■十一月三日 土曜日

朝早く、ゾルタン・ティディがマルテルに電話をかけ、議事堂へ来てマリーニン中佐指揮のソヴィエト陸軍代表と話し合うように要請した。正午、われわれは最高会議常任幹部会がマルテルを国防相に任命したことを知った。また、彼が、ソヴィエト軍の撤退の詳細についてソヴィエト軍司令部と話し合うための政府代表団々長に任命されたこと、さらに今朝の会談は友好的雰囲気のうちに行なわれ、成功であったということも知った。原則の基本的問題に関する決定がすでになされているといううわさも流れていた。

夕方、マルテルは兵舎に帰ってきた。彼はチバ大尉に前述の会談の時間を示した。それにはマリーニン中佐の署名があった。

——今夜われわれはもう一つだけ話し合う——マルテルはいった——トコルのソヴィエト軍司令部で撤退に関する詳細を検討するこ

とになっている。しかしもはやのり越えなければならぬ障害はない。

夜の八時に、マルテルは附近に駐留する国家防衛隊連隊の指揮官を召集した。全員一緒に夕食をとった。マルテルは相変らず樂觀的であったが、他の者は心配しているように思われた。チバ大尉がその心配を口に出した。

——それで、もしこのトコルへの呼び出しがわなだとしたら、同志少将？ もしもあなたを逮捕したり、監禁したらどうします？

マルテルはかすかにためらいを見せたあとで答えた。

——いや、私はそんなことを信じることはできない……けれども……わからないことだね、歴史に始めてのことでもない。確かにロシアの歴史では始めてではない。けれど、たとえそうだととしても、行くのが私の義務なのだ。君達はこのにいなければならぬ。警戒を怠らず、注意するように。それが私のために行動してくれることなのだ。

これらは、彼のわれわれに対する最後の言葉となった。九時二、三分前に、彼は政府が寄こしたボベダ型自動車にのり込んでいった。

私は兵舎を巡回して兵士を眺めてきた。労働者兵舎の文化ホールでは映画が上映されていた。歩哨任務の者を除いてはすべての者がそこに集っていた。どこも平穏で静寂であった。市内も同様に平穏で静寂であった。国家防衛隊のパトロール隊ですら少なく、ただ武装した一団が街路に見え隠れしていた。この十日間で初めて私は着ているものを脱いで、眠りについたが、それは真夜中を過ぎていたに違いない。

正面の向い側の廊下には十人ないし十二人の半分着物をきかけた死体を私は見る。B大尉が私の腕をつかむ。

——ここにいてくれ、こちら側の廊下の防衛をみてくれ。私は向い側の建物に行かなければならない。

——どうしたんだ？——私は思い切って訊ねた——ロシア人はどこにいるんだ？

——建物の中だ。夜明けに連中は歩哨を脅かして、正面をぶち破り、中庭に二台の機関銃座をすえつけたんだ。

——門の歩哨は？

——みんな殺されたよ、可愛想に。みんな。ロシア人は向い側の廊下に一べんに砲火を浴びせたんで、銃声を聞いて走り出てきた者はたばたば倒れたんだ。門を注意しろ！——彼は肩越しに叫ぶと急いで走り去った。

ロシア人の白砲弾は廊下に命中する。死者の数は増している。首と頭に傷を負う。われわれには実際負傷者というのはいない、ただ死者だけだ。私はコルヴァン・ミューズの銃声を聞きわけようと耳をそばだてる。あそこでは何が起ってしまったのだろうか？ その方角からは何の音もしない。市内には、国内には何が起っているのだろうか？ 世界では何が起っているだろうか？ これは黙認されてしまうのだろうか？ 一国家全体の意志、自由を簡単に無視できるのだろうか？

国際連合という組織は……いろいろな考えが心にひらめいては過ぎた。

チバ大尉は電話をかけている。議事堂にかけ、メセリの事務室にかける。軍事省では当直将校だけが答えに出る。ソヴィエト軍隊が

十一月四日 日曜日

私がライフルの銃声で目がさめたのはまだ暁闇のうちであった。静かな日でも銃声を聞くのには慣れっこになっていたので、それほど気にもかけなかった。しかし、ほどなく、大きな爆発音が窓を震わせた。白砲砲火だ！——私は考えて、着物に飛び込むようにしながら、ほとんど無意識のうちにラジオを手にした。ラジオから流れる声と中庭からの機関銃音とが私の耳にとびこんだ。イムレ・ナジが話していた。▲わが軍は戦鬪に入っている。政府はその位置を保っている。この国の人民と世界の世論にこの事実を知ってもらいたい！▼……そして同じ放送が英語、仏語、独語でつづき、最後にもう一度ハンガリア語でいった。▲こちらはイムレ・ナジ……

マルテルは！——それが私の心をかすめた。マルテルはどこだろう？……そして私の疑問に答えるかのように、ラジオはマルテルを呼んでいる。▲国家政府首相は国防大臣マルテル、参謀総長イストヴァン・コヴァチを召集する……ただちに報告をしその任務を果すように！▼

考えにふけっている時間はない。私は小型機関銃をつかむと、窓にはい寄る。夜明けの灰色の暗のなかに、私ははっきりと兵舎の前にソヴィエト戦車がずらりと整列しているのを見ることができた。数え終る前に、それらはわれわれの建物の正面に向かって弾幕砲火を吹く。注意しながら私は室からすべり出て、二階まで駆け下り、マルテルの事務室の扉を通りすぎる。防衛部隊の兵士は廊下の銃口部署についている。B大尉は静かな落ち着いた声で命令を出している。兵士たちは兵舎の正門に機関銃とライフル銃を浴びせている。

建物を占拠してしまったという。ヤッとチバは、ホルヴァート少将を電話につかまえる。ホルヴァートはロシア人と話し合うようにせよと助言する。それから、大尉がナジヴァラド広場のどこから兵舎に電話してくる。煙草屋からかけている。彼はキリアン兵舎に帰ることが出来ない。全区域はロシア人で一杯で戦車隊がユロイウトに沿って市の中心に向かって進んでいる。彼はすでに五十台を数えている。彼は命令を求めている……

ロシア人は新たなしい戦力で攻撃してくる。窓から銃弾の雨が降る。私のとなり立っていた若い反乱者のはどを押さえる。銃を落し、ゆっくりと壁にそってくず折れる。指の後から血が泉のように吹き出す。私は壁にびったりくっついて、銃を前に狙いつけ、中庭に向かって発射する。ロシア人は移動を始める。一階の廊下をはうようにして通る人影が見える。彼等は階段に向かって進んでくる。

B大尉が戻ってくる。

——一階にはわれわれの兵士は誰も残っていない。ロシア人がみんな打ち殺してしまった——彼は息を切らしながら囁く。

フィスコ少佐は反撃を始める。一階の裏側からロシア人をタイムング良く脅かそうとする。正門を奪い返す考えである。手榴弾が爆発し、ロシア人の攻撃を食い止める。しかし少佐と彼の部下は中庭に防衛地点を作らなければならない。ここから、彼等は門の内側にすえてある機関銃を射撃する。新しい白砲弾の波が押し寄せる。ロシア人は、悪魔のごとく巧みに射ち込み、砲弾は中庭に一つづつ、まるで予じめ落下地点が決まっているかのように命中する。フィスコ少佐は退却を余儀なくさせられる。始めは部下の退却。中庭をはうように走り戻るのを援護する。しかし、その時、砲弾の破片が当る。

われわれには彼がまだ生きているのが分る。不意に二、三秒続く小休止を利用して、われわれの白衣の赤十字看護兵は彼に走り寄り、安全な所まで引きずってこようとする。一台のロシアの機関銃が二人の命を絶つてしまふ。

今、午前十一時。

フェレンツコルトの方角からロシア人が二階に上ってきたので、われわれは三階に退却しなければならぬ。武器をもっていないわれわれの同志も一緒に逃げる。やっとこの時になってわれわれは武器が不足しているだけでなく、弾薬も少なくなっていることに気がつく。ロシア人は絶えまなく臼砲砲火をわれわれに浴びせているが、歩兵部隊はその攻撃を再開していない。われわれの銃火はだんだん弱まってくる。われわれが奪っておいた機関銃はこれこれ一時間半あまり沈黙している。われわれは緊急会議を開く。事実には直面する時である。われわれは兵舎を退かなければならない。武器と弾薬だけを外に持出すことができる。もしここにどまればロシア人は火を放ち煙り出しにかかるだろう。フェレンツヴァロス地域まで行けば、反乱軍と国家防衛部隊に合流することができる。キリアン兵舎の裏側はせまい小さなツゾルト通りに面しており、今、ここから逃げ出さなければならぬ。二人の兵士が進んで偵察に出かけ、道は開いているか、背後のロシア人はまだ大丈夫か？ 見に行く。残ったわれわれは毛布やシーツを集め、丈夫なロープを作って窓からたらず。彼等は周囲を注意し、そして手を振った。道には誰もいない、出ても良い。

始めに負傷者を下ろし、それから一人一人伝わって下りる。十人が通りに出たので、彼等は他の者たちの降りるのを援護する位置につ

れない。この事態を、ただ黙認していることなどできないはずだから！ そうだ、できないはずだ！

■十一月五日 月曜日

朝は静かだ。時折りロシア戦車が大通りを震わせて通る。ばらばらと銃声がかかる……そして消える。電気はつかず、水は出ない。ソヴィエト軍があらゆる公共サービスを止めたという。トンパ通りからの通信では国連が介入することに決定したといっている。一軒の家で鉱石ラジオをわれわれは見つける。外国放送は聞くことはできないが、不意にブルノク放送が入ってくる。カダール・ムニツヒの傀儡政府の組閣の放送……そして愉しげなダンス音楽が続く。彼等は何がそう楽しいのだろうか？ 崩壊や虐殺行為だ？

午後もまた静寂であるが、われわれは平隠にはなれない。兵舎を奪い返そう！ 私の一団と国家防衛隊一連隊とはキリアン兵舎の裏側に向って進んでいく。お互いを援護し合い、建物に近づくまでは窓を注意して見ていく。ロシア人の影すらない。ただ死んだ兵士だけが残っている。ハンガリア人もロシア人も。そしてわれわれは食料をツゾルト通りへ運んでいく。そこで兵士たちはその近くの人々に食料を配給することにする。人々はもう何日も食べていない。

私は二階に上ってマルテル大佐の事務室に入っていきたい気持ちを押さえることができない。彼の机は手を触れられていない。私のもそのままで。私は鍵を持っていないので、引き出しを破り、見つけた資料をみんなストープに投げ込む。その紙にマッチで火をつけている時間はない。もうソヴィエト砲手が射撃を再開している。彼等は今までよりもずっと残虐に執ように砲撃する。多分われわれの行

く。しかし周囲は静かで、ロシア人は狭いわき道に入っようとはしない。砲弾は次第にひんばんに落ちてくる。射程距離から十分に離れるまで、われわれは急がなければならない。

私は建物に最後まで残っているうちの一人である。二、三人の者はまだ街路に居るが、他の者は危険を避けて附近の家の中に隠れる。チバ大尉はまだ兵舎に居るが(32)、待っている時間はない。一団の兵士たちでわれわれはアンジャール通りへ退却する。ここで、われわれはペトフィ橋の片岸に陣地をもつプリサバ部隊所属の砲兵中尉に出会う。彼から、この突然の裏切りの攻撃の詳細を聞く。ロシア戦車が戦列を組み、進軍し出すのを、彼等は何もせず見送らなければならなかった。彼等は、ソヴィエト部隊が発砲しない限りは射ってならぬという命令を受けていたためであった。このため、ソヴィエト戦車は攻撃を受けずにやすやすと橋を渡って、兵舎のまわりに陣形を組んだのであった。

われわれは一軒の家に、そこからなら兵舎が見えるので攻撃地点を作る。そしてそこで弾薬や、石油とびんの補給も受けた。モロトフカクテルをこしらえて、ロシア人の攻撃をわれわれは待った。彼等が来るだろうとわれわれは確信していたが、事実は来なかった。午後になっても、夜一晩中まっても来なかった。彼等は以前として狭いわき道に入ってきたしなかった。それとも彼等は戦力の増強をしていたのだろうか？ われわれの見張りは、大通りにロシア戦車が一杯なので、フェレンツトンパ通りの反乱者から、ハレル広場のロシア歩兵部隊は行動を起そうと待機しているとのニュースが入った。もっとも多くのニュースが入ってきた。国連安全保障理事会は開かれている。今この瞬間にも状況に決定的な変化が起るかも知

動に気づいて、兵舎に砲火を集中しているのである。砲兵中尉が一階から叫んでいる。

——みな殺しにされる前にここを逃げ出そう。奴等は建物全体をこっ破をみじんに吹きとばすつもりだよ！

われわれは急いで退く。救い出せなかった食料の残りを気にしている。けれども死者は出なかったし、一人の負傷者もわれわれにはいない。

だが、キリアン兵舎の運命は決まってしまった。ロシア人は朝までつづいて砲火を浴びせた。そしてフェレンツコルト側は火を出し裏側の一角はくずれおちた。あれほど厚い壁もロシア人の暴虐さには勝てなかったのである。

■十一月六日 火曜日

われわれは建物の中に釘づけにされている。外部の世界との接触などは不可能である。昨夜は、二人の兵士が負傷し、老人が腹に一発受けて通りから運び込まれてきた。病院なら、彼等は助かるかもしれないが、誰がこのまた激しくなった地獄の砲火をくぐって運んでいけるだろうか？ 二人の兵士はうわ言を云う。ロシア人が路地に向って進んでくる。戦力の補強を受けたのかあるいはもはや反乱者を危険でないと考えているのである。しかし、第一回の攻撃は失敗する。トンパ通りの角で彼等是一台戦車を失う。国家防衛隊は以前として防衛線を保持している。

ゆっくりと次第次第に、彼等はアンジャール通りに近づく。トンパ通りの角から、一台のJ・V・スターリン型戦車が建物の窓に機関銃攻撃をかけている間に、仲間の戦車が注意を配りながら進んでく

る。そのキャタピラが、われわれのいる家の前をがたがた音を立てて通る。この時、反対側のビルからモロトフカクテルを誰か投げた。しかし、びんは戦車の背中をすべって、後方で爆発する。われわれは機関銃でやっつけようとするが、無駄である。戦車は音を立てて行く。

やがて、通り全体が重砲火を浴びる。ロシア人は反乱の中心を壊滅させようとしている。昨夜のうちに兵士が投入されている。一台の戦車が彼等先導して、もう三台が十歩ほど後から援護している。街路には血が流れ、壁に近く道路の両脇をソヴィエト兵士がひっきりなしに歩いていく。

これで終りだ。
家の中から一発銃声が出る。われわれは無力な住民を残虐の危険にさらしている。

■十一月七日 水曜日

今日ロシア人はキリアン兵舎を占拠した。われわれは窓から歩兵部隊が裏門から建物に入るのを眺めていた。後で聞いたところによると、彼等はハンガリア人のようにハンガリア語を話すロシア人將校に導かれていたという。彼等は何の抵抗にもあわなかったが、無意味な銃撃をやって、五、六人民間人を負傷させた。しばらくたって彼等は火えんびんを戦車に投げた二十才ぐらいの少女を通りから連れてきた。監禁してから、兵舎の中庭で彼等は彼女を処刑した。その他多勢の者が同じように殺されたのである。

■十一月八日 木曜日

戦闘は終わったように思われる。われわれはこの家の人々から民間

人の服を手に入れたので、通りへ出て行くことが出来る。昨晚、この附近でロシア人パトリックがハンガリア兵士を捕まえた。彼等は武器を持っていなかったけれどもロシア人に連れていかれてしまった。彼等の死体が今朝通りで見つかった……

四年の長い年月……

しかし、これらの思い出は私にとってまるで革命が昨日のことのように生々しい。自分の目撃した出来事を書くにあたって、私はいつも大事にしまっておく日記をある不思議なねたましさをもって見なかつた。もしも記述に誤りがあればそれは時間が経ったためではなく、むしろ私の知識が限られていたためである。以上が、私がキリアン兵舎の中でハンガリア革命を見て経験した事実なのである。多分、われわれが共に生きてきたその日々について誰か他の者が話すであろうし、またわれわれの歴史のこの一コマを歴史家として述べるであろう……

正義と自由を求めたわれわれの闘争に栄光あれ、ハンガリア革命よ、永遠にわれらの前に明るく輝いてあれ……

△原註▽

ビニール・ゴストニーは、一九五三年ブダペストのカール・マルクス経済大学で前学業を終了し、ハンガリア軍予備役將校の地位をえ、予備役將校として一九五六年八月キリアン兵舎に配属された。パル・マルテルと共に革命に参加、革命後は西欧に亡命した。

(1) P F 二二〇〇旅団およびその各部隊は一九五四～五年にかけてソヴィエト式に編成され、徴兵年令の青年は、労働力不足を補うために人民経済の様々な分野で使役されることになつた。

たダンテ少佐の後任として、兵舎指揮官に任命された。

(7) エルノ・ゲレは一九五六年七月マチアス・ラコシからハンガリア共産党第一書記の地位を奪い取ったが、最も過激なハンガリア・スターリニストの一人である。五六年十月二十三日夕方、ラジオを通じて人民の反抗的ムードに大いに貢献したところの極めて挑発的な演説を行った。この演説から、ハンガリア人は、モスクワから押しつけられた楽観主義者の指導者からは何一つ期待できないのであり、自ら立ち上がらなければならぬことを理解した。

(8) 五六年十月二十三日午後、ポーランドの事件のニュースを受けて、ハンガリア大学生は、一八四八～四九年の独立戦争の指導者の一人でありポーランドの血統をひくヨーゼフ・ベームの銅像に向って、ポーランド青年の運動に同情を表明すべく行進した。ベーム広場におけるデモは革命の諸事件の鎮の重要な一つの輪をなしており、立ち上る決意が生じたのはここであつたと云つても過言ではない。

(9) AVOの本部はマリ・ヤザイ広場に立っていた。

(10) 反乱者は——他の武器をもつていなかった。ソヴィエト戦車に対して火えんびん、あるいは革命の期間中われわれが呼んだ「モロトフ・カクテル」を用いて戦った。それらは手製で、普通のびんから極めて簡単にできたが、使うにはかなりの技術を要し、またすばらしい戦果を上げた。

(11) 私はこれらの出来事をこのように詳細に記述したのは、これがキリアン兵舎附近における最初の戦闘行為だったためである。

(12) 死んだ將校のヴァルカ中尉はキリアン兵舎の所属隊員ではなかつた。彼は多分われわれに加わる途中ソヴィエト戦車に対す

た。地方の部隊は主として炭鉱で、首都の部隊は建設作業に働いた。彼等の装備は十分ではなく、実戦的な軍事教練は何一つ受けなかつた。

(2) 『自由青年』誌は共産主義青年同盟の公式機関紙である。

(3) スターリン市はダニユブ河岸ブダペスト南方の新しい社会主義都市であり、小さなハンガリア農村に建設された。旧名はドウナベントレ。今日では約三万の人口をもつ重要な重工業の中心地である。一九五六年にはハンガリア人に関係のある名称を市に与えよと一つの運動が起つた。

(4) ラヨス・コシュトは国際的にも有名な自由のための戦士であり、ハプスブルグ王朝の独裁に反抗する一八四八年～四九年のハンガリア独立戦争の指導者であつた。ハンガリアの歴史におけるほとんどの伝説的英雄。

(5) パル・マルテルは一九二〇年カッサに生れる。父親は法学校でその息子に啓蒙的な教育を授けた。一九四二年マルテルはブダペスト陸軍士官学校で中尉、その後まもなく、ロシア戦線に従軍、そこで四年捕虜となり、ソヴィエト軍に組織される「アントイファ」学校に送られ、その後バルチザンに参加。四年ハンガリア共産党入党、ハンガリア民主軍隊で重要な地位に任命。四八～四九年ゾルタン・ティルディ大統領のポディ・ガード指揮官、四九年ブダペスト戦車連隊司令官。五一年国防省の一ポストを与えられ、五四年補助技術部隊司令官に任命さる。一九五八年六月六日カダール政府に対する裏切りの廉により革命の首相イレム・ナジヤ他の革命指導者らと共に処刑された。

(6) ラヨス・チバ大尉は、一九五六年十月初旬、P F 二二〇〇旅団司令官パル・マルテル大佐により、義務怠慢のため免官され

- る戦闘に巻き込まれた。頭部は機関銃弾ではぐり開いていたが、彼はライフルをしっかりと握っていたので、われわれはやつのことで手から離すことができた。認識票から、彼は二十才で、二ヶ月前に中尉になったことをわれわれは確認した。
- (13) 政治将校は、軍隊における共産党の統制機関であった。彼等は部隊におけるイデオロギー教育の責任を負っていた。一般的に彼等は心の底からみんなに憎まれていた。
- (14) キリアン兵舎は大きなビルの一フロックであったが、民間作業員の一棟も付属していた。
- (15) ガンズ工場は最も古いハンガリア工業企業の一つである。その電気モーターおよび器具とで国際的に知られている。
- (16) T三四型はやや小型で旧式のソヴィエト戦車である。ハンガリア軍隊は大半がこれで装備されていた。
- (17) 彼は国防省の作戦本部長キンドロヴィチ少佐と話をした(ラヨス・チバの情報による)。
- (18) フランツスタットはフェレンツヴァヨスの旧名。ブダペストの一地区で主に労働者の居住区である。
- (19) 革命的日刊紙がこの間発行されていた。
- (20) ▲モロトフ・カクテル▼という火えんびんは通常、それも大量に、家の屋上や窓から下を通る戦車に向けて投げこまれた。このためその戦果は極めて大きかった。
- (21) ソヴィエト軍規では、市街戦においては戦車は歩兵を伴わなければならないと規定している。将校たちが無保護の戦車を死に送っていると気づきながらも、歩兵なしに何故戦車を投入したのかは、このハンガリア革命の一つの謎である。
- (22) 革命の期間のブダペストにおける一つの奇蹟は電話通信網が最後まで破壊されずつづいたことである。キリアン兵舎の番号

- を知っている者なら誰でも、首都のどの場所からでも、たとえ戦闘の真っ只中においてさえわれわれと連絡をとることができた。
- (23) 国防大臣カロイ・ヤンザは、ラコシ一派の支配の時代にハンガリア軍首脳部の一人となり、軍部のスターリニスト・グループに属していた。
- (24) ハンガリア兵士は——ソヴィエト式で——形肩章を着けていた。これはハンガリアの伝統とは異なっており、ソヴィエトの影響の印であり兵士たちはしばしば恥かしく思っていた。
- (25) 一八四八年の独立戦争の百周年祝賀式は、一九四八年に行なわれた。この祝典で誰もがコツシュエートの紋章をつけた。一八四八年の革命の象徴で赤白の縞模様を二重十字である。
- (26) ヨゼフ・デムダは反乱者グループの指揮者で、革命の敗北の後に処刑された。
- (27) 私のこの報告の目的は、革命に関してハンガリアで出版された宣伝文書と論争を始めることではない。それでもなお私はここで述べておきたい。国家検察官イストヴァン・サハカデイおよびAVO中尉バル・フォードルは囚人として捕えられたことは全くなかった。ハンガリア政府白書によれば(原書第二巻一五五および一五七頁)十一月四日われわれが連中を処刑させるために反乱者に手渡したと責めている。
- (28) サンドール・ラノイはハンガリア社会民主党的指導者の一人であった。労働者諸政党的合併により(一九四八年)彼はラコシ一派の従僕として様々な高い地位をえた。現在ではハンガリア議会の議長である。
- (29) チバ大尉の命令でラファイ中尉は十一月三日キリアン兵舎の全囚人をブダペスト警察本部に移送した。そこで調書をとって

- から彼等は釈放された。十一月四日にはキリアン兵舎にはただ一人K・K大佐が捕えられており、彼もロシア人が攻撃をかけたときに衛兵が釈放した。
- (30) ▲前将校▼とはスターリン・ラコシ恐怖がその頂点に達したとき軍隊から免官された民主的将校のことである。
- (31) 最初に公式にバル・マルテルを国防大臣に任命したのはイムレ・ナジではなく、ハンガリア人民共和国議長イストヴァン・ドビであり、彼は現在もなおその地位を保っている(マジヤールホンヴェド紙一九五六年十一月一日および三日号)
- (32) 私は後になってチバ大尉とその部下は第三中庭に向けて退却したと知った。
- (33) F・F警視の証人記録による。

(The Review; No. 6 より本誌編集部訳出)

ハンガリア革命の分析

広田 広

本稿は62年十一月二日東京で開かれた「ロシア革命45周年・ハンガリア革命6周年記念講演集」(主催・革命的共産主義者同盟)での講演速記に加筆されたものである。(編集部)

I 革命の偽造と忘却

まずハンガリアの闘いが、ハンガリア労働者のあの革命的な峰起が、現存の世界の支配者たち、帝国主義者あるいはスターリン主義者たちからどのように受け取られているかというところから私の話を進めてみたいと思うのです。

まずクレムリンのフルシチョフ、みずからスターリンの忠実な弟子であると宣言しているフルシチョフを中心とするクレムリン官僚達、あるいは共産党の指導部、あるいは日本共産党の指導部そういった連中は一体どう見ていたかということをおは暴露していきたい。

日本共産党書記長官本顕治は、「一九五七年当時『中央公論』(スターリン批判以後一年)で次のようにいっています。

部分が労働者の革命的蜂起の側についていたこと、多くの共産党員が『反乱』の側にいたこと、自発的に結成されていた労働者革命評議会をソ連軍とカダル現首相が解散させたこと、これらの事実を口をつぐんでいる官本顕治とそ一人よがりといわなければならぬ。この反労働者のな、革命を反『革命』といくめる『一人よがり』について、充分あばかなければならない。ここでは、特に、労働者評議会の結成とカダル政府による解体とに焦点をあてて語らうと思えます。

まず日本共産党中央委員会宣伝教育部編の「ハンガリー問題と共産主義」(新日本出版社)をみてみよう。

「労働者評議会は、ハンガリー暴動の混乱のために、政府の統制力がなくなつたときに各工場で生れたものです。——しかし、評議会のメンバーは、民主的に選ばれたものよりも、動乱中に勝手に作られたものが多く、その評議員も昔の株主だとか、反動的な連中でした。——(カダルの)政令では、工場労働者評議会は、政府の経済行政の諮問機関で、労働組合とは別のものです。これに地域の機関が作られると、それは政府の地方機関または正式の地方行政機関と権限が重なることになり、なぜならば勝手に工場労働者評議会代表で地域的な機関を作り、そこが各工場に指令をだすようになると、その行政機関と同じ権限を持つことになつて政府の指令系統がみだれます。まして中央労評などが勝手に作られたならば中央政区が二つあるようになるでしょう。

ブタペスト中央労働者評議会はそうした地域的な機関として工場労働者評議会代表が勝手に作つたもので政府はそれを承認したわけではありません。実質的に工場労働者評議会の代表だから交

「ハンガリー問題の内部的な要因の検討だけにとどまるのは正しくない。ハンガリー問題は日本では一般にはUPやAPの電報で報道され、ソヴェトがただハンガリー人に弾圧を加えた、軍事干渉をしたということだけが強調されるわけです。だからわれわれ共産主義者がこの問題を日本の現実であつかうていく場合には、内部的な弱点を誰がどう流血事件にみちびいたか、という真相を、特に強調しなければならなくなるのです。内部問題の教訓だけにとどまれば、一人よがりのことになってしまふわけです。」

これだけしかいっていない。そのうえ、内部的な要因の検討がないのに、「だけにとどまるのは正しくない」というのです。ハンガリアの労働者がどうしていたのかという内部的な要因の検討もせず、ファシスト分子の革命的暴動だといって歴史を偽造するわけです。「内部的な弱点」がどんなものであったのかについても語らない。ソ連軍とハンガリアの国家保安警備が、幾十万のハンガリアの労働者人民を虐殺し、死傷させたという真相を語らない。そして、革命的暴動だということを強調しているのです。ハンガリア軍の大

渉の相手としてみとめていたので—革命労働政府(実はカダル政府)は、だから地域的労評の解散を勧告し、工場労評の正しい発達を援助するよう指令したのです」(九一〜九三頁)

カダル政府自身これをもっとはっきり次のようにいっています。
(十二月九日付声明)「——数日前、政府の知らぬあいだに労働者評議会の地域的な機関が設立された。革命労働政府(実はカダル政府)はそうしたものは認めない。とくにブタペスト労働者評議会は政治的問題だけを論議しようとし、新しい国家権力機関を樹立しようとした。ブタペストその他の地域的な労働者評議会は違法の組織であるから、その活動を停止するよう申入れた。」
この二つの引用の中には、スターリン主義自身が語る、おどろくべき自己矛盾が示されています。以下にその反証をあげてみたいと思います。

A デブレツェンでは評議会は一〇〇名の評議員よりなり、その六〇%は学生、あとの二〇%は兵士の代表であつたといっています。大ブタペスト中央労働者評議会の副議長F・テケはまたいっています。「私は黨員であつた。——それぞれの職場が二人〜三人の代表員を評議会に送り、管理部門も同様だつた。二十五人のテレフォン工場の評議会メンバーの十九人〜二十人は労働者であつた。何人かは活動的の黨員であつたが、彼らがいづも労働者を支持したので労働者は信頼していた。彼らは自分自身の工場で今は働いているのだという感情で働いていた」(『批判と展望』第二号、六一〜六三頁)

これで評議員が「昔の株主だとか、反動的な連中でした」というデマは根拠のないことがわかんと思えます。

B スターリン主義者指導部の反労働者のな抑圧をはねのけ、はじ

めて、真に生産を自分の手で管理しようと要求している工場、地域の労働者評議会が、すでに反乱の過程で無くなっている政府の経済行政の諮問機関にとどまっていることができないのは当然であったわけです。カルダ政府とソ連軍による全国評議会への弾圧は、したがって、ただ「違法」だという口実からだけやられたのでした。これが、十一月二十一日の第三次介入ともいえるべき反動的な行動です。カダルは工場評議会が実質的に唯一の労働者の代表団であるから相手にせざるをえなかったが、それが地域的に結合して、政治的な要求をすることを禁ずるといふ矛盾におちいったわけですから。労働者が「勝手に」（何度でてくるのか！）労働者民主主義をつらぬくのは全く勝手なわけです。ロシアのプロレタリアは勝手にツァーを打ちのめしたのですから。

C 労働者評議会と革命評議会は、革命の中で密接な関連をもっていました。多くの都市で革命評議会は労働者評議会の代表者によって選出され、また大部分は労働者であった。労評は戦闘的なストライキ委員会であり、革命評議会は反乱本部だったので。だからこそ、次のようなアップピールが続々と発せられたのです。

「ソヴェト兵士諸君！ 諸君の国家は諸君が自由を得るために流血の闘争という代償を払って樹立されたものだ。今日はその革命三九周年記念日である。なぜ君たちはわれわれの自由を押しつぶそうとするのか？ 諸君は諸君に対して武器をとっているものが工場所有者やブルジョアジイではなく、ハンガリア人民であること、一九一七年に諸君がそのために闘ったのと同じ権利のために闘っている者たちであることを自撃しているではないか？—兵士諸君？ ハンガリア国民に対して武器をとるな！」

ようにカダルと帝国主義者との衝突ではなかった。帝国主義者のいうように、共産主義に対する愛国者の戦いでもなかった。それはまさにスターリン主義者に対する革命的労働者の蜂起であったわけです。ハンガリアの労働者に対しては、カダル政府と国家保安警察およびソ連軍であった。第一次介入後にはソ連軍の一部でさえ反乱側に転じたという事実さえあったのです。

もう一つ、日本と世界のスターリン主義者たちが、あのハンガリアの革命的反乱をファシストの暴動であるというふうにする根拠として次のようなことがあげられています。つまり帝国主義者どもは、あの反乱を抑圧したソ連の介入に抗議した。従って平和のいい手であり社会主義のいい手であるといわれている各国共産党指導部とは反対に、帝国主義者即ち「敵」によってあの革命は支持されていじやないか、だからあれは帝国主義者の陰謀なのだというふうな口実をつくるのです。敵が支持して、平和の味方、が反対した事は反革命だというわけですから、よく考えてみると、あるいは冷静な目であの事象を見てみるならば、帝国主義者自身が決してあの革命を、つまり労働者の権力のための闘争を支持したわけでは決してなかった。ただ自分の階級的な貧欲な立場から、スターリン主義者の行為を政治的に非難し、攻撃したにとどまっただけです。そのことをもう少し現在の時点で見れば、たとえば東ベルリンと西ベルリンの労働者が実際にスターリン主義者ウルフブリヒトから抑圧され、西ドイツの帝国主義者アデナウアーに抑圧されているという事象の中で、東ドイツないし東ベルリンのプロレタリアートがほんとうにみずからの権力をうちたてるための闘争に立ち上ったならば、それは即座に西ドイツのプロレタリアートの闘争を巻き

「ドウナペンテレはハンガリアでもっとも社会主義的な都市である。住民の大多数は労働者であり、権力は労働者の手中にある。十二月二十三日の勝利的革命の後、労働者は国民委員会を選出した。——都市の軍事司令官は国民委員会に緊密に協力した。——町の住民は武装されている。——労働者はファシストの行きすぎから町を防衛するであろう。しかしソヴェト軍隊からもまた防衛するであろう。」

（十一月七日、ドウナペンテレ守備隊に対するソ連軍の最後通牒への回答）

「同志諸君！ 再びわが不幸な国において、血が流されている。ソヴェト連邦の指導者はスターリンとラコシのテロリスト的な植民地政策を復活させた。かれらは、われわれがかれらと友好的に交渉しようよびかけているのに、われわれを裏切った。かれらの戦車と大砲は再び大虐殺を始めた。——このような残忍な行動によって、かれらは共産党が将来わが国で公然と誠実に存在することを不可能ならしめた。

ヤノシユ・カダルとかれの組織した党は国民と世界を愚弄しようとするかもしれない。しかし、ロシアの大砲がハンガリアにおける民主主義と共産主義を破壊しつつあるのが事実である。占領軍と、いかなる方法によるうとも、いかなる党の名目によるうとも協力するものは、ハンガリアのみならず共産主義をも裏切るものである。われわれはかれらと闘うであろう。同志諸君！ すべての誠実なハンガリア共産主義者の場所はバリケードである。」（ライク放送）

これこそ真相なのだ。ハンガリア革命はスターリン主義者のいう

起こすであろうし、従って西ドイツ、あるいは西欧ブルジョアジイの存立を危うくするような革命的な反乱に転化するであろうということからいえば、決して東欧あるいはスターリン主義諸国の労働者の反乱を帝国主義者は支持することはできない。彼らの支配階級的な立場から、国家権力のテンブクは決して支持することができないものであるということがわかると思うのです。

つまり、帝国主義、あるいはスターリン主義者そのもののこのような歴史的な偽造、歴史のねじ曲げの中で、はっきりわれわれはハンガリアの労働者の立ち上がった意味と、その敗北の教訓を学びとらなければならぬし、そのような支配階級の歴史的偽造の暗雲を払いのけてほんとうの姿をそこから引き出さなければならぬと思えます。しかしそれは、たとえば私自身の経験からいえば、日本における反スターリン主義運動、日本における革命的共産主義運動の一步步々の中で、ほんとうの姿がわかってきたし、それだけではなくて、われわれの運動そのものがハンガリア革命の光によって、その展望を切り開いてきたし、われわれの一步步々がさらに逆にハンガリア革命の問題点をめぐり出して、われわれはただあの革命の意義を云々するだけではなくて、なぜあの革命が敗北したのかという点に対して、革命のプロレタリア党のための闘争の立場からその問題点、欠陥の批判を行なってきたということができると思えます。

II 労働者評議会——その形成上の問題

ハンガリアの労働者がなぜ革命的評議会を形づくっていったかということの中に、一つには一九一九年のあの革命的労働者評議会の

権力の樹立の経緯だけではなくて、実際にはユーゴスラビアの労働者評議会を不十分な情報をもとにして即座に学びとった、あるいはモデルにした、それから六月二十八日にはあのボズナン、あるいは十月のポーランドの政変の中で形づくられていったところの労働者評議会をモデルにして自分の労働者評議会をつくってきた、そこに僕は一つの問題点があるだろうと思うのです。

ポーランドの事象の中で、ゴムルカはどういうことをやったかといえ、革命的な反乱の中で形づくられてきた労働者評議会を単に工場の評議会というものの中に閉じ込めて、しかも評議会とは名ばかりの、実際政府が計画した生産計画をただ実践する、それを遂行する、そのための単なる諮問機関にすぎないという位置に限定していく。実際自分はポーランドの党の中のスターリン主義者を一定部分追放することによって、一方はフルシチョフに向けて、ポーランドではこのような革命的な情勢があり、プロレタリアートが立ち上がっている、だから譲歩しろ、逆にポーランドのプロレタリアートに対しては、フルシチョフがわれわれをこういうふうな恫喝している。だから下手なことをやると大へんなことになるじゃないかというふうにして、労働者評議会の革命的な蜂起を抑圧し、単なる経済的諮問機関に限定していくようなやり方があったわけです。そういう誤まりが実際にハンガリア革命の中においても、労働者評議会の限定された一面として出てきたということがいえると思うのです。

さらにユーゴの労働者評議会を見るならば、実際あのチトーの胸のずらりと並んだ勲章を見ればたちどころにわかると思うのです。が、労働者評議会そのものが権力の基礎になっているのでは決して

ない。それはポーランドのゆがめられた労働者評議会です。長年形骸化した形で運用しているにすぎない。労働者評議会相互の間には壁があって、お互いの生産計画を超過遂行する競争がなされ、自分らの中で使っている技術的な優位性を、お互いに隠蔽し合うといったような分散的なものであり、労働者評議会そのものが、真のプロレタリアートの独裁の機関となることを、ハンガリアの労働者がこの二つの例から学びとるためには、きわめて不十分なモデルであったといわなければならぬと思うのです。そういう一つ一つのきわめて困難な状況があった。にもかかわらずハンガリアの労働者はゴムルカ的な中間主義を許さず、武器において全く雲泥の差のあるソ連軍に立ち向かって闘ったわけです。

実際に反乱はどのように進んでいったかという点を基本的な点で述べてみたいと思うのです。十月二十三日にデモが起こって、それに対して秘密警察隊員の発砲、それから反乱という事象の中ではまだ実際に労働者自身が状況の本質を見抜くことができなかった、まだ労働者評議会そのものは形づくられていなかった。しかしながらそこにソ連軍が介入し、徹底的な虐殺を開始したときに、情勢に押されて、何よりもまず生命を守るためにまずから武装した。そう言った、つまり反乱の中からハンガリアの労働者評議会がつくられていった。二十五日以降統々と、各地で個別的な労働者評議会が武装闘争と並んで形づくられていった、だがそれを革命的な展望のもとに労働者権力に結合するというプログラムを持った政治組織は一つもなかった。そういうグループではなくて、インテリゲンチヤと学生のペトフィサークルという一つの団体が、その場になってようやく労働者評議会というものはどういうものであるか、ユーゴス

ラビアやポーランドの労働者評議会は一体どんなことをやったのかということや日夜、長い時間を費して討論しているという状況であつたわけです。にもかかわらず、その闘いのあまりの苛烈さに驚いて、スターリン主義者たちは、かつては最も右翼的だといわれて批判されたナジ、最も優柔不断なナジを、大衆の人氣を利用して登場させた。しかしナジがつくった政府は、全く労働者評議会から切断されていて評議会を交渉団体とみとめていたにすぎなかった。ただ閣僚をナジが集めたにすぎなかった。先ほどストライドで、ナジがどのように消耗した顔つきをしていたのは、全く労働者評議会と切断了な地域で、全く無理な状況の中に押し込まれたのを表現していると思うのです。従って、よくスターリン主義者たちが、ナジがファシスト反乱、あるいは反革命的な道にハンガリアの人民を導き込んだ、といっていますけれども、決してそうではない。ナジの提起したさまざまな民族主義的、中立主義的あるいは改良的なプログラムは、すべてソ連軍の第二次介入によって粉砕されていき、すべて実現できなかった。従って最初にナジに対する幻想があったわけですが、それもソ連軍の介入そのものによって徹底的に粉砕されてしまった。にもかかわらず、労働者評議会を自身があるいは各工場の各地方の段階にとどまっていた。相互の連絡がとられ結果されるためには戦闘があまりにも激し過ぎた。従ってそういう方向に組織が進んでいくということが遅れたわけです。その過程の中で、実際第二次介入が準備されていたわけでは

最初ナジ内閣の中にカダールがいたわけですが、それが急にその介入の前になくなって、また別のところに、全く労働者評議会を無視して、一つの政治グループを集め、それをさうさうしく

も労働者農民政府というふうと呼んで、ソ連軍の援助のもとに新たな弾圧を開始したわけです。そういった二つの、きわめて残酷な虐殺行為の過程で、それまでナジに対して持っていた幻想は、一切打ち砕かれた。その上に立って労働者は各地で形づくられた、労働者評議会、あるいは革命評議会、あるいは兵士評議会、農民評議会を全国的な規模に結集していかなければ、自分の利益、あるいは自分の生命すらも守ることができないということを、抜き差しならなく感じとっていったわけです。従って、十一月四日の第二次介入、カダール政府の設置のあとになって初めてブダペスト労働者評議会が結集されるという事態の中にそういうことが示されていると思うのです。その中で、これは一九五六年になって初めてのことですけれども、工場を実際に労働者の手で握る、あるいはあらゆる社会的その他の諸機能を自分の手に握る、社会そのものを、そのにない手であるところの労働者自身が、自分の意思に従って計画し、取得していく、そういうことがなされていったわけです。初めて真に労働者が自分の生産手段を自分の目的のために運用したという、実に社会主義とか人民民主主義とかいわれてきた国にとっては、驚くべき事実がそこに現出したわけです。のみならず、自衛した労働者、兵士、学生の革命評議会は、最も残酷な虐殺の先頭に立っていた国家保安警察をすべて武装解除し、解体していった、それからスターリン主義諸国の軍事同盟であるワルシャワ条約機構から脱退するということを、ナジのさまざまな改良的幻想的なプログラムを乗り越えて実現していったわけです。その中で十一月二十一日、全国の評議会代表が集まり、ナジやカダールの政府ではなくて、それにかわるほんとうのみずからの権力機関を生み出すべく、その会議が

計画されていたわけでは、しかしながらその全国評議会結集過程の中にも、さまざまな労働者自身の中における対立と理論的混乱その他のきわめて深刻な諸問題があったわけでは、それはたしてカダール政府に対してみずからが国家権力となって労働者権力を樹立し、カダール政府をぶっ飛ばしてしまおうか、あるいはそこに自分の要求を突つけて、自分のさまざまな要求を実現させるか、つまりカダール政府との妥協のための交渉機関にするかという問題で盛んに論争、あるいはきわめて深刻な分裂をも含んで論争がなされていたわけでは、にもかかわらず、結集されかかっていたところのその労働者全国評議会、ロシア革命でいうならば、各地ソビエトを中央権力に向かって組織していったレーニンのプロレタリア独裁権力にも匹敵すべきハンガリアにおける全国革命評議会の結集のまさにその時点において、これはきわめて普通無視されているわけですが、ソ連軍がさらにもう一度その集会を解散させた、そしてその代表を逮捕したという事態があるわけでは、だからこれはいわば第二次介入に継ぐ第三次介入ともいべき事態だったわけでは、

その中央評議会が粉碎されるという事態の中でハンガリアの労働者は最後の武器であるゼネストに突入した。その過程でも全国評議会に代表として派遣されてきたメンバー相互の間やそれを送ったメンバーとの間に意見の対立があった。実際に反乱の中で闘い、工場を防衛し、労働者評議会の形成者である労働者と、全国評議会を形づくろうとして代表として派遣されたメンバーの中には、意見の対立がかなり深刻な形で起こっていた。こういったソ連軍とカダール政府の攻撃のもとでは、ストライキをやっては自滅するのではないか、あるいは、そうではない、徹底的に最後までカダール政府をぶ

衝的グループ、あるいはわれわれの日本における革命的共産主義運動の前進が、真に反帝、反スターリン主義的世界革命の中で、かたい団結のもとに合流するであろうことが絶対間違いのない事実となるようにわれわれの今後の闘いでそれを保証していかなければならぬいだらうと思えます。

中央労働者評議会が実際に粉碎され、各地の労働者評議会が政治権力を追求することができなくなつたあとになつて、カダールはポーランドにおけるゴムルカと同様の裏切りのことをやっていく、労働者評議会そのものに圧迫を加えつつ、スターリン主義的な代表をその中に送り込んでいく、革命的な労働者評議会を裏切らせていく、ポーランド的な状況に追い込んでいく、のみならず、そういった状況にまでもなお各地の労働者評議会の抵抗があつて、最後に十二月九日にすべての労働者評議会を禁止し戒厳令をして、その責任者を逮捕するといった最後の弾圧を行なっていくわけでは、

今、労働者評議会の一つの結集過程、及びそこに存在するさまざまな問題を指摘しましたけれども、それは最後に、やはり労働者権力に向かって自分の闘いを組織していくための前衛党が欠如していたという点にしばられる。それは実際にハンガリアにおける前衛的な労働者が、ラコシによる弾圧、あるいはさまざまな投獄、虐殺の過程のなかで、レーニン主義的な潮流がすべて抹殺されていたという事態、(革命的な共産主義者とスターリン主義者との分裂がほとんど不可能な事態)、真に革命的な前衛の創設ということにとつてきわめて困難な状態が生み出されていたという歴史的な前提を持つていただらうと思ふ。従つて、最後に残つた「良心派」といわれる者が、あのように中間主義で平和共存主義者であり、一国社会主

つづぶすまでストライキを続けるべきであるというきわめて深刻な意見の対立があつた。従つてその最後の抵抗であるところのゼネストを指令する部分と、それをやめるべきであるという部分が分裂しています。さらにそういったゼネストを実行して、あくまでも自分の要求をかち取るうとした代表たち、最も窮地に追い込まれた部分、実際にカダール政府によって逮捕されるかあるいは亡命せざるを得ないという事態の中で、ハンガリア革命が悲劇的な敗北をこうむつていくことになつたわけでは、にもかかわらず各地で、これは個別分散的ではありませんが、十一月の末あるいは十二月あるいは一月をこえて、まだ反乱がくすぶり続け、炭坑の坑内で抵抗を続けるとか、さまざまな熾烈な闘いが組まれ、五七年に、ナジが実際にカダールの手で処刑されるそのあとでもずっと続いていったという事態がみられた。全く武器のないプロレタリアが闘わなければならなかつたという悲劇的な状況であつたがゆえに、自分のやつた革命について、ハンガリアのプロレタリアートあるいはハンガリアの革命家たちはなかなか本質をみずからつかむことができなかった。であるがゆえに、亡命者の中には反共的なあるいは社会党的な転向者となるか、あるいは長い間理論的な苦悩を続けるという事態が起つたわけでは、しかしながら最近に至つて、これはわれわれがみずからの運動の立場からハンガリア革命をとらえかえし、それによつてつかんできた諸教訓、つまり最後の要約点、反帝国主義的、反スターリン主義的な前衛党が欠けていたという地点、そういった地点からハンガリア革命をとらえ、総括するといった立場の全く同一なハンガリアの革命家たちが実際に結集されつたことを報告することができると思ふ。われわれは必ずやこういった前

義者であるナジのような人間しか残すことができなかったということ。しかしながら、あのような無力なナジであつたがゆえに、ポーランドの有能な中間主義者である、ゴムルカのような人物を生み出すことができなかったがゆえに、ハンガリアの反乱はとことんまで押し進められなければならなかつた。だから、われわれの現代革命の展望でありプログラムであるところの反帝、反スターリン主義的な闘いとことんまで押し進めなければならなかつた。問題をきわめて鮮明に悲劇的な犠牲の中で明らかにせざるを得なかつたということができると思ふのです。だから、先ほど報告したハンガリアの亡命家自身が、自分たちのやつた革命というものは、帝国主義者とスターリン主義者と同時に対立する闘いであつた、しかしながら、やはりそれを指導する前衛党を追及することがなかつたから敗北し失敗する結果になつたと、自己批判的に総括を開始しています。それは労働者評議会が自然発生的あるいは自発的につくられていく過程の中で、中央権力にそれを指導していくことができなかった、ナジ政府に対して最後まで交渉相手として自分の要求を実現させようとしてふるまつた、第二次介入以後は、さらにカダールあるいはソ連軍の攻撃に対して、有効な攻撃とあるいは後退戦術をとることができなかった、ゆえに、最後に労働者評議会そのものをも裏切させられ、解散させられ、粉碎させられなければならなかつたというふうに総括しています。

最後に幾つかのエピソードを紹介してみたいと思ふのです。さつきスライド中に少年がいましたが、実際に小学校の生徒まで戦闘に参加した。学生よりも非常にうまい戦車に対する闘争を行なつた。火災びんを、モロトフ・カクテルといふますけれども、それで粉砕

するやり方が非常にうまい。お前たち、それをどこで一体習ったのかと言ったところが、小学校で体操の時間などで、先生が、帝国主義者が来たところやって戦車を攻撃するんだというふうに、盛んに「若き親衛隊」などというスターリン主義者の書いた小説を紹介しながら教えてくれたと言っているのです。

それからさらに、ハンガリアの事態を表わした詩がありますけれども、その詩によってうたわれていきますように、実際にソ連の兵士自身はかなりハンガリアの労働者の前で、フアシストをやっつけに行くんだと言われて来たところが、実際労働者と人民なので転向していく、反乱側に参加するといったソ連兵士の混乱の事態があるわけですが、さらにそれだけではなくて、ソ連の労働者自身がハンガリアのあまりの荒廃の中、あるいはカダール政府がとらえた戦術的な労働者たちがソ連に強制送還されるときに、実際にサポータージュを行なって協力している。それからソ連圏内部では賃上げのサポータージュやストライキ、そういったものが五六年段階で同時に行なわれていたということを見ることも非常に重要だろうと思うのです。

現在のハンガリアはどうなっているかといえば、実際にまだカダールは居すわっているわけですから。反乱の過程で最も反動的な役割を果たした部分が、ついこの間党から除名されるといったような、つまり反乱以前の党の残存分子を集めたような党が、いまだにハンガリアの現実を牛耳っているという事態なわけです。従ってハンガリアでは政治的な発言はあまりすることはできない。すればいまだに続いている政治的な抑圧が行なわれるわけです。ダニューブ川にかかっている橋のたもとにライオンがすわっていて、このライオンに舌がない。これはハンガリアの反乱の過程で舌だけ飛んでしまった

解放運動の思想としての共産主義をこのように汚し、墮落させていることを僕はその話を聞いて痛感せざるを得なかったわけです。この方法を帝国主義者は、スターリン以来自分の政治的な路線の基本に据えている。ほんとうに共産主義革命をやって、プロレタリア解放をかち取るのだというプロレタリアートに対して、何を言っているのか、スターリンを見なさい、ソ連を見ろということで自分の宣伝を開始し、階級闘争の意識を混乱させること、これが帝国主義者の戦術家が目ざすこと、スターリン主義体制、なかんずくハンガリア革命の中で学び取った帝国主義者の教訓だろうと思うのです。僕はこういって事態を十分にかみしめて——もちろん小話だから笑いが起こったって不思議はないけれども、こういった事態の中から先ほどから集約してきた一つの地点、真に現存のすべての抑圧からみずから解放するプロレタリアートの闘いは、帝国主義者とスターリン主義者を同時に徹底的に粉砕し尽くす、しかもそういったプログラムを持った世界革命の党、プロレタリア党をつくらなければならぬというこの一語に集約される教訓を、やはり深刻に学び取り、われわれの運動の中において、その問題を一つ一つ解決していくことが、レーニンのいうように、われわれのロシアハンガリア革命を最もよく記念することだと思ふのです。

のだからと思うのですが、それはやはり政治的に舌を抜かれたハンガリア人民の気持をよく表わしているというエピソードがあります。

さらに、最近このような敗北した反乱のあとに自殺率がきわめて高くなったわけですが、教会に人があふれる、従って教会自身が一つの逃げ場になっていくという事態が生まれているわけです。それを一つの小話にして、「カダールさん、教会へ人が集まって困るそうですね。いい方法を教えてあげましょうか。」「ぜひ教えて下さい。」「教会にスターリン像を置けば一気に解決します。」そういった小話が生まれている。

さらに日本のテレビ・カメラマンが最近のハンガリアを撮りにいったときの話があります。そのときにプタペストのレストランにバンドマスターがいた。「一体資本主義と社会主義と共産主義というものはどう違うのかね」とう聞いたところ、「資本主義は、私のもらったチップを全部私が一人占めするものだ、これが資本主義だ。社会主義は、私のもらったチップを全部平等にバンドマンに配るのが社会主義だ。ところが共産主義はそれを一たん渡したのを全部取り上げてしまうのが共産主義だ。」(笑声) 私はしかし笑いごとではないと思うのです。ヨーロッパにおいては、このようにコミュニズムがスターリン主義の現存社会の内容を与えられて、プロレタリア

ハンガリヤ革命日譜

1953年3月～1958年6月

4・7	ボラーランド統一労働者党大会でゴムルカの釈放、各党回復を發表
6	元社会黨員ゾルタン・ティルデイ、ベラ・コヴァチその他が釈放される
5	コミンフォルム解散
17	チトーのモスクワ訪問、ソ連、ユーゴ会談
28	ボラーランドのボズナンで暴動
29	ジャーナリストの集会、報道の自由などを要求
30	勤労者党中央委員会、煽動者たちを非難する決議
8	恩赦および集団的復権の諸措置が実施される
11	ラコシ解任、エルンスト・ゲレが第一書記に任命
18	作家たちが全面的自由を要求
9	ライクとその共同被告のための再埋葬式20万の市民参加
10	フルカス將軍の逮捕
13	イムレ・ナジの復権
14	ゲレを団長とする政府代表団、ユーゴへ出発
15	フルシチョフ、突如ワルシャワ訪問
19	ショールで市民がソ連軍基地撤廃などを要求して集会
21	ブダペスト工科大学寄宿舎学生アツピール、教育相はロシア語を必修科目から除くと發表
22	ポーランド統一労働者党、ゴムルカを第一書記に選出、「スターリン派」一掃
23	ブダペスト、セゲド、ベチの大学生デモの最後通告
24	ペトローフィサークラ10項目の要求決議、工科大学でD I S Z 集会16項目決議、デモ決定
	ブダペスト市民のデモ、暴動化
	ナジ首相に任命される、ソ連軍出動

25	ゲレ第一書記解任、後任ヤノス・カダール
27	内閣改造、元小地主党ゾルタン・ティルデイら入閣
28	戦闘一部を残して終る
29	政治警察廃止
30	単一政党制廃止、名政党再建
31	内閣改造、連合政権
1	テロ各地で荒れ狂う
11	ソ連政府、社会諸国家間の平等に関する宣言發表
	ミンゼンティ大司教釈放
	英仏軍エジプト攻撃を開始
	ハンガリアの中立宣言、国連へ要請
	カダール、新党、社会主義労働者党を結成
	アイゼンハワー大統領、ハンガリアに二千万ドルの援助提供申し入れ。国連安保理、ハンガリア問題を採択
	ミンゼンティ大司教放逐
	新聞僚發表、マルテル国防相として入閣
	カダール政府樹立、綱領を發表
	ソ連軍第二次介入
	国連ハンガリア問題で緊急総会
	ブルガーニン書簡、ロケットの使用を示唆
	スエズ戦争終結
	チトーのプーラ演説
	ブダペスト中央労働者評議会結成、ゼネスト続く
	ソ連ポーランド会談、共同コミュニケ發表
	ナジ前首相、ルーマニア連行事件
	あらゆる革命委員会に即時解散命令
	国連総会14カ国決議案可決

3	スターリン死亡
5	総選挙(人民戦線「統一候補者による」)
6	東ベルリンで暴動、戒厳令しかる
7	勤労者党、自己批判を含む新方針發表、党の再編成
8	イムレ・ナジ内閣成立、新政策の実施發表
9	ソ連共産党、ベリア副首相兼内相を除名
10	恩赦、強制収容所と居住制限の廃止
11	ラコシ内閣総辞職
12	ハンガリア・ユーゴ間の国境紛争取締り協定成立
13	閣議、重工業投資引上げ、軽工業、農業優遇の措置發表
14	元人民警察總監ガボール・ペテールに終身刑
15	新「人民戦線」の設立
16	「無実の罪を着せられた者」の復権發表
17	欧州安全保障モスクワ会議開く、西欧パリ協定に対抗措置検討
18	ラコシ、工業化の必要を力説
19	マレンコフソ連首相解任、後任ブルガーニン
20	イムレ・ナジは右翼偏向であるとの中央委員会決議發表
21	ナジを政治局と党から追放、後任はヘゲディツシユ
22	ソ連と東欧七カ国、ワルシャワ条約に調印
23	ユーゴ・ソ連首脳会談終了。関係改善に共同宣言發表
24	黨員作家の反党的「反逆」行為に関する發表
25	ソ連共産党20回大会開く、フルシチョフ報告
26	ラコシ、個人崇拜を非難
27	ラコシ、演説でライク復権を主張

戦闘的労働運動の防衛と前進のために

産別機関誌を読もう！

- 国鉄委員会 橋頭堡 ■ No. 14 ¥ 30(〒10)
- 全通委員会 ザイル ■ No. 28 ¥ 20(〒10)
- 全電通委員会 戦列 ■ No. 8 ¥ 60(〒20)
- 教育労働者委員会 教育労働者 ■ No. 15 品切れ
- 都労連委員会 弾機 ■ No. 8 ¥ 50(〒20)
- 電機労連委員会 ダイナモ ■ No. 15 ¥ 30(〒10)
- 化学委員会 鉄鎖を砕け ■ No. 3 ¥ 30(〒10)
- 関西電機委 組織者 ■ No. 5 ¥ 30(〒10)
- 関西教労委 先駆者 ■ No. 7 ¥ 20(〒10)
- 国鉄大阪マル研 くれない ■ No. 11 ¥ 30(〒10)

1958										1957														
22	19	18	8	31	23	21	11	9	7	5	3	2	15	20	18	17	10	28	19	12	9	8		
ブルガーニン解任、フルシチョフ首相に就任 フルシチョフハンガリアで演説 ソ連共産党機関紙、ユーゴ共産主義者同盟綱領を批判 ユーゴの党大会に各国共産党代表派遣を拒否 ユーゴ共産主義者同盟大会開く、綱領採択					64 国共産党会議平和宣言 社会主義圏12カ国共同宣言、ユーゴ不参加 会設置					労働者党中央委員会、当面の諸問題と任務に関する決議 ソ連・ハンガリア共同宣言 ソ連・ハンガリア駐留協定調印 ソ連四幹部解任 ハンガリア政府、労働者評議会を解体、代りに工場評議会設置					国連総会24カ国決議案可決、五カ国委員会設置 中国・ハンガリア共同声明 中・ソ共同声明 ポーランド総選挙でゴムルカ圧倒的勝利 シェピロフ外相解任、後任グロムイコ 国連調査団中間報告					社会主義労働者党中央委員会決議、ハンガリア白書発表 ブダペスト中央労働者評議会48時間ゼネストを指示 政府、戒厳令をしき中央評議会に解散命令 国連総会28カ国決議案可決 経済計画委員会設置、労働者評議会のメンバー加わる 人民日報「再びプロレタリアート独裁の歴史的经验について」発表				

季刊 共産主義者別冊

■発行日／一九六六年十一月七日

■編集／革命的共産主義者同盟 全国委員会・政治局

■発行／前進社／東京都豊島区 東池袋二の六二の九 佐藤ビル内

■定価／二〇〇円／送料 五〇円

1958									
17	15	6	3	28	24	20	5	6	5
人民日報、現代修正主義を批判した論文掲載 東欧8カ国経済相互援助会議 ワルシャワ条約国会議 ソ連、ユーゴへの借款使用延期を申し入れ フルシチョフ首相、ユーゴ非難 ユーゴ、対米関係緊密化を要望 チト、中国の指導者を非難 イムレ・ナジラの死刑発表、ハンガリア司法省判決文を 発表									

訂 正

六九頁と七〇頁のナンバーが入れちがっています。また目次に「4 (頁)、ハンガリア革命論 広田 広」が脱落しています。したがって目次にある広田論文の頁は一一八頁です。右おわびの上訂正いたします。

(編集部)

マルクス主義青年労働者同盟
全国機関誌

最 前 線

たたかいの中から生れた
若きプロレタリアの
たたかいと学習の指針

月刊・50円

■購読料

1ヵ年600円(〒100円)

6ヵ月300円(〒50円)

労大出版部

豊島区池袋東1の50

佐藤ビル内

前線

革命的共産主義者同盟・全国委員会機関誌

■購読料(各送料共)

20週……四〇〇円

40週……八〇〇円

見本紙贈呈

■週刊・月曜日発行

定価 一部二頁 十円

四頁二十円

日本革命運動の

新時代をひらく

闘う労働者の新聞

東京都豊島区池袋東
1の50佐藤ビル内

前 進 社

電話(064) 8 6 5 1(代)

振替 東京 8 8 8 5 7